
短編集だよAPH!!(腐)

美奈夜

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

短編集だよAPH!!（腐）

【Nコード】

N5150N

【作者名】

美奈夜

【あらすじ】

アーサー総受けです その他はありえない
ギャグ、シリアス、甘々色々書く予定です
マイナー王道なんでもあり

● 〓 ギャグ 〓 オリキャラあり ○ 〓 シリアス 〓 ほのぼの？

〓 替え歌 □ 〓 パラレル

オリキャラ紹介（以後増えるかも）（前書き）

オリジナルキャラとか苦手な人はさけた方がいいです

オリキャラ紹介（以後増えるかも）

マイラ・カークランド（女）

永遠の13歳だよ！↑

ちよつと茶髪っぽい黒髪に茶色の目

髪の毛やけちゃったんだよ ドライヤーとかで

今は大雑把 髪の毛なんて乾かさない

右目を前髪で隠してる

実はオッドアイ 右目が碧翠

眉毛ちよつと太い 一般に比べると太い でもアーサー程じゃない

眉毛が太いって言われるとちよつと怒りながらちよつと喜ぶ

アーサーみたいな事言われて嬉しい 最近しゃべり方がアーサーっぽい

服にもこだわらない ユニオンジャック柄のTシャツetcは是非欲しい

オタクです、はい 漫画アニメ大好き！！！！な娘です

亜に目系（何故か変換される）は聖地 っていうか二次元関係の所は全部聖地

腐女子 すっごい腐女子

アーサーは受けだと信じている（ていうかこの小説は基本英総愛されなんかいきなりトリップしちゃったからアーサーの家に居座ってる

基本恋愛に興味はない BL？どんとこい

最近アルフレッドも大丈夫になってきた

一人称いっぱい バリエーション豊富だお↑

だが『私』だけは言わない 『あたし』ならいける

マイナー王道何でもこい！！ でも日英は何か違う にっさまは腐

男子だから第三者がいいと思ってる

2525 動画最高！ 素敵サイト様最高！

腐女子万歳！！↑

ちょっとネガティブ 脳内すごいネガティブ
口悪い 女の子らしく？無理、絶対。

アーサーの家では主に料理担当

それ以外はアーサーできちゃうから アーサーもレシピ通りに作ると上手い

家の中はだいたいパジャマ それか家着 眼鏡かけてるよ！！

読者の気持ちを尊重します

ちなみに恋愛はあり得ません

最近登場したマイカ君は双子の兄貴

マイカが来て一週間くらいはマイカにべったりしてた 寂しかったから

そうだよ、ブラコンなんだよ！

マイカ・カークランド（男）

こちらも永遠の13歳

目の前でマイラが消えたのを目撃して次の瞬間にはマイカもトリップしていた

髪、瞳の色はマイラと同じ 髪分け目も一緒

髪は肩に付くか付かないくらいで、すこしばさばさ

マイラと同じく右目は隠してる やっぱリオッドアイ 碧翠色

結構物わかりがいい

腐男子 すっごい腐男子

オタクをなめるんじゃないやねえぞ！！男同士の何が悪い！！

でもマイラに受け顔って言われる

お前もだろ（マイカ談）

料理は得意だと思う 明るくていいお兄ちゃん

リア充？爆発しろ^^

アーサー大好き 家族愛的な意味でも腐的な意味でも

え、UKって受けの略称だろ？みたいな

紳士でも女性でもましてや敬語を使う必要もないから一番キレると

すごい

主にスラングが

でもマジ切れしたアーサーには敵わない、無理、絶対。

トリップして一週間ぐらいはマイラがべったりしてきてた

駄菓子菓子、こいつもシスコンだから問題ない

普段着はパーカーかジャージ

特にパーカーは重宝してる

あつたけえよ、あれ

どっちかっていうとポジティブ でも時々病むのは仕様

フランスに対してとにかく酷い 色々酷い

家ではマイラやアーサーの仕事を手伝ってる

やることがないときは買い出しか家でごろごろ

家族は甘やかしたいタイプ とにかく甘やかす

身長はマイラよりやや大きめ 160cmくらい（ちなみにマイラ

は155cm）

笑顔でさらつと黒いと言える人

運動するのはあんまり好きじゃないけど運動神経はいい

基本は大雑把だけどへんなとこで細かい ギルみたいな

ちなみにこいつも恋愛フラグはたたない

やっとわかりあえたね（神英）（前書き）

えっと、捏造人名がでています

シルヴィオ・バイルシュミット〓神聖ローマです

センスがなくて激しくごめんなさいorz orz orz

やっとわかりあえたね（神英）

朝、目が覚めた

皆さん朝です、希望の朝です

でも夢もいいですよ、希望だよ

このまま起きたくない気持ちと起きなきゃいけない気持ちが喧嘩してる

ああ、アーサーにご飯作ってあげないと

あたしの最優先はアーサーだし

ほっとくとなんにも食べないし

・・・いやあたしがアーサーをほっとくわけないでしょ

だってあんなに可愛くてかつこ良くて綺麗で強くて儂くて脆い人

ほっとけるわけないじゃん

だから今日も作りにいきます

「アーサーご飯できたよ」

マイラの声が部屋に響いた

本人は大きな声は出していない

マイラの声は澄んでいてよくとおる

「ああ、ありがとな」

マイラが家に来てからは、食卓も充実した

一緒に料理を作るとき、俺はレシピを見ればちゃんと作れることが発覚した

・・・自己流は駄目なのか

「それじゃ、食べにいくか」

でも、こいつが作りたいって言うなら俺は

こいつの好きにさせたい

マイラは優しい

マシューやフェリシアーノのように

ギルベルトのように

彼奴等そう言えば何で最近優しいんだろうか

・・・そう言えば結構前からそうだった気がしないでもない

「アーサー？」

「ああ、悪い　すぐいく」

「いいよ謝らなくて！アーサーはあたしに謝らないでいいんだから」

「でもな・・・」

「ここではあたし達家族だよ」

「・・・そうだな」

こいつは家族として側にいてくれる

まあ、時々何か光速でメモしているが、菊やエリザベータも大体そうだし気にしないでおく

「今日は何か予定ある？」

「・・・そういえば、今日はシルヴィオが来るな・・・」

「え、マジで？よかったねアーサー！」

「あ、いや、別に、その、だな・・・」

「いいよいいよ気にしないで！！何時から？」

「大体12時とか言っていた」

「じゃあぴったしだね　あと4時間か・・・」

「掃除とか終わらせないと」

「何か手伝う？」

「それじゃあ・・・洗濯、頼んでもいいか？」

「Yes!! ja!! わかったやつてくる!!」

マイラは飛び跳ねるように部屋を出ていった

・・・あいつどうしたんだ？

ああ本当にアーサーはなんて可愛いんだろう！

シルヴィオが来ることはとっても嬉しいんだから、喜んでいいのにそれをあんなに赤い顔で隠そうとするなんて！！

あの瞳の色も髪の色も肌の色もどこか儚いのに力強い
そしてなにより優しい

こんなに完璧な人間他にいるんだろうか！

まあ、国だけど

なのになんでアルフレッドやフランスは彼をからかうんだ
考えてたら腹がたってきた

駄目だ落ち着け俺お前には今洗濯という使命があるんだ
気を落ち着かせて洗濯にとりかかる

うん、あのね、えっとね、いや、

だってアーサーの下着あるんだが

どうしようこれ、いや洗うしかないけど

うわーうわーうわー何この下着可愛い

ユニオンジャック柄

これ何処で売ってるんだろ、女物あるかな
今度探してみよう

とりあえず部屋の掃除から始めることにした
汚れないようにエプロンをつけに行く

そんなに汚れてないとは思うけど、念のために

・・・シルヴィオ、久しぶりだな

つい最近姿を現したアイツ

俺は本当にいなくなってしまうかと思っていたけど

その反面アイツが簡単にくたばるわけがないとも思った

そして前回の世界会議の日

ウザイくらいハイテンションのギルベルトと何処か嬉しそうなルー
トヴィツヒと

一緒に会議室に入ってきた

一瞬上手く思考が回らなかった

でもアイツだつてわかったんだ

アイツは暫くみんなに囲まれて騒がれていた

俺は椅子に座って持っているカップをおとさないように震える手を宥めることしかできなかった

そしたらアイツ、俺を見つけると笑顔でこっちに歩いて来てみんながそれを驚いて見ていたのを覚えている

俺の前で立ち止まったアイツは、俺の頭を撫でながらこう言ったんだ

『すまないアーサー、心配かけたな 俺はここにいるよ』

あの子の俺は酷かったな

驚きすぎて許容量をオーバーしてしまつて

気付いたらアイツのこと殴ってたな

でもアイツ、それでも笑うから

殴った後で、思いつき泣きついた

本当に会えるなんて思ってもなかったから

あの子はみんなに色々説明するのが大変だったらしい

俺は泣きつかれて寝ていた

・・・ガキか俺は

俺達は昔親友だったことも

最後にあった日、お互いの思いを伝えて、恋人になったことも

それっきりもう会わなかったことも全部説明したそうだ

フェリシアーノやロヴィーノ、ギルベルトはとても喜んでくれたそう
うだ

なんでかはわからない

フランスやアルフレッドは拗ねてたって菊が言ってた

なんでだ？

色々考えていたら掃除が終わった

・・・次はテーブルセットだな

「アーサー、洗濯完了いたしました！」

「ああ、ありがとう 俺も今テーブルセット終わった所だ」

「あと1時間・・・何か作った方がいい？」

「いや、アイツのことだから菓子もってくるだろ」

「そーだねー なんてったってギルとルートの兄貴だしね」

「そうだな」

2人がくすくすと笑いあう

「・・・あのさ」

「？なんだ？」

「アーサー・・・やっぱなんでもない」

「そうか？気になるだろ」

「いや、本当いいから気にしないで」

だってアーサーパジャマだぜよ

いや、昨日はうつすいＴシャツ一枚に短パンだったねそうだね

胸の辺りとかちよつと透けてるとか言わない方がいいね

うん、俺は言わないぞ、腐女子として

そのままシルヴィオにおいしくいたただかれ、ゲフンゲフンなんでもない

チャイム音が響いた

「あ、来たみたいだよ」

「そうだな ちよつと出て来る」

「はい」

・・・アーサー、本当に嬉しそう

アイツに会うのは久しぶりだ

前回の会議に会ったつきりだからな・・・

ああもう鳴り止まれ心臓！

煩い心臓を叱咤して扉を開けた

「・・・よう」

「アーサー、久しぶりだな」

目の前にはシルヴィオがいる

俺の身長を軽くこしてる

・・・前は同じくらいだったのにな
182cmくらいか

「まあ、入れよ」

「ああ、失礼する」

コイツの礼儀正しい所はルートヴィッヒに遺伝したんだろうな

・・・時々騒がしくなるのはギルベルトか

なんかシルヴィオが少し目線を落としてたけど気にしないことにする

目の前にいるアーサーは、パジャマだった

いや、その、なんていうんだ

服の生地が薄いうえにサイズが少し大きいから、華奢な身体のライ
ンが丸分かりなんだが

しかもなんか胸のあたり透けてるよな

なんだ襲ってほしいのか？

いや、アーサーに限ってそれはない

こんな服ならマイラはとづくに気付いている筈だ
もしやわざとか？わざとなのか？

俺に対する試練かこれは

・・・まあ、焦らなくても今日の夜にでも・・・

「・・・あー、久しぶり、だな」

「・・・そうだな 寂しかったか？」

「いや、別にそんな・・・」

「・・・(2424)」

「ああもうなんだよ！笑うなよ！！」

「ああ、悪いな」

「全然そんなこと思ってねーだろ！

なんだよ調子狂うな・・・」

「？そうか？」

「お前と、こんな風に軽口叩き合つたの何年ぶりだと思つてんだ」
「・・・アーサー？」

「なんでもっと早く出てこなかったんだよ、馬鹿」
「お、おい」

「本当に馬鹿だお前 みんなに散々心配かけたんだぞ
特にフェリシアーノなんか死ぬ程心配してたんだからな」
「ちょ、」

「大体なんで俺なんか・・・」

「お前が好きなのはフェリシアーノじゃなかったのかよ」

「アーサー、話を」

「わけわかんねえよ、お前・・・」

「アーティ！」

「っ!!」

俺、泣いてる

目を上げたらそこにちよつと怒つた顔のシルヴィオがいた
・・・怒らせた、よな・・・

いきなりこんな話されたら迷惑だよな

でも、俺だつてどうすればいいのかわかんねえんだ

俺の目を真つすぐ見て、シルヴィオが口を開いた

「悪かつたな、本当に」

「あ・・・」

「俺も最近気が付いたんだ

そして気付いたらどこか暗い所にいた」

暗い、場所・・・

それはきつと、シルヴィオの国だった場所・・・

「とにかくお前を探さないと行けないと思つて外に出ようとした」

「・・・？」

「もがいてももがいても外に出れなくて、また崩れそうになった瞬間」

「? ?」

「俺はルートヴィツヒ達の家にした」

「え・・・」

「2人にも怒られたな

ルートヴィツヒにいたっては小さい頃少し顔を見たくらいだったからな」

「・・・だから、お前」

「そうだ みんなにいちいち会いにくよりは集まってもらった方が会いやすい

だからあの会議の時までは秘密にしていた」

「・・・そうか・・・」

「みんなにはちゃんと謝ったよ

でもお前は泣きつかれた後寝ただろ？だから今日謝ろうと思ってな」

「あ、あれは、だな」

「いや、深くは聞かない

・・・何故お前が好きだと聞いたな」

そういえば、感情に任せて言ってしまった気がする

俺の馬鹿、何でそんなこと言っただよ・・・

「フェリシアーノは好きだった でも、それは恋愛とは少し違っていたかもしれない

どちらかと言うと、家族愛みたいに、好きだったんだ」
は？

「憧れも少し混じっていたかもしれない アイツが幸せなら俺はそれで良かった

でも、お前は違う」

嘘、だろ？

「確かにお前には幸せになってもらいたい
でもお前の隣にいるのが俺以外じゃ嫌なんだ
お前のことは、俺が幸せにしたいんだ」

誰が、誰を幸せにしたいって？

「これじゃ順序がバラバラだな 最初にこれを書いておけば良かった」

シルヴィオはヘラリと笑った

「シルヴィオ・・・？」

何を、言っているんだコイツは

だって、お前前はそんなこと言ってなかったじゃねえか

ただ、お互いに好きだって伝えて、抱きしめあって、それでキスをして

それだけじゃないか

一応恋人にはなったけど、それは・・・

「本当に愛してるのは、お前だけだよ アーサー」

「・・・っ！！」

さてよ

前に泣きついたばかりじゃねえか

また泣く気か？

さっき泣いてしまったし、俺は泣いてばかりだ

「愛してる」

俺にどうしろって言うんだよ・・・

「・・・っ・・・うえっ」

「言っのが遅れて、悪かったな」

「・・・ほんと、だよ・・・っ、この、大馬鹿、や、ろっ・・・っ」

シルヴィオが抱きしめてくれた

もうそれだけで、幸せだった

・・・やっと、本当にわかりあえたんだなあ・・・

あ、あたしが覗き見してたことは内緒ね

2人共幸せそう

きっとシルヴィオは今日は泊まっていく筈

お昼ご飯作るべきかな

うん、作って来よう

夜ご飯はシルヴィオが作るだろうからジャガイモがまだたくさんあるか確認しなきゃね

夜は隠しカメラ、ばっちりでございます

ん？大丈夫大丈夫、ネットで流したりとか、菊にあげたりとかはしないから

だって2人をネタにはしても、こんなに真剣な話と、その後なんかネタにしたくないもん

画面の前のみなさんも、これは胸の内に秘めておいてね

あ、妄想は全然okです

じゃ、そろそろ幸せな笑顔が2つ分来るから、じゃあね（＊、・ω・

）ノシ

やっとわかりあえたね（神英）（後書き）

あれおかしいななんだこれ

最初はギャグにするつもりだったんだけどな・・・

何を間違えてこうなったんだろうな・・・

まあ、ギャグもシリアスも書けない私だから仕方ない

どうやら私は神英（と書いてマイナーと読め）が好きなようだ

某日、会議室にて（伊英）（前書き）

何か調子に乗ってまた書きましたごめんなさい
しかも文才全くなってごめんなさい
作者やってごめんなさい
むしろ跪かせて下さい

o r z
o r z
o r z
o y z

某日、会議室にて（伊英）

本日、フェリシアーノは珍しく早起して会議場に到着した

「ヴェツヴェー、これでルートにも怒られないぞ」

やっぱり早く起きてよかったな　あれ、もしかして俺一番乗り？」

いつも以上にルンルン気分で会議室に向かうフェリシアーノ

「一番乗りかな　それとも誰か来てるかな　？でも、早く来たから怒られないよね　・・・ん？」

会議室に近付くと歌声が聞こえた

とてもよく澄んでいて、綺麗な高音

大きな声というわけではないけど、よく聞こえる声

そして、とても耳に優しい

「え、誰？誰々？こんな声の人いたっけ・・・？女の人かな？」

聞いたことのない歌声に思考を巡らせながら部屋を覗く

ドアの隙間から見たのは、かつてヨーロッパを手中に収めた金髪碧目の暴君

「（う、そ・・・）」

アーサー・カークランドだった

周りには誰もいない

でも、アーサーの周りを綺麗な光がいくつかわわふわと飛んでいる

彼が歌っている歌は英語で、いまいち意味はわからない

「（綺麗な歌・・・）」

その歌をとてもし優しい表情で歌っているアーサー

「（あんな表情できるんだ・・・）」

彼が右手を上げるとその人差し指に1つ、光がとまる

その人差し指をゆっくりとふると、光が静かに離れていった

「う、うん」

あまりにも優しい表情をするから
おもわず鼓動が速くなる

「あ、あのさ、アーサー」

「？なんだヴァルガス」

「その、ヴァルガスって言うの」

「？」

「ヴァルガスじゃなくて、フェリシアーノって呼んでっ！」

「・・・あえ？」

「だって俺がアーサーって呼んでるのに、アーサーがヴァルガスって呼んでるのって不公平だよ！」

「じゃあ、お前がカークランドって呼べばいいだけの話・・・」

「そうじゃなくて！俺、アーサーと友達になりたいんだ！！」

「は？」

「ね？アーサー！」

「あ、え、は？」

顔を輝かせて笑顔で言っただけのフェリシアーノに戸惑ってしまう
こいつ俺のこと嫌いじゃなかったか？

「それとも、アーサーは俺のこと嫌い・・・？」

「あ、いや、そう言うわけじゃ・・・」

「じゃ、友達になろう！」

「・・・いい、のか？」

「うん！大歓迎だよ！！」

「・・・お、お前がどうしてもって言うんだったら、なってやらないこともないぞ」

「本当！？どうしても！どうしてもアーサーと友達になりたい！！」

「！」

「え」

あまりにも直球なフェリシアーノの言葉に顔を赤くする

「じゃあ、今日から俺とアーサーは友達ね！！」

「か、勘違いするなよ!!これは俺のためであつてお前の為じゃないんだからな!!」

「わかつてるよ!アーサーはアーサーのために俺と友達になったんだもんね!!」

「は!?!いやそうじゃなくてだな」

自分で墓穴を掘ってしまった

「じゃあ、フェリシアーノって呼んでよ!!」

「うあ」

「ね!!」

「・・・・・・フェリ、シアーノ・・・」

「うん!!」

「・・・これで、いいのか?」

「うん!!!!」

満足そうな顔に何故かこちらも落ち着く

「それでね、アーサー」

「なんだ?」

「さっきの歌、もつと歌つてよ!!」

「・・・は?え、お前、聞いて・・・」

「すつごい綺麗な声だったよ!歌も綺麗だね!なんていう曲?」

「・・・『Scarborough Fair』・・・」

「スカボロ、フェア?」

「俺の家の民謡だ」

「そうなんだ!すつごい綺麗だったよ!」

「そ、そうか」

「ね、お願い!もつと歌つて!!」

「・・・し、仕方ねえな・・・みんなが来るまでだぞ」

「うん!」

アーサーが口を開いた

「Are you going to Scarborough

Fair?」

綺麗な歌声

「 Parsley, sage, rosemary and thyme,」

それでいて哀しげな

「 Remember me to one who lives there,」

なのに愛しそうな表情

「 For she once was a true love of mine.」

そんな表情に、何かが芽生えた気がした

今日、学んだこと

(アーサーは、とても優しい)

某日、会議室にて（伊英）（後書き）

浮いてる光は言わずもがな妖精さんです

あとスカボロー・フェアは個人的に超大好きなんで歌ってもらいました

あのねあのね、アーサーが切ない歌を歌ってるのが萌えr（ry

• Q・アーサーの貞操は？（神英）（前書き）

なんかもうタイトルから終わってますねすみません
そしてまた神英かよどんだけ俺神英好きなんだよ
アーサーとシルヴィオは同居設定です

・Q・アーサーの貞操は？（神英）

「（なんでこんなことになってんだ・・・）」

アーサーは頭痛がした

「（ああ、もう泣きたい）」

ことのはじまりはフェリシアーノのこの一言

「ねえねえアーサー！アーサーって妖精とかユニコーンとか見えるんだよね？」

会議室で珍しくアーサーの方に笑顔で近付いて来たフェリシアーノ周りはそんなフェリシアーノを見て驚いている

「あ、ああ・・・ どうしたんだよ、急にそんな」

「俺にも見えるかな！？」

「っは？」

瞳をキラキラさせて訪ねてくるフェリシアーノに思わず戸惑う

「あ、それ俺も気になるしー」

その時、フェリクスもすこし瞳を輝かせてやってきた

「ユニコーンってポニーよりも可愛いん？だったら俺も見たいんよー」

「は、え？」

そんな空間をメモ帳を手にしてみていた菊が一言

「そういえば、ユニコーンって処女にしか見えないんですよね」

一瞬場の空気が凍った

ガタツと派手な音を立てて誰かが椅子から落ちた

その音をきっかけにみんながアーサー達の所へ群がる

「え、なににアーサーって処女だったの？お兄さん知らなかったな」

「うるせえ髭！だいたい、俺は男だ！」

「じゃあなんでユニコーン見えるんだよ？」

「そ、それは・・・」

口ごもって俯くアーサーの前にフェリシアーノとフェリクスが立ちはだかる

「フランス兄ちゃんアーサーいじめるの駄目だよー!」

「まじアーサーいじめるとかあり得んしー　っていうかみんなもそんな目でアーサー見ないでくれん?」

「フェリシアーノ、フェリクス・・・」

アーサーが少し嬉しそうに2人を見る

その時

「アーサー、いるか?」

あまり聞き慣れなていない声がした

みんながいつせいに扉の方を振り返る

そこにいたのは

「し、シルヴィオ・・・」

アーサーを迎えに来たシルヴィオだった

「もう会議が終わっている時間だったんだが・・・

・・・お前等何してるんだ?」

アーサーを庇うように立つフェリシアーノとフェリクス

その周りに群がる国々

そして当の本人は椅子に座ってうろたえている

「あ、シルヴィオ! チャオチャオ」

「シルヴィオまじ久しぶりだし〜元気してたん?」

「ああ、フェリシアーノ、フェリクス　久しぶりだな

最後に会ったのは前の会議だったか?」

「うん!」

「っていうかシルヴィオまじタイミングいいし〜

ちよつと助けてくれん?」

「?なんだ」

「アーサーこの会議場から連れ出してほしいんよ」

「ちよつと、質問に答えないまま帰るの?アーサー」

「俺も気になるんだぞアーサー！答えないと帰さないんだぞ！！」

「私も少し気になりますね・・・」

「我も気になるあるよ」

「僕はどっちでもいいかな」でも大事なことだよね」

各国が気になる気になるといつている

シルヴィオは素直に疑問を投げかけてみた

「・・・なんの話をしているんだ？」

「アーサーが処女かどうかって話だよ」

フランスが代表して答える

「な？お前だつて気になんねえか？」

ニヤニヤとシルヴィオに問いかけるフランス

だがシルヴィオは一気に表情を消した

「気にならない アーサー、帰るぞ」

「お、わっ！？」

アーサーの方へとずかずかと歩み寄り、アーサーの手を取るとそれを引き上げた

「お、おいシルヴィオ！どうしたんだよ！！」

「フェリシアーノとフェリクスに頼まれたからな」

「ありがとうシルヴィオ！」

「まじ助かったしー」

「当たり前のことをしたまでだ」

アーサーを担ぎ上げその場を去ろうとするシルヴィオだが

「ちょ、まだ質問に答えてもらってないんだぞ！」

「あーもうアーサー帰してあげてよ！」

「何だい君！」

「そっちこそ！」

アルフレッドとフェリシアーノという珍しい組み合わせの口喧嘩がはじまった

「なあアーサー、答えてくれてもいいんじゃない？」

「なんでアーサーがそんなこと答えなきゃいけないんだ？」

「なににシルヴィオ？お前氣にならないの？」

「お前はそんなこと氣にする程暇なのか」

「ちょ、お前ねえ・・・」

いがみ合うフランスとシルヴィオ

担がれたままのアーサーはもう泣きそうになった

そして頭に手を添えて冒頭に至る

いつの間にか国々は大人数と少人数に分かれていた

ロヴィーノ、トリス、マシュー、ギルベルト、ルートヴィッヒ、

フェリシアーノ、フェリクス、シルヴィオのアーサー側とその他の

国々に

「お前等しつけれぞコノヤロー！！」

「そうですよ、アーサーさん困ってるじゃないですか」

「アーサーさんを困らせるなら僕も容赦しませんよ？」

「そうだぜお前等！兄上、アーサー連れて帰っててくれ

ここは俺達が何とかする」

「うむ、そうだな

兄貴、先に帰っててくれ」

「アーサー、後で遊びにいつていい？」

「あ、俺もアーサーン家遊びにいきたいんよ、いい？」

「ギルベルト、ルートヴィッヒ、ありがとう

アーサー、どうする？」

「え、あ、別にかまわねえけど・・・って言うかシルヴィオ下ろしてくれ」

ずっと担がれていたままのアーサーは軽く目眩がした

「ああ、すまないな

後はまかせたぞ、みんな」

そう言いながらシルヴィオはアーサーを抱き直した

所謂お姫様抱っこである

「な、お、おま！」

「じゃあな！また会おう！！」

「はーなーせー！！！！」

そのまま走り去っていったシルヴィオとアーサー

いつの間にか始まっていたアーサー争奪戦

きつとまた始まるのだろう

ちなみに、この質問の答えは？

「アーサーはまだ処女で童貞だな　いつか俺が奪う」

「っの、ばかああああああああ！！！！」

A・シルヴィオに奪われる予定

・Q・アーサーの貞操は？（神英）（後書き）

はいなんかもうすみませんでしたー

ちよつと埋まって来ます！

アーサーはユニコーン見えてるので、理由を友達と考えていた結果がこれです

こらそこ、友達いるの？とか言わないの！

ちなみに友達とは童貞ってことで結論がでした

調子のもつてすみません

なんか謝ってばっかですねごめんなさい（↑

○さあ、おやすみ（中英）（前書き）

中英初書きです・・・

誠にすみません

なんとなくすみません

。さあ、おやすみ（中英）

とある某国会議室では・・・

「全く、アルフレッドとフランスには呆れたあるよ」

耀がシナティを抱えながらばやいていた

「アーサーもアーサーあるよ

わざわざあんな奴等に突っ掛かっていく必要ないある」

ここにはいない相手に対しての独り言

そう言つて耀は会議室を出て行つた

耀がむかっているのは会議室の仮眠室

アーサーは会議が終わると仮眠室へと駆け込んでいたのだ

「アーサー、入るあるよ」

部屋は仮眠用のため元々暗いが、カーテンを閉め切り電気もつけていないため

すっかり部屋は暗くなっていた

そして、わずかに見えるシーツの白が少し動いた

「・・・耀・・・？」

「そうある どうしたあるか」

そう聞かれると、アーサーはこちらに向けていた目をふい、と逸らした

「・・・別に、昨日寝損ねただけだ」

「一夜寝なかつただけの奴はそんな隈つくらないある」

「！ な、んで、お前・・・」

「我をなめないでほしいね 我に見抜けないものはほとんどないあるよ

・・・その隈、どこぞの若造と髭は見抜けなかつたようあるな」

忌々しげに耀は呟いた

「大丈夫あるか？」

「・・・」

返事をしないアーサーを見て、耀はため息を吐く

「仕方ないあるねえ シナティちゃん貸してやるからこれ抱いて寝るよろし

夢見最高あるよ」

「むしろ悪くなりそうだ・・・」

「失礼あるね」

耀は言いつつもアーサーにシナティを押し付ける

「我が貸してやると言ってるね 素直に借りるよろし」

「・・・いらねえよ・・・」

心底残念そうな目でシナティを見てくるアーサー

「素直じゃないあるね」

耀は少し考えるような仕草をすると、何か閃いたらしくアーサーのいるベッドに潜り込んだ

「ちよ、おま・・・!!」

「我が添い寝してやるある 体調崩してるのに夢見が悪くて眠れないときは

添い寝してもらうのが一番あるよ」

耀のその言葉に、アーサーは目を見開き、驚きの色が浮かんだ瞳を耀へと向けた

「おま、なんでわかって・・・」

「我に見抜けないものはほとんどないある」

さつきもそう言った筈あるよ

そう言っただけ達観したような目を向けて来る

「でも、だからってお前・・・」

「いいから」

すこしきつい声で、まだ何か言いたそうにしているアーサーを遮る
「お前は、少し甘え上手になるよろし」

耀がアーサーの頭を撫でながらそう言うと、アーサーは顔を伏せて静かになった

「今はゆっくり寝るよろし 我が傍にいてやるあるよ」

「・・・ああ・・・」

アーサーは、ぼそりと呟いた

「・・・お前が、消える夢を見た」

「我が？」

「みんなみんな消えていった 俺を置いていった
でも、最後に消えたのはお前だったんだ・・・」

「・・・そうあるか」

「毎日、その夢を見るんだ

もしかしたら、現実になるかもしれないって、
怖い

「・・・アーサー」

名前を呼ぶとこちらを見上げて来る

「よく頑張ったある 我はここにいるあるよ

ほら、消えてないある」

「耀、」

「今度からは我を呼ぶよろし

いつでもお前の所に行ってやるある」

ゆるりと微笑んだ耀に全ての不安が抜け落ちた

「？安、我的可？的人（おやすみ、私の愛しい人）」

その言葉に身を預けて、眠りについた

「・・・全く」

涙を流しながら眠りについたアーサーを耀は見下ろしながら呟いた

「本当に、甘えるのが下手な奴ある」

言葉とは裏腹に、声は優しい

「年長を頼るあるよ」

（お前は、一人じゃないある）

。さあ、おやすみ（中英）（後書き）

うわ、なんだこの駄文・・・

ちよつと埋まって詫びて来ます！

私の中の2人はたいていこんな感じです

でもギャグもいけます

ただ俺にはギャグもシリアスも甘々も書けない・・・

どうしろと・・・・・・・・orz

あ、シナティはアーサーの枕になってます

無意識こあいゝゝ（普英）（前書き）

ちよつと、つていうかかなり下品なこと言ってるんで注意！！
苦手な人は逃げて超逃げてええええええええええ！！！！

無意識こあい；；（普英）

眠れない

この状態で寝るだつて？

無理に決まってるだろ

俺様の鋼の理性を持ったとしても

アーサーが隣で半裸で寝てるんだぜ？

ちよつと状況を整理したい

今日から一週間俺とアーサーは2人で休みをもらった

というより、強引に休まされた 上司に

最近アーサーは働き詰めで、休ませてやりたかったらしい
なんで俺もなんだ、と聞くと

『貴方しかアーサーを頼める人はいないじゃない』

と当たり前顔をして答えられた

・・・うん、ちよつと

いや、かなり俺様嬉しい

ま、流石俺様だぜ！！

それで、今日から一週間俺はアーサーの家に泊まることになった
で、心優しい俺様が可愛い可愛い恋人のために夕食を作ってた
んだ

あー、すつげえ嬉しそうな顔して食べてたなー、アーサー
ちくしょー、可愛過ぎるぜー

ちなみにマイラはさっさと飯食って部屋にもどっていった
帰る途中に『今日はちよつと頑張つて』と言われた

その時なんのことだと呑気に考えていた俺を殴りたい

一緒に寝ようと俺が言つと、アーサーは顔を真っ赤にして

『お、お前がどうしてもっていうなら、一緒に寝てやらないことも
ない』

って

そなん『どうしても！』って即答すんに決まってる！！
いや、でも・・・

あの時、今日は休ませてやろうと思ったのが間違いだった

アーサーはベッドに入ると、来ていたＴシャツを脱ぎはじめた
内心動揺した俺様に対して、

『最近暑くてＴシャツ着てると眠れねえんだ』

まいったまいった、と言つて来たんだ

いやだから待て待て待て待て

何の試練だこれは

そのまま何食わぬ顔で俺に抱きついて来て、

・・・そのまま寝ちまった

・・・こんな感じが

寝顔は可愛いし短パンだし上半身裸で密着してくる恋人

・・・乳首あたって・・・

あーやばい襲いたい襲いたい襲いたい襲いたい襲いたい
でも絶対殴られる　それか潰される　何をつてナニを

・・・あ・・・

・・・色々想像してたら勃った・・・

マイラアアアアアア！！！！

わかってんなら先言えよ畜生！！

これはこれでおいしい状況だけど色々苦しいだろ！！！！
男の性欲なめんなよ！！！！

「ん・・・」

アーサーが身をよじらせてすりついて来る

DA！KA！RA！！

乳首あたってんだよ！！！！

つつーか吐息がかつてるんですけどおおおお！？

コイツなんでこんなにすでエロイんだよ俺とやるまで童貞処女だったくせにいいいいいい！！

もうやだ・・・俺様泣きたい・・・

結局一睡もできなかった

朝になるとアーサーの腕を優しく身体から外してトイレに直行したで、トイレ行こうとしたらマイラに会った

マイラは俺の下半身を少し見ると

「ああ・・・、お疲れ」

と、少し同情した様子で言ってきた

・・・っていうかなあ・・・

「なんで言わなかったんだよ知ってただろ！？」

「言ったら絶対襲うだろこの万年発情期がああああ！」

「当たり前だ何言ってるんだよおおおおお！！」

「いやちよつと誇らしい顔で言ってるんだよ・・・

・・・アーサー休ませてあげたいし」

「へ？」

「あのね、アーサー最近仕事詰めなことは知ってるでしょ？」

「ああ」

だから休暇になったんだろ？

「アーサーその間一睡もしてないんだよ」

「・・・は？」

「今日襲ったら絶対アーサー疲れ果ててたって」

「・・・」

「だから、かなり我慢してもらうはめになったけどね・・・

うん、まあ今日の夜は全然おkだと思うからそれまでどんなプレイするかでも

考えてたら？」

「そ、そうか・・・」

・・・ん？

「ちょ、マイラ！女の子がそんな下品なこと言っちゃ駄目だろ！？」

「いやいやいや女の子じゃなくて腐女子ね」

「なんだ腐女子って！」

「知ってるでしょ頭の中がいい感じに発酵してる腐った乙女のことだよ」

エリザとか

「エリザ！？・・・ああ、だいたいわかった・・・」
なるほどな・・・

「・・・ギル」

「あ？」

「はやくトイレ行きなよ 痛くないの？」

「・・・・・・あ」

やべえ

そういえばそうだった

「朝ご飯作つとくね」

「うあああああああああ！！」

俺はトイレに駆け込んだ

・・・この後どうなったかって？

アーサーが昼に起きてきてな

だいぶ寝れたみたいだな

で、朝食と昼飯をかねた料理を食って

昼は三人でゲーム（マ○カとかスマ○ラとか）やって

晩飯は俺が作って

三人で晩飯食った後は

・・・アーサーがドロツドロになるまで苛め続けて
失神するまで可愛がってやったぜ

無意識こあい；；（普英）（後書き）

・・・初めて書いた普英がこれってどうだよ俺・・・

自重できなかった＼（＾p＾）／

でも、そのことに關して反省も後悔もしていないあー（ry

巫女っちゃん（童貞云々話してた友達）に埋まっちゃ駄目と言われたので

どうやって詫びればいいのか・・・

・・・とりあえずジャンピング土下座してきます

ああ、幸せ（加英）（前書き）

これも初書き加英

この2人だと何となく穏やかにおわってしまふ・・・

・・・ま、いつか

ああ、幸せ（加英）

今日、マシユーが家に来た
理由は大体わかってる

あいつは、一ヶ月に一回メイプルシロップをもってきてくれる
マシユーの家のメイプルは特別にうまい

俺は、好きだ

メイプルも、

・・・マシユーも

「よく来たな、マシユー」

「はい、アーサーさんもお元気そうで何よりです！」
笑顔で言葉を交わす2人

「まあ、立ち話もなんだし、入ってくれ」

「あ、はい 失礼します」

アーサーがマシユーを家に入るよう促すと、マシユーは頭をペコツ
とさげて、家へと入っていった

マシユーは家の中を見回した

「（相変わらず綺麗だなー、家の中も、家の外面も、庭も、）」

そこまで考えてから、ちらつとアーサーの方を見る

「（・・・アーサーさんも）」

2人は実は付き合っている

周囲には知られていない

なぜなら、少しでも情報が漏れるとアルフレッドはそれを嗅ぎ付け
てくるのだ

だから、この一ヶ月に一回の機会を、2人はけして無駄にはしない

「アーサーさん、これ、メイプルシロップです」

「ああ、いつもありがとな」

微笑みながらメイプルを渡すマシユーに、アーサーも微笑んで受け

取る

周りでこっそりと見ていた妖精達は、とても心が安らかになった

「紅茶いるだろ？淹れてくる」

「あ、ありがとうございます」

「そこに座っててくれ」

アーサーはそう言い残して、キッチンへと向かった

「アーサーさん、今日も綺麗だなあ・・・」

あんなに綺麗な人、そうそういないと思う

綺麗な金髪や翠のあの瞳は、言い表せないくらい綺麗だと思う

そして、あの整った顔立ち

「（少し幼くて、可愛いんだよね）」

思わず笑みが溢れる

「（・・・恋人になれて、本当によかった）」

普段アーサーはわざとアルフレッドとマシューを間違えている

それは、自分達が恋人ということを悟られないためにだ

「（アルフレッドもまんまと騙されてるなあ）」

自分達が恋人だと知らずに

彼を悲しませたくない

でも、アルフレッドやフランシスが恋人になってしまえば

彼はいつの日にか崩れてしまう

そうならないためにも

「（僕が、貴方をまもりたい）」

彼が幸せなら

「マシュー、ミルクでよかったよな」

「はい、ありがとうございます」

自分の好みを覚えていてくれたことに頬が緩む

そんなマシューを見て、アーサーも頬が自然と緩んだ

「あ、そういえば、今日は晴れてますね」

「あ、ああ、そうだな」

「よかった」

「？」

「それって、アーサーさんが嬉しいってことですよ？」

「！あ、いや・・・」

別に天気が国の感情と比例しているわけではない

でも、彼の表情を見ていると、わかってしまうのだ

「正解ですか？」

「~~~~っの、馬鹿・・・」

顔をすっかり赤くさせてマシューに寄りかかるアーサー

「はは、すみません」

だから拗ねないで下さい、とアーサーに伝わるように視線を送る

「・・・お前も、大きくなったよなあ・・・」

「？はい？」

「そうやって、人に気を使うだけでもなくなった

身長も俺を抜かした」

「・・・そうですね」

「初めは、少し寂しかったけど、今は、そうでもないぞ」

「・・・え、」

「お前の成長は、やっぱり嬉しい」

そう言って笑顔をむけてくるから

「・・・ありがとうございます」

僕も笑顔を返してみた

「僕も、そう言ってもらえると、嬉しいです」

「そうか、よかった」

微笑みながら会話をする2人は、本当に穏やかだった

『やっぱり、マシューにまかせてよかったわね』

『そうね どこぞの超大国殿や、麗しい隣国じゃこうはいかないわね』

言わずもがな超大国殿や麗しい隣国は皮肉である

『本当に、アーサーが幸せそうで良かった』

『マシユーも本当に嬉しそうね』

『マシユーだったら、アーサーも落ち着けるわ』

『それに、アーサーの哀しみも包んでくれる』

『『そうね』』

妖精達が交わしていた会話を、2人は知らない

ああ、幸せ（加英）（後書き）

いやなんかほのぼのというよりグダグダですね
なんかもうごめんなさい

この2人は、きっとこの関係が気に入ってるんだと思います・・・

一緒にすごそうよ（西英）（前書き）

これも初がk（ry

初書きだらけ申し訳ない

王道がないって？

え、今まで書いたやつ全部王道のはずうわなにをするやめ

一緒にすごそうよ（西英）

「なあなあアーサー！」

「なんだよ」

「今日から俺ん家泊まりい！！」

「・・・は？」

最初は、意味が、わからなかった

「・・・I'm sorry I did not hear it .

Please say again .」

「アーサー、英語やで」

「No loo? .

Diga una vez m?s .」

「アーサーが・・・スペイン語をしゃべってくれた・・・
やったでー！親分はついにやりとげたでー！！！」

「ああもつうるさいな！聞こえなかったからもう一回言えって言っ
てんだよ！！」

「え？アーサー聞こえなかったん？この至近距離で」

「聞き間違いであってほしい言葉しか聞こえなかった」
「だからな、」

頼む、聞き間違いであってくれ

「今日から俺ん家泊まりい？」

「・・・聞き間違いじゃなかった

「・・・断る！」

「ひどい！なんでなん！？」

「無理だ！絶対無理だ！！」

「無理なことなんてあらへんよ！

今日から俺達国は暫く休みもらえるんやで！？」

「ロヴィーノがいるだろうが！」

「ロヴィは大丈夫やって！確認しといたし！」

「俺が泊まること前提か！？」

「大前提や！」

こいつ信じられねえ

大体、こいつの家に泊まつたりなんかしたら・・・

「・・・理性、もたねえじゃねえか・・・」

「へ？アーサー、今」

「・・・あ？」

「理性もたないって・・・」

「・・・ん？」

俺、声漏れてた？

「・・・In a word？」

「違う！聞き間違いだ！これは！！」

「親分の耳の良さをなめたらあかんでえ！

絶対今のは『・・・理性、もたねえじゃねえか・・・』って言う
たやる！！」

「断じて違う！！俺は言っていない！！」

「言つたで！」

「言つてない！」

「絶対言つたで！アーサー顔真つ赤やもん！！」

「あ、え、いや、これは暑いだけだ！！」

「嘘つくなや！！」

「嘘じゃねえ！」

何だってコイツはこんなときばつか鋭いんだ！！

「ええやん理性なんてもたなくて！！愛し合お！！」

「つの、馬鹿！なんでそんなことさらつと・・・！」

「だって親分アーサー大好きだもん！」

もんとか言つな気持ち悪い

「・・・いやこれは冗談でだな

「・・・はえっ？」

「ロヴィもいいて言ってくれたし、なんも問題あらへんで」

「あ、」

「なあ、アーサー」

休みを恋人と過ごしたいと思うのは当然のことちゃうの？

「あつと、・・・その、・・・」

「な？アーサー 朝はゆっくり寝て、昼飯食って、

その後はロヴィもいれて三人でだらだらして、夜は二人で愛し合

お？」

「うあ、」

「理性なんてほつときゃいいinchやう？」

「アント、」

「ほら、アーティ」

仕度、せんとあかん

そう言つてアントはにへらと微笑んだ

俺には眩し過ぎる、太陽

「・・・うるせえよ、沈没済が」

「ちょ、アーティ酷いわあ」

「悔しかったらまた昇つてみる」

「悔しくあらへんで？だってもう親分昇つとるやん」

ほら、仕度仕度

アントはさつさと俺の部屋に行つてしまった

「・・・泊まる、のか・・・」

ロヴィーノは大丈夫だろうか

きつと大丈夫なんだろうけど、でもなんか不安だ

・・・ここは信じてみよう

「（そうだ、）」

明るいことも考えてみよう

昼と夜は三人で食つて

彼奴等のことだからでてくるのはパエリヤやピッツァだと思う

昼から夕方は三人でたらだら、か・・・

・・・うん、

「（以外と、楽しそうだ）」

こんな休日の過ごし方もいいかもしれない

「仕度、しに行くか」

俺は、きつとアントーニョが苦戦しているであろう部屋へと足を向けた

一緒にすごそうよ（西英）（後書き）

親分とイギは絶対できてる

え、だって本家様の三巻のあれ、いつまで続くんですか？

あれはもう色々と取り込み中だろ

知ってんだからな

俺の眼は誤魔化せないぜ（黙ろうか）

あの二人真面目に結婚してそうですよ

○消えないで（神英）

真夜中に、目が覚めた

「・・・・・・・・」

月がでている

星もとても綺麗に見える

珍しいな、俺の家で

「綺麗、だ」

頭はぼーっとしているが、眠気はかえってこない

つまり、俺は今、眠れない

「眠れない」

声に出して復唱してみると、思いのほかしっくりきた

「俺は、眠れない・・・？」

夜中になると口調がおかしくなるのは俺の悪い癖だ

頭の中で考えていることの最低限しか声に出せない

「どうしようか」

眠れない時、俺はどうしていたっけ

「紅茶？」

いや、違う

「刺繍？」

これも違う

「薔薇？」

なにか近い気がする

「花・・・」

嗚呼、そうだ

あいつにもらった花だ

場所は確か、ベッドの左横

「・・・」

左横を見ると、綺麗に咲いている花があった

この花に、名前はない

新種かどうかときかれると、そうかもしれない
俺とあいつは、こう呼んでいる

「月光華・・・」

月の光へと向くから、月光華

そつと手を伸ばしてみた

手に、月の光がおちた

次に、花弁がふれた

そして

「・・・」

思い出した

いつも、あいつが来ていたんだ

何故か、眠れない日、俺が、この花にふれた日に

「・・・シルヴィオ・・・」

月の明かりで満ちる部屋に、小さな声は消えていった

「どうした、アーサー」

俺以外の声がした

扉の方を向くと、そこにいたのは

この花をくれた、愛しい人

「眠れ、ない」

「そうか」

シルヴィオは頷くと、俺の元まで歩いてきた

そのまま、俺のベッドに座る

「大丈夫だ、アーサー」

そのまま俺の頭を撫でる

「怖いものは、ない」

ストンと、俺の耳に言葉がおちてきた

「警戒するものは、ない」

言葉が、身体の奥で波紋になる

「おやすみ」

その瞬間、俺の意識は消えた

「アーサー」

呼んでも返事はない

「眠った、のか」

眠れた、のか

「俺が、必要か？」

俺は、お前が必要だ

小さな机に飾ってある花

俺が、摘んだ花

この花は、不思議なことに枯れない

「アーサー」

お前も、枯れないでくれ

枯れて、消えないでくれ

俺には、月が必要なんだ

「アーサー」

お前が必要としているときは、俺が傍にいるから

だから

「アーサー」

ここにいてくれ

俺に必要なのは、太陽じゃなくて月なんだ

○消えないで（神英）（後書き）

アーサーは不安になると眠れないと思う

不眠症な気がする

神英好きだ

ちなみにこの話のBGM的なものは

大・竹・佑・季さんの『G・r・e・e・n・s・l・e・e・v・

e・s・ゝ・眠・れ・ぬ・夜・の・た・め・に・』

『』は勿論ありません

後何処があつてるとか言われたら冒頭の歌詞しかあつてないね
なんてことだ

カラオケ！（総受け）（前書き）

総受けて書いたけどそんな感じでもないですすみません
カラオケ好きなんだ・・・！

カラオケ！（総受け）

起きたら、昼だった

・・・昼、だよ

え、マジで？そんなに寝ちゃった？

え、なんでだ・・・

あれか、夢が幸せすぎたとも言っのか

いやいやいやいやそんなことは・・・

・・・

いや、そんなやましい夢見てませんよ！

見てないってば！！ちよつとすごかったけど！！！！

っていうかね、なんか大事なことを忘れてる気がする

今はAM11:54

なんか午後一時から約束があつた気がする・・・

みんなと・・・

・・・みんなと？

あ、思い出しそう

部屋に何か思い出せるものないかな

周りをちよつと見回してみた

最初に見つけたのはみんなのキャラソンCD

・・・キャラソン

・・・歌・・・

・・・あ

「カラオケ！」

カラオケ！！

「アーサー！！」

朝ご飯作り損ねちゃったし、起きるの遅いし、申し訳ない

「朝はごめんね！」

椅子に座って紅茶を飲んでるアーサーが振り向いた

「ああ、気にしなくていいぞ ピクシーが作ってくれた」

「本当？」

「俺が作るうとしたら、自分達を作るって言ってな」

「そうなんだ・・・よかった」

つまりアーサーはご飯を食べ損ねずにすんだわけで

「よく寝てたな」

「うん なんてかね」

「疲れてたんじゃないか？」

「あー・・・そうかも・・・」

「きつとそうだよ」

いつも色々してくれるもんな

そう言って笑うアーサーはすっごい綺麗

「アーサーは仕度、まだしなくていいの？」

「ああ、待ち合わせ場所は本田の家だしな 魔法で行ける」

「そっか」

魔法の分あたし達はすっごい得してると思う

「お昼どうする？」

「マイラが食べたいものでいいぞ」

「そう？じゃあ炒飯作る」

「材料なら揃ってるはずだ」

「わかった！」

じゃあ具沢山炒飯作ろつと！

「できたよー！」

現在PM12:10

まだまだ余裕がある

「美味そうだな」

「本当に？ありがと！不味かったら責任とってあたしが全部食べる」

「いや、本当に美味そうだよ」

アーサーはレンゲをもって炒飯をすくって、それを口に運んだ
・・・あー、そんな動作だけでもすっごい綺麗に見える・・・
流石アーサー、みんなの嫁

「うん、美味しい」

「やった！」

アーサーに味を認めてもらえるのが何より嬉しい
フランスとかフェリシアーノとかロヴィーノとかアントーニョや
菊よりも

あたしの世界はアーサー中心なんだ
こうやって一緒に住まわせてもらえるだけでも、
いや、話せただけでも幸せだと思う
色々考えてたら炒飯食べ終わってた
さあ、仕度じゃ

「えつと・・・」

携帯と財布と暇つぶし用の漫画とメモ帳とペンと・・・
・・・こんくらいかな

服はどうしよう

とりあえずユニオンジャック柄のがいい

・・・じゃあ、生地がすっごい柔らかくて気持ちいいあのTシャツと
ポッケにユニオンジャック柄がはいった短パンと

ユニオンジャック柄のネクタイで

・・・え、なんでネクタイかって？

なんとなく

どうだ、センスないだろ

現在PM12:45

そろそろ行ってもいい時間だね

「アーサー」

「おお、仕度できたか？」

「うん」

「じゃあ行くか」

アーサーは黒いＴシャツに膝よりちょっと短めの短パンズボンにはチエーンがぶら下がって、結構かっこいいアーサーはセンスあるよ

ちなみにあたしのバッグの裏はユニオンジャック柄だったりするあとユニオンジャック柄のギターのキーホルダーつけてる

・・・くどいって？そうじゃないから不思議だよ

「手、掴んでろよ」

「OK」

アーサーの手を握る

・・・やばいすごい綺麗な肌

女性より綺麗じゃないこれなんだ

アーサーだからか

「行くぞ」

アーサーが言うと同時に辺りが一瞬白くなって、

「・・・アーサーさんに、マイラさん・・・？」

周りにもう、菊の家だった

「よう、菊」

「はよう、菊」

「お二人とも、丁度いい時間ですね」

「まあな」

菊以外にも、ルートヴィヒとフェリシアノ、ロヴィーノ、アン

トニーヨ、

ギルベルト、フランシス、マシュー、アルフレッド、イヴァンがいた

「あとは・・・耀とローデとエリザとバルト？」

「そうですね・・・、・・・耀さんはあと少しで来るとさっき連絡

がありました」

「そっか ローデは迷子なんてことには・・・」

「エリザベータさんがいるから大丈夫ですよ」

「そーだね」

じゃあ、みんな時間までには来れるね
でも、なんかみんな固まってるような・・・

イヴァンとアントーニヨはへらへらしてる
菊も普通だけど・・・どうしたんだろ

「みんな、どしたん？」

ちよつと聞いてみた

「・・・なんで」

アルフレッドが口を開いた

なんか青ざめてるようだったんだへつ m t b ざまあ w w w

・・・おつと失礼、つい本音が

「なんで君達いきなり現れたんだい！！？」

現れた？

現れた

いきなり

いきなり現れた・・・ああ、

「魔法だ」

「そんな非科学的なこと俺は絶対認めないんだぞ！！」

アーサーが答えるとすかさず反論してくる

・・・聞いたってその態度はねえだろうが

「んだよメタボが文句あんのか」

「ま、マイラ・・・」

「アーサーがせっかくお前なんかのために口開いてんだから大人しくしてろよ」

「え・・・」

「返事は！？」

「はい！！？」

思わず返事しちゃったね、情けないね、年上なのにね

「アルフレッド情けないわ」 マイラ、よくやったで！」

「どーよ」

二人で拳をあわせる

こーらそこ、男っぱいとか言わないのと、そこに

「今来たあるよー」

「あ、耀」

耀が来た

あとはエリザとローデとバルトね

そのあとはバルト、ローデとエリザの順に来たよ
予想通りすぎた・・・

「それでは、いきますか」

菊がゆるりと微笑む

・・・知ってるよね、みんな

これでも我等が祖国

歌うのはアニソンキャラソンボカロのオンパレードだぜ

カラオケについた

なんかすっごい広い部屋

でもみんながはいったから結構丁度いいかもしれない

「・・・では、だれが最初に歌いますか？」

菊はみんなを見回す

「ヴェ、菊が一番じゃ駄目なの？」

「駄目というわけでは・・・」

「じゃあ歌ってよ！」

「善処します」

「ヴェ」

菊は嫌みいだね

じゃあ、誰だ・・・？

「ここはHEROの俺が歌うんだぞ！」

「お前音痴じゃねーか」

「音痴とか言わないでくれよアーサー！」

なんかメタb・・・ゲフンゲフン、mtbに決まった

「ハンバーガーストリート!!!!!!」

「やっぱりそれかよ!!」

そうだと思っただよ!!

・・・うん、真面目に歌えば普通に歌える筈なのに・・・

「耳がキンキンするある・・・」

「ねえアルフレッド君、もっとちゃんと歌えないのかなあ、君」

「H A H A H A H A H A H A H A H A H E R O はいっだって本気だぞ!!」

「あんたの場合はH E R Oでしょうがこのすつとこどっこい」

「菊、赤福」

「おつと失礼」

菊も耳をおさえてた

だよな、マイクありであの音量は辛いよね

あたしも耳がオワタ

「次はー？」

「テメエがやれよ、フェリシアーノ」

「ヴェ、俺!・・・うん、俺やる!」

ロヴィに言われてマイクをとるフェリ

あーフェリ可愛いな癒される和む・・・

でも腹黒でいざとなるとすつこいかつこいと嬉しい

ありだよな

「じゃあ俺、まるかいて地球やるー」

「みんなもう自分の曲だね」

「大体そんなもんじゃねーあるか？」

「そうだな」

アーサーと耀がため息ついてる・・・

・・・この二人は東洋の父と西洋の母って感じだよな
逆じゃないかって？

いいんだよ、中身はあってるから

「フェリ歌上手ー」

「えへへ、だてにイタリア男やってないのであります!」

フェリはすごい曲上手なんだよね

「次はロヴィやる?」

「俺か?・・・いいぜ」

「曲はおいしい トマトのうたでいいよね」

「ああ」

これ生で聞くと結構破壊力あるんだぜ

・・・すつげえ

あの、二番のそこ大好き

愛は〜のそこ

「ロヴィアーサーと住む気ない?」

「なんでだ!?」

アーサーが言う

「住んでいいんだったら是非」

ロヴィが答える

「ちょ、おま」

「つ、次どうする?」

フェリが聞いてきた

「次は悪友ね」

「選択権なし!?!」

「うん、ちなみに曲は三。のおじさん」

「マジかよ!」

「ほらマイク持った持った!」

もう曲いれてるからはじまっちゃっよ!

「アントーニョ流石ww」

「やるー？親分頑張ったわ〜ww（ふそふそ）」

「俺の扱い酷くねーか!？」

「お前は普憫だから仕方ねえよ」

「アーサーは不憫だろ！俺様とほぼ一緒じゃねえか!」

「俺はお前と違ってエリート不憫なんだよ」

「不憫変わんねーからな!？」

アーサー流石、俺様女王様

・・・髭・・・は

「・・・うん、予想通り?」

「お兄さん泣いていい?」

「お前が泣いても萌えないから却下」

「ええ」

「そうですね」

「私もそんな奴が泣いても萌えないわね」

「ひどい!」

オタクなめんじゃねえ

「次は〜・・・ルッツ」

「お、俺か?」

「ゲルマン讃歌〜俺はドイツ製〜どうぞ!」

「え、あ」

残念、もういれてるから逃げ道はねえぜ!!

「ふう・・・」

「ルッツかけえ」

「流石俺様の弟だぜ!!」

「歌、上手いんだな・・・」

アーサーがぼそつと呟く

・・・いやいやいやいやアーサーもすっごい上手いよ
何自分は上手くないから羨ましいって顔してるの

「アーサーも上手いから大丈夫！」

「・・・いや、俺は・・・」

「上手いよ！あたし嘘は言わないよ！！」

そう言くとアーサーがちよつと嬉しそうな表情になった
うん、可愛い！

「次はバルト・・・だね」

「え、僕達ですか？」

「俺あんまり知ってる曲ないんだけどな・・・」

「ノリで頑張れ」

「「「え」」」

お次はポリリ。ムである

「「「・・・」」」

「お疲れ三人共！！すつごく面白かったよ！！」

イヴァンはもう満面の笑みでそう言う

・・・うん、なんだかんだ三人共歌えてたじゃん

「じゃあ、次はイヴァンが歌う？」

「僕？うん、歌うー」

「曲はどうする？」

「ペチカだよ！」

「「ですよねー」」

ラスボスのようなあの曲じゃなくてよかったb y 菊&マイラ

「カラオケって楽しいね」

「・・・バズビーズチェアが・・・」

「修復したから大丈夫だよアーサー！」

「ごめんねアーサー君、お詫びに今度僕の家椅子あげるね」

「あ、いや」

呪い組和む超和む

あれ、ココアが凍っているぞ

「次は・・・」

ローデとエリザをちらつと見てみた

「あ、私達は見てるだけにするわね、ローデリヒさん」

「そうですね・・・」

「じゃあ・・・」

菊を見てみた

「ふう、私の出番が来ましたね・・・」

立ち上がる祖国

なんか無駄にかっこいい何故だし

「では、いきますか・・・」

聞いたことのある前奏

・・・これは・・・！！

「星。飛行です！」

流星！！

「久々にいい汗かきました」

息をついて、額をさわやかに拭ってる

歌っただけだよ、すっげえ上手かったけど

こういうのになるとハンパないスキルだよね祖国

「じゃあ、マシユー歌う？」

「え、僕ですか・・・？」

「歌うか？」

「いや、いいですよ・・・」

アーサーもすすめてみるけど、歌いたくないみたい

「見てる方が楽しいですから」

「そうか・・・、歌いたくなったら言えよ・・・？」

「はい」

メイプル紅茶いいね

「じゃあ誰にする?」

「我が歌うある」

「・・・え、どっちを?」

「?好 中国ある」

「ああ」

ならいいんだけど

だってもう一曲のはがちで泣くし

「にーに流石!さっすが!歌上手!」

「我にかかればこんくらいちよろいあるよ!」

誇らしげに胸を張る耀

そうだね貴方はにーにだもんね

「・・・アーサー」

「?」

「歌う?」

「!」

アーサーがすごい言い表せない顔してる

え、どうしよう

「あ、あたしが歌う!」

なんか宣言してしまったたよorz

「何にしますか?」

「菊にまかせる」

「では・・・」

激しく聞いたことがある前奏

・・・うん

「・・・これはアーサーのキャラソンですよ・・・?」

「ええ、ですから、お二人でどうぞ」

「・・・は!」

アーサーと顔を見合わせた

でもなんか後戻りできない雰囲気

やるしかないか、畜生やるよやってやるよ!!

「・・・いいぜ」

アーサーが言う

「お前等、後悔すんなよ?」

・・・・・・今の状態

死屍累々

なんでかって?

「アーサーさんエロス・・・っ!!」

「いいわ・・・それでこそアーサーさんよ・・・」

あの、バズビーズチエアの『チエア』発音、みんなもエロイと思わなかった?

あのエロさを20倍くらいにして歌ったわけよアーサー

しかもなんか全部エロかった

あやうく俺までやられるとこだったぜ

一緒に歌ってたのに

もう途中でハモリに移動したよ俺

「アーサー、なんていうか、流石、だよな・・・」

「ふん 俺にかかればこんくらい朝飯前だ」

今度また歌ってもらおう

「どうする?まだ歌う?」

みんなに聞いてみる

「そうですね、まだまだ時間はありますし」

「もっつと歌わなきゃ損だもんね!」

菊とフェリが答える

うん、じゃあまだ色々歌うのね

アーサーの方を見るとちよっと楽しそう

「アーサー、楽しい?」

「・・・そうだな」

微笑みながらアーサーが答える

「少なくとも、昔よりはずっとな！」

アーサーが楽しいなら、それでいいか

「・・・そうだね！」

この後も色あつたけど、

それは皆様の想像にお任せします

カラオケ！（総受け）（後書き）

・・・うん、これはないな、自分

こんな駄文うpするとか俺馬鹿なの死ぬの？

すみません本気でちょっとジャンピング土下座してきますノシ

□ 貴方に出会った（普英）（前書き）

パラレルやつちまった＼（＾p＾）ノ

ギルは超俺設定で人間年齢10くらいです

アーサーはそのまんま

ルート生まれてすらないです

ファンタジーやりたいなーって思ってた中の1つです

は？ファンタジー？アンタ馬鹿じゃねえの？って方は

急いで戻ってください超逃げて↑

文才はいつものとおりないです

あと短いです

いつか長編化するかも

しないかも・・・

ではどうぞ

□ 貴方に出会った（普英）

「どうしたんだ？」

顔をあげて真っ先に見えたのは、
美しい翠と金だった

「どうしたんだ？」

さっきと同じ言葉だけどさっきよりも優しい

「・・・誰」

「俺は、アーサー・カークランド」

カークランド？

聞いたことがある

確か、この世に関わらずに、見守っている魔法術士の家だ

「寒いのか？」

「・・・寒くない」

「苦しいのか？」

「苦しくない」

「寂しいのか？」

「寂しくない！」

そこまでアーサーは聞くと、ふいに笑った

「お前は嘘つきだな」

「・・・え？」

嘘つき

「本当は寒いだろ？」

なんで

「苦しいはずだ」

どうして

「寂しくないわけないだろ」

なんでわかるんだよ

「なんで、わかるんだよ・・・！」

初めて会った相手なのに

今まで会ってきた誰よりも温かい

「俺がお前と同じだからだ」

同じ？

「でかい魔力を持つてると」

魔力・・・

「異質の色をしていると」

色・・・

「周りと違うと」

違う・・・確かに違う

「人はそれを怖がるんだ・・・」

そうだ

みんな俺のこと怖がってた

なんでなのかわからなかった

寒かった

身体の奥が

苦しかった

胸の辺りが

寂しかった

頭はそう叫んでた

「人と違うのは、辛いよなあ・・・」

アーサーは、少し泣きそうな顔で俺の頭を撫でてくれた

今まで寒かった所が、ふわっと温かくなった

苦しいのが何故かなおった

寂しさは増えた

この人とここでわかれたら、俺は本当に独りだ

「今までよく頑張ったな」

ぎゅっと抱きしめてくれた

「もう大丈夫だ」

何が？

「怖いものは、もうなくなつたよ」
「こわいもの？」

「俺の家に来ればいい」

「……え」

「……アーサーの、家……？」

「そうだ」

「いいのか……？」

「当たり前だろ？」

当たり前？

だって今まで、そんなこと言ってくれる人いなかった

「異質の存在同士、仲良くやろうぜ？」

目の奥が熱い

「あ、そういえば」

思い出したようにアーサーが言った

「お前はなんて名前だ？」

「……俺の名前」

「知らないと不便だろ？」

「ギルベルト・バイルシュミット」

「そうか！立派な名前だよ！」

嬉しそうに笑うアーサー

「今日から俺等は家族だ」

よろしくな、ギルベルト

（独りと一人は違う）

（一人は独りより幸せだ）

（二人は一人より楽しいだろ？）

□ 貴方に出会った（普英）（後書き）

グダグダ畜生w

どうやら俺には文才というものがないようだ

前、友達に「お前は受けた」宣言されましたどうしよう
アーサーとどうやってやればゴホンゲフン失礼いたしました
ギルはこのあとアーサーのところで立派に育ちますよきつと
ルートとはその後会わず

シンデレラは、諦めてほしくはなかったのです（前書き）

暗いです

意味わかんないです

後味悪いです

後、気持ち悪いです

大丈夫な人はどうぞ

シンデレラは、諦めてほしくはなかったのです

なんで

なんで

なんでお前等は

「アーサーはもう来ないよ」

ある日マイラは、会議の日に全員の前でそう告げた

「・・・・・・は？」

最初に声を上げたのはアルフレッド

「君、今、なんて言ったんだい？」

信じられないような顔で聞き直す

「アーサーはもう来ないよ」

もう一度、一文字一文字を区切りながら、はつきりとマイラは告げた

「・・・失礼ながら、理由を聞かせていただいてもよろしいでしょうか？」

口元に袖をあて、焦る気持ちをおさえるようにわざとゆっくりと菊は言った

「理由、ね・・・」

少し眉間に皺を寄せてマイラは辺りを見回した

「わかんない？」

「・・・はい？」

「わかんないよね、そりゃ」

まるで価値のないものを見るかのような目でマイラは『国』一人一

人の顔を見た

「だってアンタ等は何一つアーサーのことわかってないもんね？」

「！！」

面白そうに笑ったマイラをフランススは睨んだ

「マイラ、何が面白いわけ？」

「何も面白くないよ 本当、面白くない」

いきなり真顔になったマイラ

「なんでアンタ等なんかのせいでアーサーが傷つかなきゃいけないの」

「え、お前、何言つて・・・」

「なんでデメエ等なんかのせいでアーサーが傷つかなきゃならねえんだっつてんだよこの×××が」

忌々しそうにマイラは舌打をする

「ここに来ないって決めたのはアーサーだ アーサーの意味だ

誰がアーサーにそうさせた？デメエ等だろうが」

「ちょ、待ってくれよ！傷つけた覚えは・・・」

「ねえってか？あんだろうが デメエ等の中でそう言い切れる野郎は出て来い」

「・・・！！・・・俺は、やってない・・・」

「嘘つくなよアル坊？独立の仕方を間違えてんだよデメエは」

「！！」

「髭は昔からアーサーといたくせに、愛情の欠片もアーサーにはわけなかった」

「え」

「菊、菊はわかるだろ？わかってるよなその顔は アーサーのことを全て知ったような

顔してるくせに、菊が知ってんのはアーサーのほんの一部だ」

「フェリ、ロヴィ アンタ等はいっつもアーサーのこと怖がってばっかで、

アーサーに関わろうともしてなかった」

「ルート、アーサーは素直にはなれないんだ
あの時お前が友達になるのを拒んだ時、アーサーはただけ傷つ
いたと思ってる」

「アント、あれは国として仕方ないことだったんだよ わかってん
だろ？」

わかってんのに子供みたいに拗ねて、アーサーのこと嫌悪して、
傷つけた」

「耀、戦争の恨みがどうした アントは年長だろ？なんで理解しよ
うとしなかったんだ

アントと同じだよ 子供みたいに拗ねてたんだ」

「イヴァン、南下を止められたからって怒るようなことじゃないよね
だってそれはアントの勝手な都合なんだから」

「ローデ」「エリザ」「ギル」「リト」「マシユー」「フェリクス」

「」「」

「」

「アントが彼を理解しようとしなかったから、こうなったってこと、
わかってる？」

一人一人がアーサーにした仕打ちを的確に厳しくあげていくマイラ
その瞳には同情も愛情も全く見えなかった
いつもは優しい瞳なのに

別人のように

「・・・アーサーに愛をくれたのは、今も昔も彼だけだった」
「・・・彼？」

アルフレッドが聞き返す

「お前はしらねえよ 会ったことないんだもん」

「俺が会ったことがない？」

「国」

「国・・・」

そこまできて、アントーニヨがはっとして顔を上げた

「それ、もしかして・・・」

「・・・多分そいつであつてよ」

「・・・そうなん・・・」

再び俯くアントーニヨを尻目に、マイラはフランスを見た

「どう？反省してる？後悔してる？遅いんだよ今更」

「お前・・・」

「あたしはアンタ等と違うだろ？ここにこれたのは偶然だ
なのになんであたしよりも長くアーサーというお前等がアーサー
を理解できないの

妖精だっている アンタ等が信じようとしなだけで

アーサーはスコーンだつて上手く作れてた 誰かがからかってか
らアーサーは上手く作らなくなった

今アーサーに必要なのは愛情なんだよ 自分を理解してくれる存
在なんだよ」

マイラはだんだんと口調を荒げていく

「なんで俺の方がお前等より知ってること多いんだと思う？」

理解しようとしたからだよ いい加減うんざりだ

これ以上アーサーを傷つけんな」

「それは！」

アルフレッドが口を挟む

「彼の態度が俺達をそうさせてるだけで」

「まだテメエはわかつてねえのかこのメタボが！！！！」

言い訳とも言えるアルフレッドの言葉にマイラはとうとう『キレ』た
「そうやって何でもかんでもアーサーのせいにしてるから今こんな
ことになってんだろうが！」

テメエの頭はオカラかああ！？アーサーをここまで追いつめてお
いてそれでも

また今まで通りにしようってか！？無理に決まってるんだろ！！馬
鹿じゃねえの！？

今更何言ったって遅いんだよ！！Fuck！！」

暴言を吐いてマイラは会議室を出て行った

「……………嘘、だろ」

ぽつんと響いたアルフレッドの声

「ねえ、誰か嘘だと言ってくれよ」

誰も答えない

みんなだっけ信じてくないから

「……………」

全員がその場から地面に崩れ落ちた

「ごめんなさい」

「ごめん」

「悪かった……………」

「すまない……………」

「ごめん」

「ごめん」

「ごめん……………」

「ごめんね」

国々達の謝罪で会議室は溢れていった
気付いた時にはもう遅いのだ

ガラスの靴は割れてしまった

シンデレラはもう探せない

「・・・アーサー、ただいま」

「ああ、おかえりマイラ」

飯、作り終わったぞ

そう言ったアーサーの目の前には普段の彼からは想像もつかない食事の数々

「・・・おいしそう」

「そうか？よかった」

「（・・・嗚呼）」

もう彼は止めてしまったんだ

もう戻らないんだ

料理だって作った

彼は本来、なんだってできたんだ

「みんなに、言ってきたよ」

「そうか、ありがとな」

そう言つてアーサーは頭を撫でてきてくれた

「もう、お前と妖精達がいてくれるからいいんだ」

「・・・うん」

「俺のこと理解してくれない奴なんて、いらない」

「・・・そうだね」

「マイラ、ありがとな」

「・・・・・・うん」

涙が、溢れた

「？どうしたんだマイラ、何処か痛いのか？」

「・・・違うよ、痛いのはアーサーでしょ？」

「・・・」

「これは、アーサーの涙でもあるんだよ」

「（マイラ・・・）」

嗚呼、泣かないでくれ

俺はお前を泣かせたいわけじゃないんだよ

魔法も消えました

靴も割れました

王子は後を追おうとはしなかったのです

途中で諦めてしまいました

シンデレラは、帰って行きました

もう王子がシンデレラに会うことはできません

これは、愚かな王子と哀れな姫のお話です

シンデレラは、諦めてほしくはなかったのです（後書き）

アーサーに愛情をあげたのはシルヴィオのこと
・・・あれこれ神英？

。逃げて、逃げて、逃げて（神英）（前書き）

うわなにコレ本当に意味わかんない

最初っから分かってたんですいつも以上に意味わかんなくなってるって
すっごい意味わかんない上に季節感無視なんで大丈夫な人はどうぞ

。逃げて、逃げて、逃げて（神英）

「シル、ヴィ、オ・・・！」

現在雪が降る夜の橋の上

「なんだ、っ？」

二人組の男が走っている

「駄目だ、間に合わない・・・っ」

一人は哀しげに翠の瞳を細める

「・・・っ諦めるな、アーサー！」

一人は真剣な顔でもう一人の手を掴む

「・・・とにかく、隠れるぞ」

二人は一旦休憩するために目立たない路地裏へと駆け込んだ

「・・・っ」

「・・・シル、ヴィオ」

「なんだ？アーサー」

アーサーはシルヴィオの瞳を真つすぐ見つめた

「俺は、国だ」

「・・・ああ」

「駄目だ、お前と一緒に逃げられない・・・っ」

できることなら二人しかいない所へでも逃げたい

だが、それはアーサーにとって許されないことなのだ

「・・・大丈夫だ」

「でもっ・・・！」

「大丈夫だ、アーサー」

シルヴィオは少し微笑んだ

「・・・なんで」

「？」

「なんで彼奴等は、俺に幸せをくれないんだろっな・・・」

アーサーはそう言つてシルヴィオに身体を預けた

そもそも何故二人が逃げているのか？

その必要があつたから

何故？

・・・国々は皆、アーサーのことが好きだ

でも、そのことを伝えなかつた

そして、再び目を覚ましたシルヴィオとアーサーが恋人同士だつたことを知る

許せるはずがなかつた

想いを告げずに、そのまま奪われてしまつたとしても考えたのだから
国々はそれが嫌だつた

アーサーとシルヴィオは勘がいい

国々が何かを企んでいることはすぐにわかつた

その決行日が、今日だということも

だから二人は逃げ出した

もう、離れたくないから

国々は狂つてしまつた

愛する人の幸せを願えなかつた

「・・・シルヴィオ」

「・・・」

「俺等は、逃げ切れるかな」

「・・・それは、わからない」

「・・・そうだよな」

「でも、きつと」

「・・・」

「きつとお前と、未来で笑つていられる」

「・・・！」

「……そんな気がするんだ」
「なんだろうな」

「お前となら幸せになれる気がするんだ」
「……それは、」

「俺もだよ、馬鹿」

「……アーサー」

「なんだ？」

「考えてみないか？」

「何を」

「もしも二人でずっといられたら」

「……」

「まずは、そうだな……」

「逃げ切れたら、何をしたい？」

「……とりあえず、疲れてるだろうから飯食って寝たいな」

「俺もだ 嫌なこと忘れて、二人で寝てしまいたい」

「目が覚めたら、安全を確保しにいかないとな」

「順序がおかしくないか？」

「寝てる間は大丈夫だと思うんだ」

「確信に満ちたアーサーの言葉」

「そして、家を作って」

「周りを整えて」

「紅茶、飲めるようにしてえな」

「そうだな 庭を作ろう」

「そしたらベッドと机、椅子に風呂」

「その他必要なものも」

「そうだ、全て作ろう」

「二人の心に少しの安らぎができた」

「……その時」

「……少し騒がしいな」

「彼奴等が来たんだ」

そろそろ、逃げないとな

「シルヴィオ！」

「なんだ、！」

「寒くないか？」

「・・・そういえば、雪、降ってるからな」

「コート、お前も持ってきたんだろ？」

「そうだな、着るかっ」

後を見ると、国々達の影

何かを言っているが、聞こえないし聞きたくもない

「・・・しつこい奴等だな」

そう言つてアーサーがコートを着て振り向く

右手を国々達に突き出すと

「戦闘、開始とするか」

表情を消す

「なら、俺も参戦しないとな」

シルヴィオもアーサーの右目の上に自らの右手をかぶせ

アーサーを抱き込むと剣をかまえた

「お前そんなもん持ってきてたのかよ」

「お前と違って魔法は使えないからな」

国々達が迫って来る

「手加減なしだ」

二人の運命は、誰にもわからない

（寒いのなら）

（コートを着て）

（駆け落ちしましょう）

。逃げて、逃げて、逃げて（神英）（後書き）

うへえ意味わからん（^p^）／

俺の大本命が神英だということが発覚した

ドマイナーやないかい

素敵マイナーサイト様でも書いてる人少ないよ

むしろなんで大本命になれたんだよ

不思議不思議
↑

。やつと気付きました（羅英）（前書き）

またまた捏造人名

ガイウス・ヴァルガスⅡローマ帝国
です

うわあああセンスないいいい……

ごめんなさいセンスは持ち合わせてないんです

。やっと気付きました（羅英）

「（・・・墓参り、行こうかな）」
ふと思いついただけだった

今日は珍しく俺の家は晴天だ
外に出ると少し寒いが過ごしやすい

「フェネル、ラヤ」

一番長くここにいる妖精を呼ぶ

『何？アーサー』

返事をしたのはラヤ

「俺はちよつと出かけて来る その間家を頼むよ」

『わかったわ、アーサー！』

元気のいい返事はフェネル

「じゃ、行つて来る」

『行つてらっしゃい！！』

二人の元気な返事に送られて、家の門をぬけた

花束を買いに花屋へと寄った

中には少し甘い香りが漂っている

一際花の中で目立っているのは白薔薇だった

「・・・すまない、この薔薇をもらえるか？」

「はい 花束にいたしますか？」

「ああ、頼む」

店員に話しかけると、すぐに花束を作ってくれた
しかも、控えめな花束に

「・・・どうしてわかったんだ？」

「私は貴方の子ですから」

にこりと笑った店員に、気付いてたのか、と笑えば

一番大切な祖国様です、と返ってきた

「お気をつけて」

「ああ、ありがとう」

そして、花屋を出た

森を抜けていくと、草原が広がっていて

その草原の真ん中にぽつんと、白い十字架がたっている

そこに刻まれている言葉は

『ガイウス・ヴァルガス』

「・・・ガイウス」

かつてはヨーロッパのほとんどを支配した、ローマ帝国

アイツの墓がここにたっているのは、アイツに頼まれたからだ

『なあ、アーサー』

『なんだよ』

『俺な、もうじき消えると思うんだ』

『！・・・そう、かよ』

『なんだ？寂しいのか？』

『寂しくなんてねえよ！』

『そうか・・・だったら俺は安心だ』

『・・・』

『頼みがあるんだ』

『・・・なんだ？』

『俺が消えたら、この草原の、今座ってるこの場所に、俺の墓、たててくれないか？』

『・・・墓？』

『そうだ、墓だ！白い十字架をたててくれ』

『・・・わかったよ』

『本当か！ありがとな、アーサー！』

『・・・これ、孫達には言ったのか？』

『・・・いや、爺ちゃんとして悲しい思いさせたくないからな』
『そうかよ』

「・・・なあ、ガイウス、俺、ここに来たよ」

墓に話しかける俺を一般人が見たらどれだけ不気味なんだろうかでも、ここには俺のことを知っている動物と妖精しかいないんだ
「お前の孫達、すげえ元気だぜ 二人とも俺のこと怖いみたいだけどな」

「薔薇の花束、持ってきたんだ 知ってるか？」

「どうだ？綺麗だろ、この花」

「わざわざお前のために買ってきてやったんだ 感謝しろよ？」

「なあ」

「なあ、ガイウス」

「俺、一人でもちゃんとやってけるぜ」

「もう、お前がいなくても大丈夫なんだ」

「最初は大変だったけど、今は違う」

「・・・ガイウス」

「ガイウス」

「ガイウス？」

なあ

「戻って、来れないのか？」

俺は、あつかましいな

「・・・ガイウス・・・」

墓に手を伸ばした

十字架にそつとふれてみる

温かい

何故だろう

・・・？

「（何かの、気配）」

もしかして

「・・・ガイウス！！」

大きく名前を呼ぶ

「おい、出て来いよ！出て来ないなんて趣味悪いぜ！」

そう叫ぶ

・・・

すると、

『なんだ、やっぱりわかつちやうのか』

「・・・ガイ、ウス」

目の前に、ガイウスが立ってた

『久しぶりだなアーサー！どうだ？元気か？』

「・・・」

『ん？なんだ？元気じゃないのか？じゃあほら、ギュッてしてやる
！』

「・・・え」

『遠慮するなよ、ほら』

そう言つて身体を包み込んでくるガイウス

・・・何故か、温かい

「・・・お前、温かいな」

『そうか？まあ、俺の元気は世界一ってことだろうな！』

「違うと思うぞ」

『今のは爺ちゃん傷ついたぞ・・・アーサー背伸びたなー！』

「そうか？」

『前はこんな小ちゃかったのになあ！』

「・・・そうか？」

久しぶりにあったせい、上手く会話できない

そもそも、なんで会えたんだ？

「・・・お前、なんでここにいるんだ？」

『アーサーが泣いてる気がしたんだ』

「・・・は？」

『まあ、愛の力ってやつだな！』

そう言っただけで笑うガイウスは眩しい

ガイウスは、太陽みたいだ

『・・・でも、そろそろ戻らないとな』

「え」

『最後にお前の顔が見れてよかった！』

「ちょ」

『墓と花束、ありがとな！』

「ガイウス！」

『じゃあな、アーサー』

そう言っただけで一瞬、ふれるだけのキス

『お前は、消えちゃ駄目だぞ？』

「・・・っ！」

ガイウスに手を伸ばしても、もうふれることも叶わない
もうアイツの身体は透けている

「待つ、ガイウス・・・！！」

そのまま手は、虚空を掴んだ

「（・・・・・・・・・・・・・・・・）」

あまりにも一瞬の間に色々ありすぎて、何かなんだかさっぱりわからない

ガイウスがいきなり出てきて、少し会話して、それで？

「（アイツが一方的に・・・・・・・・）」

そう、一方的に話して、で、

「（俺の話も聞かずに）」

いつだって勝手な奴だな

消えてっちまった

目の前の十字架にふれてみた

冷たい

「（・・・・・・・・ああ、そうか）」

やっと、気付いた

いないあなたのかげをみた

（嗚呼）

（貴方はもう、戻っては来ないのですね）

涙が地面の草を濡らした

。やっと気付きました（羅英）（後書き）

うは意味ワカメ

最後のシーン書きたいが為にこの話書きました

最初から最後まで意味腐のまま終わったぞ？

あ、間違えた

最初から最後まで意味不のまま終わったぞ？

なんてこったい

そういえば、最近よく友達に髪をいじくられます

何故だ

□ はじめましてマイファミリー（前書き）

えつとですね

マイラは奴隷として売られている設定です

5歳くらいですね

なんかもう本当に意味不です

衝動書きって駄目ですね（キラッ

↑

□ はじめましてマイファミリー

「なんで、私を買ってくれたんですか？」

美しい黒髪は長い間放置されていたのか少しつやを失っている
そして梳かされていないためか絡まっている

服は裾がほつれている薄汚れた白いワンピース

手首や足首、首には拷問や虐待でも受けたのか、傷の数々

指先は寒さで痙攣している

顔色は悪く、全体的にやせ細っている

それでも尚、か細い声で唯一輝いている目をこちらに向けて少女は
訪ねた

「こんなみすばらしい私を、どうして貴方は買ったんですか？」

こんなに、汚いのにな

そう言う少女は下を向いた

「・・・それはな、」

ふと、少女は顔を上げる

「お前が、俺と同じだからだ」

そう答えると、少女は不思議そうな顔をしてこちらを見つめてくる

「・・・同じ？私と貴方が？」

「何故？貴方はとても美しいでしょ？」

「綺麗な金髪に翠の瞳」

「肌も綺麗な白だし、指は長くて細い」

「顔立ちも整ってる」

「身なりだって素敵です」

「それに今までの振る舞い、とても紳士的だったと思います」

「まだ色々あるけど・・・美しい貴方と醜い私のどこが同じなんですか？」

「共通点なんて何一つ存在してないのに」

一気に言い切った少女はまだじっとこちらを見ている

その瞳は美しい

少女は自分が美しいことに気付いていないんだ

「・・・お前は」

「お前はすごく綺麗だ」

「黒い髪に黒い瞳、整った顔立ち」

「長い睫毛」

「意志の強さ」

「俺なんかよりも、ずっと綺麗だ」

少女は、本気で驚いた顔をしている

そこに、続けてみた

「それにな」

「心が泣いてるだろう?」

「寂しい、寂しい」

「独りは嫌だつて」

そこまで言つと、少女は気付いたように瞳を揺らした

「俺も、お前と同じだったんだ」

「そう、奴隷として売られてたつてことも」

「独りの寂しさをわかつてるところも」

ふいに少女が抱きついてきた

「・・・っ私は、!貴方を羨ましいと思いました!」

「買ってくれたこと、本当に感謝してます!」

「怖かった、辛かった、寂しかったっ」

「私も、貴方みたいになれますか・・・っ?」

少女は泣きながら尋ねてくる

その頭を撫でてやると、いつそう強くしがみついてくる

「・・・大丈夫だ」

「本当、ですか?」

「ああ、俺はこうして生きてこれた

だから、お前も」

大丈夫

大丈夫だよ

「今日からお前は俺の家族だ」

「・・・か、ぞく？」

家族？

前に、見かけたあの人達の様な？

あの、幸せそうだった？

「・・・そうだな・・・」

目の前にいる人は、少し考えると私を見た

「名前、あるか？」

「名前・・・」

名前だったら、ある

本当に昔、呼ばれてた名前

「・・・マイラ、です」

「そうか マイラ

今日からお前はマイラ・カークランドだ」

「カークランド？」

「そうだ」

そこまで言うと、彼は私を抱きかかえて立ち上がった

「自己紹介がまだだったな」

「俺の名前はアーサー・カークランド」

「今日からマイラ、お前の兄だ」

「よろしくな」

そう言って笑う彼は、暗い路地裏を照らす月の様だった

（はじめまして）

（これからよろしく）

□ はじめましてマイファミリー（後書き）

最近マンネリです

今までの分より酷いことになっています

どうしよう・・・

□ 共に、歩んでくれますか（前書き）

パラレル第三弾

いい加減にしる俺

今回は捏造の塊です

【簡単に説明いれてみる】

ロアレイナ⇨作者が作った中二感溢れる異世界の大陸の1つ

彼女がヘタリアで言う『国』みたいな感じです

アリア⇨ロアレイナの56代目女王

一番まともな治め方をした人

アーサー似だったりする

眉毛は太いです

エルフ

アーサー⇨言わずもがな世界の嫁

ロアレイナの1560代目代表者

エルフです

エルフ⇨通常の人間よりも長生き

5倍くらい長生き

この短編が一番長編化する可能性あります

グダグダと失礼しました

この設定が駄目な人は全力で逃げた方がいいです

□ 共に、歩んでくれますか

今日も、新しい命が生まれた

風が静かに吹いて、私の髪を揺らす

風の匂いと花の匂い、それに水と森の匂い

全てが混じって香ってくる

湖に映った自分の姿を見ると、数百年前から変わらない

昔はあんなに成長していたのに、と思うことはよくある

いいことなのよ、これは、とても

だって私と言う大陸が安定している証拠だもの

・・・でも、でもね

ちよつとだけでもまた成長したいと思うの

だって私はこんなに無力

大陸の化身であり、ロアレイナという名を授かった精霊であり、

この大陸の母なのに

「・・・駄目だね、私は」

独り言は風に消えていった

今日は、妖精達が集まっていた

何をしているのかと聞くと、とても嬉しそうな顔でこちらを見る

「今日ね、新しいエルフの子が生まれたのよ！」

聞くと、その子はとても可愛らしい男の子だとか

綺麗な金髪に、森のように深い翠の瞳

エルフの中でも高い魔力を持っていて、それから

「カーランド家の子よ！」

・・・カーランド家

昔、この大陸を

私を治めていた王族の末裔

「カーランド家は、これで4人目よね」

「でも、今回生まれた子が一番魔力が高いわ」

「次の代表は誰になるのかしら・・・」

妖精達の話し声が耳に入ってくる

心の奥で、なにか感じたことのないものが生まれた

妖精達から話を聞いてもう6年

いまだに生まれた子にはあっていない

でも、もやもやするのよ

・・・あってみよう、かな

こんなの自分で思ったのは初めて

私の足はもう歩き出していた

そつと木の陰から覗いてみると、

「・・・・・・アリ、ア」

アリアにそっくりな子が

あの人にそっくりな子が

妖精達と遊んでいた

「・・・アリア・・・？」

違うわ

アリアじゃないのはわかっているの

あの子はアリアの子孫

でも

こんなに似ているなんて

「・・・・・・誰？」

ふと、あの子が言った

そう、声が小さい頃のあの人にそっくりなの

「・・・初めまして、私の子」

そう言うつと、一瞬意味が分からないような顔をして、
それから

「・・・ロアレイナ？さん？」

なんでわかったのかしら

あの人の家族だから？

「・・・そうよ」

「は、初めまして」

少し伸びている髪がとても綺麗

「・・・貴方のお名前、教えてもらってもいい？」

しゃがんであの子の目線に私の目線をあわせてみた

「あ、アーサー・カーランド」

「アーサー？いい名前ね」

その響きが気に入った

「・・・ねえ」

「？」

「友達に、ならない？」

「とも、だち？」

大きな目をさらに大きくして私の言葉を繰り返す

「そうよ、友達」

本当に、こんな気持ちは初めてなの

「・・・になりたい」

につこりと笑ったこの子を見て、私も笑顔になれた

この手を、差し伸べた

（貴方はその小さな手で、私の手を握るのです）

「アーサー」

「なんだ？ロアレyna」

すっかり成長した彼

見かけは23歳くらいだけれど、その倍は生きているの

「・・・大きくなったね」

「・・・お前は、変わらないな」

仕方ないけど、と彼は笑う

「お前は、きつとそれでいいんだよ」

「そうかしら？」

「そうだよ、きつと」

「・・・うん」

小さい子供だった彼は、今、私を治めてくれている

□ 共に、歩いてくれますか（後書き）

意味わからん

ほんつとに意味わかりませんねこれうわどうしよう

とりあえず下睫毛の空気よめ男と眉毛は俺の嫁だと叫ぶ

あと十代目の右腕と十番隊隊長とうちはの生き残りと六幻を使う彼も
ほかにもいっぱいいる

二次元は一夫多妻制度なんだよ・・・！（違う

□ そろそろ、僕以外にも心を開いてください（普英）（前書き）

最近パレルしかやったらん

設定はないです

気付いたらファンタジーでした

グダグダ大嫌いな人逃げて超逃げて

□ そろそろ、僕以外にも心を開いてください（普英）

「アーサー！」

遠くから俺の声を呼ぶ声がする

「おいアーサー！！聞こえてんなら返事しろよ！！」
声はどんどん近くなる

「アーサー！！！」

鬱陶しい

殴れば黙るか？

「こんな至近距離で大声だしてんじゃねえよ馬鹿ギル！」

「ソラニッツ！！！」

それはジャガイモの芽の毒素の名前だ

「・・・で？」

「で？じゃねえよこの引きこもり！！いい加減会議に出席しろ！」

「そんなこと言いに来たのか馬鹿ギル」

「馬鹿言つな！しかもそんなことじゃねえぞ！？」

「いいじゃねえか俺が出ないくらい」

「大問題だ！」

こいつは俺に会議に出席しろと言う

ふざけんな

誰があんな面倒なもんに出るか

そもそも俺が引きこもったのはあの会議が原因だ

「あんな会議出たら氣い狂っちまう」

明らかに会議なんてものをする状態ではない
毎回毎回どこぞの若造の一言で狂いはじめていた
あまり覚えていないが

「お前が出ないとユニコーンを把握できねえんだよ！」
ユニコーン

俺の住んでいる家の周辺の森にしかない希少生物
絶滅危惧種

あいつらはどうやら俺が結界を張ったのがわかったらしく、
ずっと結界の中にいる

結界は、俺が拒む全てのものの侵入を遮断する

なんでこいつが入って来れるかというと、

「師匠に向かってお前とはなんだ」

・ ・ ・ こいつは俺の弟子だった奴だ

「じゃあなんて呼べばいいんだよ」

「知るか」

「なんだそれ！」

嗚呼、本当に鬱陶しい

でもこんな鬱陶しい奴を自分の家に入れる俺も大概馬鹿だ

「いい加減黙れよ馬鹿ギル」

「お前俺の名前覚えてるか!？」

「え？馬鹿ギル」

「それは名前じゃねええええ！！！」

そうなのか

知らなかった

いや、知ってるけど

「ユニコーンをどつする気なんだ？」

「それは……」

こいつは悪くない

悪いのは会議にいる爺達だ

あいつらはユニコーンを『実験体』としか見てない

「……ユニコーンは元気にしてるとでも伝えとけ」

「孫の様子を聞きにきたわけじゃねえぞ俺は!？」

「うるせえな」

こいつは久しぶりにあつた師匠にそんなことしか言えないのか
「折角魔法も剣術も教えてやったのに」

「う」

「勉強みてやったのは誰だったっけなあ？」

「・・・」

「俺はお前からそんな言葉は聞きたくねえ」

なあ、馬鹿ギル

「最初に言うべきことがあんだろ？」

そう言うとも馬鹿ギルは観念したように「あー」だの「うー」だの唸りながらこちらを見る

「どうした？馬鹿ギル」

ほら、言ってみろ

「・・・ただいま、アーサー」

そう言つて「俺の負けだ」と呟くこいつはあの頃のままだ

「おかえり、ギルベルト」

お前に小言は似合わねえよ

「お前ばっか余裕でむかつく」

「じゃあお前も余裕見せてみる、ギル」

「・・・余裕、ねえ・・・」

何か閃いたかの様な顔をする

「・・・おいおいおい待て待て待て

「ため、変に自棄になんじゃねえ」

「別に、俺は余裕見せようとしてるだけだぜ？」

可愛かったあの頃のこいつは何処に行ったんだ

「アーサー」

「・・・っ」

耳元で囁くな

そついうのは王都にいる女にでもやってろ

「・・・アーサー顔真つ赤だぜ」

「・・・うるせえ」

長年生きててもこれだけはなれない

「どうだ？」

「なにかだ」

「今、余裕なくしたろ？」
俺の勝ちだな

余裕なんて

（・・・だからお前はいつまでたってもギルベルトなんだよこの馬鹿ギル！！）

（いきなり何だよ！！）

□ そろそろ、僕以外にも心を開いてください（普英）（後書き）

人間は、こんな駄文が書けるんだな・・・

いや駄文書けるのは俺だけか

なんとなく弟子と師匠って関係に憧れて書いて書いちゃいました
本家のblogアイコンに心を奪われました（表現力皆無
ところで眉毛と下睫毛って共通点ありすぎである

日常の終わりと、（前書き）

マイラ過去編

日常の終わりと、

そう

昨日まであたしは、普通の生活を送っていた

「（雨・・・）」

土砂降りの雨

ああ、これ以上あたしの体温を奪ってどうする気？

空はあたしの都合なんて知らないと言わんばかりに泣く泣いてる

彼も？

そもそもなんであたしはここにいるのか

昨日はいつもと同じように起きて

ご飯食べて

学校行く仕度して

友達とヘタリアとか漫画の話して

授業受けて

部活やって

家に帰って

宿題やって

パソコンやって

ご飯食べて

お風呂入って

テレビ見て

寝て

・・・それで？

朝起きたら知らない場所にいた
どこかの公園のベンチに寝転んでた
一瞬わけわかんなくなつて

とにかく辺りを見渡すと

綺麗なイングリッシュガーデン

英語の看板

紅茶専門店

そして

不思議なことに英語が読めるあたし

英語はどちらかと言うと苦手な分野

こんなにすらすらと意味が分かる訳無い
つまり？

「（・・・もしかして二次元・・・）」

夢小説なんかによくあるトリップを

あたしは経験してしまったわけで

「（地図、ないかな）」

国の位置はわかっててもその詳しい所まではわからない
人に何か訊いてみればいいのか

試しに、英語をしゃべってみることにした

「A m I s p e a k i n g E n g l i s h ?」

小さな声で言うと、あたしには英語には聞こえない
いまいち、わかんない

もう一度周りを見ると、少し離れた所で年下の子達が遊んでた
その子達に近寄って、さっき言ったことと同じことをその子達に尋
ねてみる

「あたし、英語話してる？」

「？何言ってるの？お姉ちゃん ちゃんと話してるよ？」

・・・よかった、通じた

相手がなんて言ったかもちゃんとわかる

「いきなりごめんね、ありがとう」

「どういたしまして!!」

にっこり笑った小さな女の子は可愛かった

さて、地図を探しに行こう

そう思ってしばらく待ちを歩いてると、壮絶な光景が目に入った

・・・喧嘩だ

でっかい男二人が、喧嘩してる

どうしよう

止めに入る？

でも、この世界でのあたしの実力がどんなものなのか、わからない
ここで試してみようか

すっごい弱かったらどうしよう

・・・頑張ってみる？

そうしよう

「ちよつと失礼お二方」

そう言くと男達は同時にこちらを見た

「なんだ？子供がはいってくんじゃねえよ」

「いやだつて邪魔だし」

「ああ？んだとてめえ」

「子供は引っ込んでろ!!」

子供子供うるせえよ畜生いつかもつと身長伸びてやる

殴り掛かってくる奴をかわして相手の腹に拳を叩き込む

・・・と

ドゴオオオオオオン

「あ」

吹っ飛んだ

え、嘘だろ

マジで？

・・・え、マジで？

「・・・け、喧嘩はもうしちゃ駄目だぞ」

「いやいやいや何者だお前！！？」

「知らないよ！きつと誰かがクジラでコッペパン挟んで食べてたんだ！！」

「意味わかんねえよ！！」

「じゃね！！」

「あ、おい！」

駄目だすごい手加減しないと駄目だ

ってかなんてことだ吹っ飛んだぞアイツ

二次元ってすごい

「（ごめんねえ・・・）」

心の中で泣くほど謝り倒しました

もう地図とか諦めた

考えちゃ駄目だ感じる俺

まず夢小説の主人公運がよすぎんだよ

しかも当たり前のように漫画のキャラの家に居座るとかどんだけ図々しいんだよ

考えてたらイライラしてきた

ついでになんか知らんけど野原に出た

・・・何故だし

え、本当なんで石造りの街をひたすら歩いていましたよ俺は

なんかもう雰囲気からして違うようだったんだ

で、歩いてたら気付いたんだけどここはイギリスみたい

しかもイングランド

・・・なんで気付いたかって言われるとなんでだろ

あれじゃねトリップーだからじゃね（自棄

ただいま午後7時

雨、土砂降り

あたしは傘なんて持ってない

服は防水性なんて持ち備えていない

イコール？

あれあたしやばくない？

「（つつかれた・・・）」

流石に馴れてない所を歩くのは体力使う

そしてこの雨である

なんだ俺を殺す気が

違うか

「（どーしょ）」

もう歩いてる体力もなくどこかの家の壁に寄りかかって座り込む

「（手、冷えてきたかも）」

指先の感覚はない

ついでにあんまり動かない

「（足も・・・）」

本当に動かない

すごい、人間ってこんなになるんだ

「（声は・・・？）」

出そうとするとかすれた

「（あ、駄目かもしれない）」

危ないかも色々

視界もぼやけてきた

「（このまま寝たらどうなる？）」

確実に明日騒ぎになると思う

それでも薄れていく意識に身を委ねようとした

「Hey」

綺麗なクイーンズイングリッシュ

「I stand?」

そういつて差し伸べてくる手の持ち主は見たことがある
おもわず目を見開くと、この国の化身の姿

「・・・やつと会えた・・・」

あたしは、日本語を喋った

英語を話そうとする気にもなれなかった

「・・・つかまれ」

すると日本語で返事が返ってくる

差し伸べられたその手に自分の手のひらを重ねる
立とうとしたその時

激しい目眩

トサツ・・・

腕を引っ張られて温かい腕の中に倒れこんだ
・・・本当に、そろそろ駄目だ・・・
消え行く意識の片隅で彼の声を聞いた

「・・・人は、温かいな」

『この子、大丈夫?』

『疲れて寝てるだけよ』

大丈夫、もう少しで起きるわ』

『本当！？』

羽をはやした小さな人が二人、話している

『この子私達見えるかなあ？』

そんな二人のもとに、もう一人小さな人が

『・・・優しそうな子だね』

鈴を転がしたような声で話す

『この世界の人間って感じはしないね』

もう一人、一番響く声の小さな人が入ってくる

『その子、アーサーのこと知ってるよ』

多分、私達のことも』

今まで妖精達と倒れていた少女を見ていた青年が、口を開いた

「・・・そうか」

『でも』

すかさず入ってくる言葉

『悪い気もしない』

そう言って妖精は微笑む

『その子は大丈夫』

きつと、アーサーのことわかってくれる』

だから、

『アーサーも、受け入れてあげて』

その言葉に、青年は微笑んだ

『・・・ああ、わかった』

（初めまして 私、マイラって言います）

（ああ、よろしく 俺のことは知ってるよな？）

（・・・はい）

（俺の名字、使ってくれ）

（いいんですか！？）

（敬語もやめていいぞ　ここにいる間、お前は家族だ）

新しい出会い

（そうして今、貴方と私はここにいる）

日常の終わりと、（後書き）

グダグダグダ・・・

つまりマイラはきつといい子だよっていう
↑

H a p p y d a y ! (神英) (前書き)

ハロウィンネタ

30分クオリティです

残念です

それでもいいっていう女神様はどうぞ！

Happy day! (神英)

「Trick or Treat!!」

子供達の元気な声が屋敷の外、遠くから聞こえる

「流石アーサー、本場は盛上がり方が違うね」

マイラがアーサーに笑顔で告げた

「そうだな 一年で国民が張り切る日の1つだからな」

ぬかりはねえよ、と嬉しそうなアーサー

「後ちよつと来るのかな？」

今夜、アーサーの家では国達でハロウィンパーティーが行われることになった

参加条件は国、またはそれに近い存在であることと、仮装してくることだ

その日、アーサーは吸血鬼、マイラはシルクハットという格好だった

「ところでマイラ、それ何の仮装なんだ？」

「Mrs・pumpkinらしき何か」

「なんだそれ？」

「菊の家の曲に出てくる人のことだよ」

「そうなのか・・・」

納得したようなアーサーの顔にマイラはほっとした

「（まあ、本当は仮装したくはないんだけど・・・）」

アーサーがするから、いいかな

「いらつしゃーい」

マイラの声が響いた

「皆面白い格好してんね」

フェリシアーノとロヴィーノは狼男

ルートヴィッヒも・・・？いや、犬？

菊は化狐

アルフレッドはジェイソン

フランシスは・・・ゴーストだね、ゴースト

イヴァンはなんたる、熊かな？

耀はキヨンシーだよ

ギルベルトは・・・デビルフード着てるね・・・ちゅうん・・・いやなんでもない

アントーニヨはなんだ？ミイラ男？ついているのはトマトか？

エリザベータは悪魔看護婦で、ローデリヒが悪魔医者でいいのかな？あれ表現変？

あとは・・・

「シルヴィオ、それって死神？」

鎌をもつて黒尽くめの服に返り血らしきものをつけているシルヴィオはそりやもう怖い

「ああ」

平然と頷くシルヴィオに、アーサーが声をかけた

「似合ってるじゃねえか」

その声にシルヴィオは笑顔になった

「お前も似合ってるぞ」

ああお2人さん俺としては大変美味しい会話なんだが他の人達が怖いから後でゆつくりとどうぞ

屋敷の中は笑い声と会話の声、食事する音でいっぱいだった

「みんな楽しそうだね」

「そうだな」

「ところでアーサー、シルヴィオと話さないの？」

「・・・あ、いや・・・」

「あたしはいいから、シルヴィオを優先していいんだよ？」

「・・・いいのか？」

「うん」

「・・・じゃあ、行ってくる」

「行つてらっしゃい」

手を振つてアーサーを見送った

「・・・シルヴィオ」

声が聞こえて振り向くと、そこには愛しい恋人が

「アーサー」

「・・・マイラが、お前のところへ行けて」

「そうか」

マイラは流石空気が読める

「随分と張り切つたみたいだな」

「当たり前だろ？」

なんたつて俺の家は本場だからな

胸を張つて言い張るアーサーは可愛いと思う

何もかも

「・・・食事、アーサーが作つたんだろ？」

「！なんでわかつたんだよ」

「味が繊細だ」

マイラの料理はどちらかというと大雑把な味だ

でも確かに美味い、あれは

不思議なことに

アーサーがこんな繊細な味を作れることを他国は知らない

「勿体ないな、なんで教えないんだ？」

「知られても俺が得することねえだろ」

「まあ、そうだな」

このことは俺達だけが知っていればいいとも、確かに思う

マイラにアーサー、俺だけの秘密だ

「美味いな、相変わらず」

「自己流は駄目みたいだけだな」

「それは仕方ないさ」

国民性だ

「・・・なあ、シルヴィオ」

「なんだ？」

アーサーが耳元に口を寄せてきた

「Trick or Treat」

驚いてアーサーを見つめると、顔を赤くしたまま俯いている

「・・・くれないのか？」

「・・・ああ、菓子は無理だな」

「・・・夜、泊まってけ」

「勿論」

他の国達はそろそろ酒を飲み始めるだろう

終わるのは遅くなりそうだが、泊まっていくなら問題は全くない
ふとマイラの方を見ると、笑顔で頷いた後、二階へと消えて行った
部屋の準備をしに行ったらしい

・・・有り難いが、未成年の少女にそんなことをさせるのは少し罪
悪感がある

「・・・まあ、なんだ」

アーサーが口を開いた

「あと少しだけど、楽しんで行けよ」

ハロウィン

ふとその言葉を合図に庭をみると、草陰や花の陰、水際に羽をはや
した、小さな人が

月を見上げると一瞬絵に見たような幕に跨がった何かが通り過ぎて
行った

辺りを見渡すと、白い何かが浮いている

「俺の家が、一番元気になる日なんだからよ」

そう言ったアーサーは、綺麗に笑っていた

お菓子がないなら、貴男を頂戴

H a p p y d a y ! (神英) (後書き)

貴女は、女神、か・・・！

こんな駄文ですけど読んでいただいてありがとうございます！
今日中にアップできてよかった・・・！！

勝ち目なんて、ない（神英）（前書き）

本人達が喋ってないという

ほぼマイラという

捏造人名いっぱい出てきます！

リヒテンシュタイン〓ツィラ・ツヴィンクリ

台湾〓王^{ワシ}麗華^{リホウ}

セーシェル〓セシル・カークランド

モナコ〓パメラ・ボヌフォウ

ワイ公国〓ジェシカ・カークランド

セボルガ〓セルジュ・ヴァルガス

ベトナム〓椿^{チユン}蘭^{ラン}

タイ〓ソム・タクシン

ウクライナ〓ソフィア・マラフェイエフ

センスなくて本当ごめんなさい・・・

勝ち目なんて、ない（神英）

「・・・で？」

腕と足を組み椅子に座っているマイラ

その目は汚らわしいものを見ているようだった

「お願いだよ！アーサーを俺にくれないかい！？」

「アーサーと俺は結ばれる運命だとお兄さん思うの！」

「アーサーさんと親友よりも深い仲になりたいんです！」

まだまだ続く国々達の意見に、マイラは一言で返した

「却下」

「まずメタボ、あんたはハンバーガーでも食ってる」

「んでもって髭、死ね」

「菊はとりあえず親友の意味を辞書で引いてきたら？」

次々と意見を否定していくマイラに、若干涙目になりながらもアルフレッドが反論した

「理屈がわからないよ！なんでだい！？」

「なんでも何もテメエ等は両思いじゃねえだろこの馬鹿共がああああああ！！！！」

「「「！！！！」」」

深く長いため息を吐いて、マイラは近くに置いてあるココアを飲んだ

「・・・いつとくけどお前等もだからね」

今までその様子を傍観していた国々にマイラは告げた

すると国々は全員ハッとして反論してくる

「りよ、両思いかどうかは君にはわからないだろう！？」

「そうだよもしかしたらお兄さん達は両思いかもしれないでしょ！！」

「今両思いになる可能性が一番高いのは私ですよ！！？」

「おつとそれなら親分も入らせてもらうでえ！」
「俺だつてそうだ！何てつたつて俺はアーサーの家で食事した仲だからな！！」

さらに立候補者が増える様子を、マイラは只冷めた目で見ていた
国々は自分達に可能性があると訴えている

そうではないことを知っているマイラにとっては滑稽な様子だ
そもそも何故国々がマイラにこのようなことをしているのか
それはとあるパーティーでの出来事がきっかけだった

某国某日のパーティー会場

このパーティーは、それぞれの国々とその富豪達が集まって行われるパーティーだ

アーサーもマイラもその雰囲気は大嫌いだが、いかんせん彼は国で、彼女はその家族である

「こんなパーティー無意味だと思うんだけどな・・・」
どこか遠い目で呟くマイラ

そんなマイラにアーサーは苦笑した

「金を使いたがる馬鹿達のパーティーだ 仕方ねえよ」

その言葉に笑顔は似合わなかった

富豪の娘達は、このような会場で『お気に入り』を見つけるのを楽しみにしている

中にはそんなことを考えない上品な令嬢もいる

だが、それはほんの一握りの人間の話だ

そして、また男性も然りである

「ツイラはバツシュがいるから安心だね」

「麗華にも耀がいるしな」

「セシルは・・・大丈夫だね セシルだし」

「エリザベータも大丈夫だろ 逆にローデリヒの守護にまわってるしな」

「フェリシアーノとロヴィーノはこういう所での振る舞いは心得て

るから大丈夫だね」

「待て、パメラは大丈夫か？」

「えっと・・・あ、髭がなに気ガードしてるから大丈夫」

「そうか　あとは・・・ジェシカはどこだ？」

「え、ジェシーちゃん？・・・ピーターと一緒にセルジュといるか
らセーフ」

「・・・まあ、大丈夫だろ・・・蘭は全然大丈夫だな」

「あ、本当だ　ソムさんも一緒にいるね」

「ナターリヤとソフィアはイヴアンにくつついてるから大丈夫だな」

「あとは・・・？」

「そこまで言ってこちらに向いている視線に気付くアーサーとマイラ
・・・どうしようか」

「うまく誤魔化せねえかな」

「あたし達じゃ見かけの歳の差があるから難しいね」

その時、一人の女性がアーサーの元へと近寄ってきた

「初めまして　私、このパーティーは初めてなので勝手が分かりま
せん」

「教えて下さらないかしら？」

「そういつて微笑む女性の下心は丸見えで

しかも断られる筈がないという顔をしている

すかさずマイラは口を挟んだ

「あら、貴女以外にも勝手のわからない令嬢はいるはずですよ？」

「・・・私が誰に何を訊くかは私の勝手でなくて？」

「何も悪いことだとは申し上げておりませんよ」

「そう言つてマイラは馬鹿にしたような笑みを浮かべた
令嬢など知ったことか」

「アーサーに近寄るな、雌豚が」

「只、少し不公平な気がして」

「そんなマイラにアーサーは吹き出しそうになりながらなんとか無表
情を保った」

「・・・！！不公平も何も、私はこのお方に礼儀を聞きたくて」

「さつさと消えろって言っただよ直接言わねえとわかんねえのかこのxxxが」

「なっ・・・！！？」

「そうだよねご令嬢だもんねこんなことどうせ言われたことないんでしょ？」

「はっ、いい気味」

「そこで、アーサーが口を開いた」

「失敬、どうやら私の妹は貴女が気に入らないようです」

「！！？」

「ここにいるより、あちらにいた方が貴女のためにもなりますよ」

「~~~~っ！！！！」

令嬢は怒ったような顔をして元の場所へともどっていった
周りが少しざわついた目で見ている

「マイラはため息を吐くと、ソファに座った」

「ったく、アーサーに話しかけるとか100年早い」

その言葉にアーサーはとうとう吹き出した

「フツハハハハハハハハハハッ！！」

「今はなかなか傑作だったぞマイラあ」

「ヒヒッ」

涙を流して笑うアーサーに、それを見てはにかむマイラ

周りにはさぞかしおかしく見えていただろう

「あたしが認めないとアーサーとお付き合いはさせません」

「おちゃらけて言ったマイラの本心を聞き逃す国は、いなかった」

「マイラに認めてもらうには、どうするか？」

「国々はそれを考えた結果、このような告白大会を始めたのだった」

「（可哀想、だねえ）」

「だってあたしは可能性のある人を一人しか知らない」

「（もう、入る隙間がないくらいにはなってるのに）」
本当に、可哀想

「（言ったら言ったで面倒だしなあ）」
さて、どうしようか

「（とりあえず、お腹空いた）」

ご飯食べたい

「・・・ご飯・・・」

「どうしたの？マイラちゃん」

「へ」

見上げるとエリザがこっちを見てる

「あ、いや、お腹空いちゃって」

「あら、そうなの？だったら・・・はい、これどうぞ！」

「・・・これ・・・」

渡されたのはバスケット

「それね、今日のお昼に作ったんだけど、はりきりすぎて余っちゃったのよ

まだたくさん残ってるから、いーっぱい食べてね！」

開けるとおいしそうなサンドウィッチがいっぱい

「・・・美味しそう・・・」

ありがと！すっごい美味しそう！！」

卵サンドとか大好物な件について

一口食べてみると半端なく美味い

なんだこれ

「ちよつとエリザさんめちゃくちゃ美味しいんですが」

「そう？ありがとう！」

あー、エリザ可愛いな

これで俺と同類とか本当嬉しいな

「・・・みんなまだ言い合ってたんな・・・」

あたしが飯食い出したの気付いてないな、ありゃ
そんなにアーサーが好きか

当たり前か流石アーサー世界の嫁

「・・・ね、マイラちゃん」

「?はい?」

「本当は、みんなに勝ち目がないの知ってるんでしょ?」

「・・・流石エリザ」

「ふふ マイラちゃんとアーサーさんの様子見てたらわかるわよ」

ああ、ネタ観察か

「私の予想が当たってればだけど・・・」

耳元で囁かれた名前は確かにあつて

「エリザ正解」

「やっぱりね 絶対そうだと思ったのよ」

あんなに小さかったのに、いつの間にみんなのこと出し抜いたのかしら

そう呟きながらも表情は嬉しそう

彼の小さい頃を知っているから言える言葉

「だったら、みんなは邪魔よね」

「・・・え?」

にこりと笑ったエリザの手に握られているそれはフライパンですか?

「え、エリザ?」

「マイラちゃんも早く帰りたいでしょう?ちよつと成敗してくるわね」

ああ、それは大変有り難い

じゃなくてちよ、エリザ?

「私、あの子とアーサーさんには幸せになっほしいの」

もう邪魔なんてさせないんだから

そう言つてエリザはさつさとみんなの所へ向かった

「・・・あーあ・・・」

みんな、頑張つて

「すつきりしたわ」

天使の様に微笑んでいるのにフライパンは血まみれ
無事なのはローデリヒと女の子組だけ

「さ、マイラちゃん、もう帰っても大丈夫よ」

「え、あ、ああ、ありがとう」

言いながら空になったバスケットを手渡す

「サンドウィッチすっごい美味しかったよ」

「また作ってくるわね」

「うん、ありがとう」

みんなには心の中でちよつと謝罪しながら部屋を出た

彼は渡さない

（やっとここまで来たの）

（もうあんたらに勝ち目はないよ）

目の前で楽しそうにしているアーサーとシルヴィオを見て心が柔んだ

勝ち目なんて、ない（神英）（後書き）

名前の付け方間違ってるよ馬鹿！！って絶賛受け付け中です
今回の話は本当に酷いと思う
ごめんなさい

仲直り（米＋英）（前書き）

友情的な感じです

なんとなく、書きたくなっただ．．．

仲直り（米＋英）

さあ、

「・・・いらつしやい？」

「なんで疑問系なんだい」

扉を開けると、世界の大国が立っていた

「いや、呼んだかなー、って思ってた」

「・・・呼ばれたわけじゃないんだけどね・・・」

珍しくちよつと大人しいこいつに悪態をつく気にはなれない

「まあ、入れば？アーサー出かけてるけどもう少しで帰って来るし」

「・・・いいのかい？」

「いいから入んなよ あたしの気が変わる前に」

「・・・おじやまします」

久しぶりに来た、と思う

昔のままで、この家は

かなりの年月が経ったのに、古さを感じさせない

ぼーっとそんなことを考えていると、マイラがティーカップを持ってやってきた

「紅茶」

一言告げられたそれは、懐かしい香りだった

紅茶なんて何年ぶりだろうか

「ありがとう」

お礼を言ってそれを飲む
懐かしい味が、広がる

「・・・おいしい」

「そりゃどーも」

マイラはどうでも良さそうな顔だ
俺に対してはいつもこうだけど

「・・・どう？今の気分は」

唐突にそんなことを聞かれた

「・・・うん、それなりに頑張っているつもりだけど、どうも空回りしちゃうんだよね」

「だろうね」

「俺が間違っていることはわかってるんだけど、もう後には引けないんだ」

「そうだね」

「・・・アーサーには、酷いことしちゃったな・・・」

「・・・わかってんなら、後で仲直りしなよ」

「え」

「まだ、仲直り、できてないんでしょ？本当は」

あの雨の日から、ずっと

「・・・なんでわかるんだい？君」

「なんでだろうね」

その時、玄関で音がした

「・・・ほら、アーサー帰ってきたよ」

「・・・うん」

「おかえり、アーサー」

マイラがリビングから駆けてきた

「アルフレッド、来てるよ」

珍しい来客の名を口にした彼女

「ただいま お前がアイツを家にあげるなんて珍しいな」
「まあ、ね」

マイラは静かに答えた

「あたし、部屋にいるね」

「ああ、わかった」

そのまま静かに部屋にもどったマイラを見送ってから、リビングへとどった

「ようアルフレッド」

「・・・アーサー」

こいつまで静かなのか

「どうしたんだ？」

「・・・君に、用があつてね」

「そうか」

俯いたままの顔は、あの頃にそっくりだった

アルフレッドの手元には、空のティーカップが握られている

かすかに香る紅茶の匂いで、だいたいのことは把握した

「・・・なんだ？用って」

「・・・うん」

言い辛そうな声

「・・・俺は、昔、早く大きくならなきゃって思ってた」

静かな部屋に声が響く

「大きくなって、君に追いつきたいと」

「そう思ってたんだ」

「でも気持ちが空回りして、とうとうあんな戦争までした」

「独立した後も、取り返しのつかないようなことをたくさんやって

来た」

「本当に、後悔した」

「後悔しても、しきれないくらいに」

「本当にごめんよアーサー」

「俺は君を傷つけたくなかったのに」

「あんな風に君を傷つけてしまった」

「その後も、今までずっと君を傷つけてきた」

「俺は、もう、君に許してもらおうとは思ってない」

「でも」

「俺」

「どうしたら・・・」

アルフレッドの目から涙がこぼれた
当然か

なんだかんだ言っただけまだこいつは子供なんだ
こんなに溜め込んで、普段通りに振る舞うのがどれだけ大変かを、
俺も知っている

「・・・アルフレッド」

ビク、とその肩が動いた

「お前がそれを俺に言ってくれて、嬉しいよ」

俺も、今泣いてるのがわかった

「いいんだ、もう」

アルフレッドの目がこちらに向けられる

「それでも俺は、お前を許そう」

驚いたような目で見つめてくる

「お前も、俺を許してくれるか？」

何度も頷くアルフレッドを見て、笑みが零れた

「確かに俺は傷ついたけど、それは仕方ない

国として、仕方ないことなんだ

お前が気に病む必要はない

それに、こうして言いに来てくれただろう？」

お前はもう、立派じゃないか

そう言った途端、身体に重みを感じた

「・・・っありがとう、アーサー・・・っ」

アルフレッドが抱きしめてくる

俺はその背中を撫でた

「本当に、ありがとう・・・っ！」

やっと、仲直りできた

そう思うと嬉しくて、俺もまた泣いてしまった

そんな二人の泣声を

マイラは部屋で静かに笑って聞いていた

たわいもない話をしよう

（ねえ、アーサー）

（俺、君と友達になりたいんだ）

返ってきたのは、俺もだ、という一言だった

仲直り（米＋英）（後書き）

一日二話アップとか調子乗ってる俺
こんな感じで仲直りしてくれたら、マイラも言う事ないでしょう
ついでにアルフレッドを嫌いになることもないでしょう
そんなお話

。壊してしまおうか（辺英）（前書き）

お、女の子、だと・・・！

ナターリヤの口調は捏造です

完璧捏造です

こんな感じかな、ってので書いたので

嫌な人は急いで戻って下さい急いで！！

。壊してしまおうか（辺英）

白銀の世界、彼が立っていた

「・・・アーサー」

話しかけても、返事はない

「アーサー」

彼の手は痙攣していて、指先は血が通っていないかのような肌色をしている

いや、指先だけでなく全体的に、血の通っている人間とは思えない肌色で

「・・・アーサー、兄さん達が待つてる　家に戻ろう」

彼は仕事でこちらに来ていた

私と姉さんは久々にアーサーの顔を見るために兄さんの家に集まった仕事も終わり、アーサーは今日家に泊まることになった

姉さんが夜ご飯を作ると言って、アーサーが外に出たいと言ったのに間はほとんどなかった

彼は今、コートも着ずに白銀の中突っ立っている

「姉さんが作った料理もそろそろできる頃だ」

アーサーは、ああ、と乾いた返事だけしたもの、動く気配は全くない

「・・・なあ、ナターリヤ」

彼からの言葉

「なんだ」

「この世界は、美しいな」

一瞬、意味が分からなかった

「独りの俺を、受け入れてくれる」

独り、だなんて

「俺に指図なんてしない」

指図、だなんて

「それにここだって、すごく綺麗じゃないか」

綺麗、だなんて

彼は何を言っているのだろう

独り？

指図？

綺麗？

ここが？

今の状態ではとても綺麗だなんて言えないのに
積もっている雪は邪魔でしかない

空は曇っているし

木々に葉は一枚だつてついていない

「何を、言っているんだ」

「・・・わからないか？」

「ああ、わからない」

「本当に？」

「わかりたくもない」

「・・・そうか」

「アーサーにそう思わせる世界なんて、わかりたくもない」
そう言えば、彼は振り返った

「お前は独りじゃない」

「独りだ」

「指図なんて、されない」

「されるさ」

「ここは言っほど綺麗でもない」

「綺麗だ」

返ってくる言葉は子供の様で

でも、その言葉の重みを私は知っている

「お前には私達がいるんじゃないのか？」

「指図なんて、されても実行しなきゃそれは指図とは言わない」

「ここよりも、お前の場所の方が綺麗だと思う」

彼の瞳に、光が灯った

相変わらず、肌色は悪い

今にも倒れそうなのに、その足はしっかりと立っている

「そんなこと、ない」

「私が信じられないか？」

「違う」

「だったらいいだろう 戻ろう」

そう言って手を差し出しても、彼は首を振る

「まだ、ここにいたいんだ」

「駄目だアーサー、戻ろう」

暫くしても私の手を掴まないその手を、無理矢理掴む

「おい、」

「姉さんの料理は、作り立てが一番美味いんだ」

心から、温まるから

「今のお前には丁度いい」

後ろから、小さくありがとうと返ってきた

戻りましょう、この世界から

（貴方を悲しませる世界なら、いっそ）

。壊してしまおうか（辺英）（後書き）

最近寒いなーって思ってたらアーサーに一番寒い思いさせてしまった
なんてこったい

地味に季節外れというね

寒いときこそ温かい話書くべきですよね

あ、俺文才ないから無理だ

駄文失礼しました

□ Z w i l l i n g d e r G ? t t i n ・ (普 英) (前 書 き)

パレレル書きやすすギルゼー

ごめんなさい調子乗りました

またまた私が作った中二感溢れる世界のお話です

アーサーとギルは双子設定です

ギルが兄貴です

名字はまんまです

あれだ、家族でも名字が違っていい世界なんだきつと・・・!!↑

・・・名字は生まれた時に神父様から授かるってことにします

あとなんかキスしてます

言っておくが、私は、エロが、書けない・・・

激しくすみませんではどうぞ

□ Z w i l l i n g d e r G ? t t i n ・ (普 英)

「ただいまー！」

屋敷に響いた元気な声

声と入れ替わるように近付いてくる足音

「俺様が戻ってきたぜアーサー！！」

バンツと音をたてて俺の部屋の扉を開けたのはギルベルトだ

「・・・おかえり　また魔物退治か」

「おう　最近の魔物は前より強くてなー、一般の奴等じゃ倒せねえんだよ」

「ふーん」

俺等は一応、貴族だ

俺等にその自覚はない

でも、この国で女神の血を引いている数少ない人間の一部だ

「でな、アーサー」

「んだよ」

「怪我、しちまったんだよ」

「・・・は？」

ギルベルトははっきり言って、かなり強い

こいつが怪我？

嘘だ

それかわざとだ

「ふざけんなよ！怪我すんなって言ってんだろ！？」

「お、なんだ？心配してくれんのか？俺様嬉しいぜー」

「自惚れるな！」

「いいから治してくれよ」

こいつは、俺が怪我を治すのを面白がっている、いや、楽しんでいる俺とこいつにはいろんな能力があるが、俺が持っている能力の1つに治癒能力がある

治し方ははっきり言って、嫌いだ
したくない

いわゆる粘膜接触で怪我を治すことができる

人間の俺等にとって一番手っ取り早い粘膜接触は何か？

・・・一般的にキスと呼ばれるそれだ

つまり、こいつは俺にキスしろと言っているわけで

「絶対嫌だ」

「何でだよ」

「何でも何も俺等は男同士だ」

「関係ねえだろそんなん」

「あるに決まってるんだろ！」

こんなやり取りでさえギルベルトはにやりながら楽しんでる
別にこいつとキスするのが嫌いなわけじゃない

・・・一応、恋人、だから、な

キスだってほんの少し、唇を触れ合わせればすむんだ
そこまではいい

ただ、ギルベルトはしつこい

一回唇を合わせると、主導権はすぐギルベルトにまわる

その後は俺が本気で息ができなくなるまで続くんだ

で、息が整ったらもう一回

それをギルベルトが満足するまで続ける

これが嫌なんだ

しかもそんなことずっと続けてたら、なんていうか・・・

・・・勃ちちまうっていうか・・・

仕方ねえだろ、股間に膝押し付けてくるんだこいつ

「お前はこんなに酷い怪我をしてる兄貴をほっとくのか？」

「その怪我の傷口ははお前の剣でしかできないものだ よって、自
己責任」

まあ確かに右足首がざっくりだが、自分でやったんなら心配するこ
とはない

そう、大量出血だとしても、な

「流石アーサー！俺様の弟だけあるぜ！」

「兄弟つてったって双子だろ」

こいつとは真正銘血の繋がった双子だ

腹違い、とかそんなことはない

「本当に治したくねえのか？」

「当たり前だ」

「・・・仕方ねえなあ」

嫌な予感がした

一歩後ずさるとその距離をつめられる

俺の後には何がある？

振り向くとそこにはベッド

やばい

これはやばい

本気で逃げようとする腕を掴まれた

純粹に力だけじゃこいつには勝てない

腰を抱き寄せられる

ああ、これじゃ逃げられない

「おい、ギルつ、ん・・・！！」

唇に電流が流れたようだった

唇を離そうとすると後頭部から押さえつけられるため、それも願わない

「・・・っ、ふ」

ならばせめて声は出すまいと懸命に堪えると、ギルベルトの目が楽しげに揺らんだ

「あ、」

下半身の一番敏感な部分に膝を押し付けられ、堪えることもできなくなった

「んあ、ふ、んう」

乱暴な舌使いに息をすることすらままならない

この部屋に響く卑猥な水音に耳を塞ぎたくなる

「ふあっ、や、あん、あっ・・・！」

下半身から与えられる刺激にも翻弄され、頭の中が真っ白になる
このまま流されるのか、俺

唇、舌と甘噛みされ、舌を舐められる

そのまま舌を吸われ、また甘噛みされる

「あう、んんっ・・・！？」

そりいっそう強く舌を吸われたのと同時に思いっきり膝で擦り上げ
られる

背筋に何ともいえない感覚が駆け抜けた

そしてより深く口付けられ、膝の動きも強くしたまま続行

「うあ、や、ひあっ、んふっ」

口内でどちらのものともいえない唾液が溢れ、唇の端から流れる
頭の中が霧がかかったようにぼやけていく

息が、できない

ギルベルトの背中を力の入らない手でそれでも叩くと、最後に唇を
舐められ解放された

「ぷはっ・・・」

足に力が入らずに、身体が崩れ落ちた

落ちた先はベッドで

「アーサー可愛いぜー」

「っざけん、な」

酸素を吸い込むことで精一杯な俺を、ギルベルトは余裕な笑みで見
下ろしてくる

「あーあ、勃っちまってんな」

「・・・！！」

恥ずかしい

だいたいお前がそうさせたんだろ、なんて言葉はこいつが喜ぶだけ
だから言わない

「弟の性欲を満たさせるのは、兄の役目だよな？」

ケセセ、と特徴的な笑い方をしながら楽しそうに俺に跨がってくる
「なあ、アーサー」

「、なんだ、よ」

「知ってるか？女神の血を引いてる双子は、弟の方が感じやすいんだってよ」

なんだ、そのお前に都合がいい逸話は

「今逸話って思っただろ？残念ながら事実なんだぜー」

抗議の言葉は、再び合わせられた唇に吞まれた

Twin of goddess .

（確かに俺は恵まれている）

（ただ兄貴の性格をどうにかしてくれ！！）

□ Z w i l l i n g d e r G ? t t i n ・ (普 英) (後 書 き)

我が家のギルは基本アーサーより年下です

年下攻めつていいとおm(殴

でもちよつとだけ年上でお兄ちゃんぶるギルっていいよね・・・！
つてことです

題名のドイツ語と最後の英語は意味同じです

ググれば多分一発ですでもググらないで恥ずかしいから・・・！！

(センス的な意味で

あと双子設定いかせてなくて泣いた

今度こそは・・・！！(あるかどうか分からない

こんな関係でいいの（神英）（前書き）

うはまたキスしてます

本当いい加減にしる俺自重しろ

最近自重するのを自重するようになってます

あとなんとなくポツキーゲームさせました

今日ポツキーの日でしたよね？あれ？

こんな関係でいいの（神英）

某国ルートヴィツヒ宅にて

「なあルツツ・・・」

「・・・なんだ兄さん」

「・・・なんでこんなことになってんだ？」

「・・・他に訊いてくれ」

「だってよルツツ 兄上とアーサーがあんな妙な言い合いしてんだぜ？」

そういつてギルベルトが指差す先には苦笑しながら言い合う二人
何故か冷や汗までかいている

「・・・変、だよな・・・」

「そうだな・・・」

まあ少し酔っぱらったからだ
そう二人は思い込むことにした

「だからな」

アーサーが口を開いた

「お前昔っから肉ばっかり食ってんじゃねえか
いい加減にしないと太るぞ」

「肉ばっかり食っているのはお前も同じだ」

それに肉ばっかりじゃない 野菜も食ってる」

「俺はお前が野菜を食ってるところを少ししか見てねえ」

「安心しろ ちゃんと食ってる」

ところでお前は貧弱すぎないか」

「身体が弱い弱小野郎にだけは言われたくねえ」

「昔の話だ 今はギルやルツツよりも健康だ」

「その健康はいつまで維持できるんだろうなあ？」

「少なくとも、お前よりは維持できる自信がある」

二人の手元にはジョッキが二つ
中にはビール

ほとんど減っていない

つまり、二人は中途半端にテンションが高まっている

だから、普通だった会話が妙な言い合いにまで発展してしまった

「いい加減にしろよもやし」

「黙れ貧弱」

「もやしが何言ってるんだ」

「貧弱」

「マジいい加減にしろよ」

実は口喧嘩に強いアーサーと張り合うシルヴィオもなかなか口喧嘩が得意だ

「なんだお前は俺が野菜を食ってるところを見れば満足するのか？」

「ちげえよそうじゃねえ お前こそなんなんだよ」

「他人に訊くときは自分が何をすれば満足するかを言ってからだろ、大英帝国殿？」

「言い返す暇があるなら答えた方が懸命ではないか、神聖ローマ帝国殿？」

面倒くさいことになった、とギルベルトは頭に手を当て溜息を吐いた
ルートヴィッヒはそんなギルベルトの様子に本気で驚く

今までここまでまいる兄を見たことがなかったのだ

それほどに、あの二人の言い合いは面倒くさいのだろうか

・・・まあ、聞いていると面倒くさいのはまるわかりである

「（どこでやめよう）」

二人は完全に引き際をなくしていた

苦笑を浮かべた言い合いにうんざりしていたのは周りの人間だけではなかったのだ

「（ああ畜生面倒くせえ）」

こんなときでも言い合いを続けられる自分のボキャブラリーをアー

サーは呪った

それはまた、シルヴィオも同じで

「（いい加減やめたい）」

だが口から出る言葉は終わることを知らない

どうやったらこの状況を終わらせることができるのか

そう考えている二人に、ギルベルトの声

「おい、二人共」

二人は同時に振り返る

「言い合いの決着がつかねえんだったら、ポツキーゲームで決めたらどうだ？」

そういうギルベルトの手にはポツキーの箱

「・・・何でお前がそれを持つてるんだ？ギルベルト」

シルヴィオが尋ねると、ギルベルトは笑顔で言った

「本田にもらったんだ 今日本田の家ではポツキーの日なんだってよ！」

アーサーは慌てて答えた

「馬鹿、お前ゲームの内容わかってんのかよ！」

「勿論だぜアーサー！」

「お前はそんなの勧めて楽しいか！？」

その時、シルヴィオが口を開いた

「・・・わかった」

「は！？」

「ギル、それをくれ」

「わかったぜ兄上ー」

「おいシルヴィオ！？」

シルヴィオはアーサーに笑いかけた

「これなら、文句ないよな？」

「（ありまくりだ）」

ただ本音を言ったところで意味がないことをアーサーはよく理解していた

ルートヴィッヒとギルベルトは自分の部屋に戻り、アーサーはシルヴィオの部屋に連れて行かれた

「じゃ、やるか」

どこか楽しそうなシルヴィオにアーサーはげっそりする

「（やっぱこいつ、ルートとギルの兄貴だな・・・）」

はつきり言ってシルヴィオは、DSの分類にはいるのだろう
まあ、それは情事の時だけなのだが

つまり、今こうして楽しそうにしているということは

「（やばい）」

やられる

「ほら、アーサー」

そう言って差し出されたポツキ―

はつきり言って、銜えたくない

「・・・やっぱり、やるのか」

「当たり前だろ」

こんな面白そうなこと、と呟くシルヴィオは恐ろしく笑顔だ

「（・・・仕方ねえ）」

こうなったら自棄だ、と思ってそれを銜える

「よし」

満足げに頷いて、シルヴィオももう片方の端を銜えた

「（・・・!）」

ちか、い

思っていたよりもずっと

シルヴィオの目がじっとこっちを見てくる

「（駄目、だ）」

ここでひるんだら負けだ

こんな時ばかりプライドの高い自分が嫌になる

少し、ポツキーを齧って食べると、先ほどもシルヴィオと顔が近くなる

俺を見るシルヴィオは楽しそうだ

「（っ、）」

一気に距離が縮まった

シルヴィオが食べ進めたんだ

はつきり言って、鼻があたりそうだ

っていうか、普通ならあたってる

少しシルヴィオが顔を斜めにしてるからあたってないだけだ

「（近い近い近い近い）」

どうしよう

近過ぎる

おもわず口を離しそうになると、シルヴィオに顔を手で固定された

「（あ、）」

こいつ、目が本気だ

少しずつ楽しむように食べ進めるシルヴィオ

ちなみに、俺が銜えてる部分は俺の体温でチョコが溶けてきた

「（俺も、食べるべきか？）」

でも今食べたら確実に唇同士が触れるわけで

だからといって食べなければ唇が触れないわけでもない

もうそろそろ触れてしまう

ちゅ

「あ」

口の中に残っていたポッキーを舌で攫われて、唇を合わせたまま食べられる

あたっているそれが少し動いているのがくすぐったくて、もどかしい顔を固定していた手が、後頭部と腰に移動した
そして、舌が入ってきた

「んあ」

そのままベッドに倒れ込む
しまった、場所移動すんのわすれてた

「ふ、あ、んんっ」

口内の弱いところを舌で舐められて、頭の中がぐらくらする
こいつは弟達に似ないで、キスが上手い
はつきり言つて、俺より上手い

キスだけで孕みそうになるくらいに

そんな馬鹿な、とか思うな
本当だ

「ふあ、ん、うあ、」

息なんてできないくらいに深く口付けらる
さつき食べたポッキーの味がして、その味を求めてしまいそうになる
シルヴィオもそうだったのか、舌で舌を舐められた

何回も、何回も舌を舐められて本当に孕みそうで辛い

目からはキスだけなのに涙が流れてきた

部屋に厭らしい水音が響くと、それがルートとギルに聞こえてない

か心配になる

まあ、聞こえる筈ないんだけども

「あう、や、はあんっ、ひゃっ」

漏れる声を止めることも出来ずに、ただただジルヴィオの舌使いに
翻弄される

「ま、シルヴィ、くるし、んむっ」

抗議の声も無視され、そのままキス続行

首筋をシルヴィオの長い指で撫でられて、思わず喉を鳴らしてしまう
腰に添えられていた手は上へと動き、俺の胸元を弄る

「んんっ、ふぁ、あぁっ」

口内だけでもこんなになっってしまうのに、他のところまで弄られた
りなんてしたら

「も、や、やだ・・・っ」

そう言うとき最後にヂュ、と舌を吸われて、唇が離れた

「・・・アルトゥール」

こんな時に愛称で呼ばれると、気持ちは昂る一方だ

「・・・んだよ」

「今日は、くだらない日だったな」

「・・・ああ」

「朝からずっと家の中でふざけあったり言い合いしたり」

「そうだな」

「でも、今からでも変えられるよな？」

「・・・ん」

今日くらいは流されてやつてもいいかもしれない

「・・・どうした、やけに素直だな？」

「・・・勘違いすんなよ

これは俺のためじゃなくて、お前のためだからな」

「！！」

「・・・そうか」

珍しく驚いた様子のシルヴィオを見れたから、今日はそれでいいか

「お、まえは・・・っ」

「顔赤いぜシルヴィ」

「・・・そう言うお前だって」

いきなり胸元を触られて、身体が跳ねた

「大分顔が赤いな」

結局、俺らはこんな会話のままなのか

シルヴィオの首に腕をまわすと、再び身体がベッドに沈んだ

ああ、くだらない

（心の中で銀髪のあいつに少し感謝した）

こんな関係でいいの（神英）（後書き）

もう本当にエロとか書けない

己の文才を呪ってやる・・・

駄文失礼しました

ところでアーサーのおやすみCD楽しみすぎます

○この手を離すのが不安なのです（神英）（前書き）

ちよつとシルヴィオに泣いてもらった

○この手を離すのが不安なのです（神英）

背中に重みを感じた

そして肩辺りに見える金髪とも銀髪とも言えないどっち付かずの髪手は腰にまわされ、ギュ、と抱きつかれる

「・・・どうしたんだ？」

そいつの頭を撫でると、肩に頭を押し付けてくる
「・・・」

その状態で、ちらりとこちらを見てくる

その綺麗な蒼は不安の色でいっぱい

「・・・離してくれるか？動けないんだが」
「嫌だ」

間髪入れずに返ってくる返事

「お前、弟達はどうしたんだよ」

「あいつらなら家にいる」

「そう言うことを言ってるんじゃないくて」
「アーサー」

どうやらこいつは今日は俺の話を聞く気はないらしい
その時、肩の辺りが少し濡れているのに気付いた

「・・・シルヴィオ？」

「アーサー」

俺を呼ぶ声は震えてる

「どうしたんだ？」

もう一度、問うてみる

「アーサー」

腰にまわされた腕に力が込められた

まるで自分の玩具を誰にも渡すまいと必死になっている子供の様に

「なんだ」

「アーサー」

「うん」

「アーサー」

「大丈夫」

「アーサー」

「大丈夫だ、ここにいる」

それを言った途端、シルヴィオが顔を上げてこちらを見た
いつも凜々しいその顔は涙で濡れていた

腰にまわされていた腕の力が弱まる

身体をくるりと回転させ、シルヴィオの方に向き直る

そのまま両手を広げた

「ん」

促すように見つめると、今度は正面から抱きつかれる

震えるその背中をあやすように撫でる

こいつは、恐いんだ

消える筈が戻ってきた己の身体がまた再び消えてしまうのではない
かと

「シルヴィオ」

「アーサー」

「安心しろ」

「無理だ」

「無理じゃない」

「無理だって」

「俺ならここにいる」

「うん」

思考も昔に戻ってるようだった

「ほら、温かいだろ？」

「・・・ん」

「大丈夫だよ」

「本当にか？」

「当たり前だ」

「・・・絶対に？」

「ああ、絶対に」

「・・・アーサーも、消えないか？」

「消えるわけがない」

そう

消えるわけ、ない

「シルヴィオ」

その額に自分の額をコツン、とあてた

「大丈夫だよ」

大丈夫

「ほら、もう泣くな」

「泣いてない」

「泣いてるって

顔、洗いにいくか？」

「・・・もう少し、ここにいたい」

「そうか」

再び強く抱きしめられる身体

これだけでこいつが安心してくれるならいくらでもやらせておこう
だから

安心してくれ

お願いだ

泣かないで、愛しい人

どうすればいいかわからなくなるから

「アーサー」

「なんだ？」

「Ich liebe Sie」

「俺もだよ」

「言ってくれないのか？」

「・・・Ich liebe Sie」

「もっと」

「・・・言ってほしいか？」

「うん」

「お前、俺より子供っぽいな」

「うるさいな」

「I love you」

「・・・英語」

「意味は変わんねえからいいだろ」

「・・・」

「Ich liebe Sie」

「そっちのほうがいい」

「我が儘め」

普段ならこんなことは言わない

でも、今だったら

今までの分は言える

「Ich liebe Sie」

この言葉が今こいつを安心させる唯一の方法なら
俺は何度でも口にしよう

だから、もう一度だけ聞いてくれ

大丈夫、もう消えねえよ
(俺も、お前も)

○この手を離すのが不安なのです（神英）（後書き）

ごめんなさい

とりあえず謝っておく

本来神聖ローマヘタレだよなとか思いながら書きました

これはヘタレじゃなく情緒不安定だ

なんだろう

今度こそはヘタレシルヴィオを・・・！（意気込む意味が分からない）

こんな日常も（神英）（前書き）

いい夫婦の日なので書きました

なんかもうアーサーとシルヴィオがいちゃつてれば私はそれでいい

・・・皆さんも神英、書きませんか・・・？

こんな日常も（神英）

あ、ありのままに起こっていることを話すぜ！

今あたしの目の前ではシルヴィオとアーサーの何気ない会話が続いているんだ

それだけならなんておかしいことはない

その内容がちよっと悶えるんだよ

「おい、アーサー あれ」

「ん？ああ、ほい」

シルヴィオが新聞を読みながら紅茶飲んでいるんだけど、

あれって言葉でアーサーが差し出したのはミルク

シルヴィオも平然と受け取ってそれを紅茶に混ぜる

どこぞの一家の朝食の風景とか思っていると、今度はアーサーが口を開く

「シルヴィー、昨日のあれ、何処に仕舞ったんだ？」

「あれならあの部屋の棚だ」

「そうか」

・・・えつと、あたしはどうすればいいのかしら

「そう言えばあたし今日友達と用事が」なんて二人の子供の様に言って家を出るべきか

違うか

とりあえずメモしとく

「・・・あ、アーサー」

「なんだ？」

「今日はパンが安いぞ」

「そうか」

「あとジャガイモとチーズも安いな」

「わかった 後で買い物行くから手伝ってくれ」

「ja」

え、何？何この状況

今日は何の日ですか？ん？

・・・ああ、いい夫婦の日か

でもこの二人はそんなの知らないしな・・・

それより何より今までにもこんなことあったな、うん

あたしも少しなれて表面は平然としてる

内臓バクバクですが

「マイラ、昼飯何がいい？」

「・・・え？いいよ、あたし作るよ？」

「いや、いつも作ってもらってばかりじゃ悪いからな」

「アーサー・・・」

何アーサーいい人過ぎる

なんだこの聖母様

笑顔が眩しい

「じゃあ、オムライス」

「オムライスカ 丁度いい

シルヴィー、買い物行くぞ

チーズとソースがねえ」

「わかった」

「マイラは？」

「あたしはいいよ」

「じゃあ、留守番頼むな」

「任せて」

アーサーが作るオムライスは本当においしい

まあ、普段はわざと下手に作ったりしてるけど

「行ってくる」

「行つてらっしゃーい」

・・・

・・・よし、行つた

とりあえず今のことを菊とエリザに報告

後は素敵サイト様を漁りにいくか

「今日は色々安いな」

「そうだな」

いつもの半額とかがいっぱいだ

でも人は少ない

今は丁度仕事時だもんな

「シルヴィー、チーズ何処だったっけ」

「チーズは・・・あっちのほうか」

「そうか」

シルヴィオが指差したのは店内の奥

そういえば、そうだったな

「ありがとな」

「ん」

チーズ売り場に向かう途中、・・・だいたい十代後半くらいだろうか
それくらいの女性が5人ほど菓子売り場に居て（友達のような）、

俺等を見るなりキヤーなのかギヤーなのか

ウォーなのか・・・とにかく奇声を上げながら携帯で写真を撮りま
くりはじめた

中にはムービーで撮っているのもいて・・・

まるでいつしかのマイラやエリザや菊のようなその反応に思わず苦
笑してしまうと

一際声が大きくなつた気がする

シルヴィオの方を見ると目が合った

シルヴィオは何かを思いついたように笑うと、俺の目線に顔を合わ
せてそのまま

ちゅっ

可愛らしい音がしたが俺はそれどころじゃない

そのまま唇は俺のそれから離れてはいったものの、唇に嫌にリアルな感触が残る

人が、しかも若い女性がこちらを見ているのにそんなことされたら恥ずかしいに決まってる

何でいきなりやるんだとか、何故人前でするんだとか言いたいことはあるけど、そのことは吹っ飛んだ

女性達の奇声がよりいっそう大きくなった

耳を塞ぎたくなるくらいの大声にこちらが驚いてしまう

女性達の方を見ると、デジカメまで持ち出して撮っているのがいて、本当にド肝を抜かれた

さっきのシーンを撮っていた女性もいたらしく、ムービー撮影を続行している

もう一度シルヴィオの方を見るとやっぱり笑っている

どこかギルベルトに似てるその自慢げな笑みに怒鳴りそうになるのを堪えた

するとシルヴィオが顔を耳元に近付けてきた

「顔、赤いぞ？」

「っ誰のせいだよ・・・」

「俺だな」

凄く楽しそうなその笑顔

ああこいつは何を考えてるんだ

その後グッと肩から抱き寄せられると女性達の方に笑いかけて、そのままチーズ売り場に連れて行かれた

女性達の中には座り込んで床を叩いているもの、誰かに電話をかけ

て早口で何かを話しているもの、撮った写真やムービーを見ているもの、未だに撮り続けているもの、様々だった

・・・大丈夫か？俺の国・・・

「・・・おいシルヴィー」

「なんだ？」

「なんであんなことしたんだ」

「サービスだ」

そう言くとアーサーは訳が分からなそうな顔で「はあ？」と声を上げる

本当に鈍感すぎて、時々面白い

「訳わかんねえ」

「だろうな」

「なんであれがサービスなんだよ」

「マイラに聞いてみる」

そう言くとアーサーは暫く考え込んで、

「やっぱいい」

と呟いた

「そうか」

久しぶりに外で楽しませてもらったお礼に、チーズは俺が買おうか

『それ本当ですか！？』

『本当なの！？マイラちゃん！！』

ただいまエリザと菊とスカ。プ中

「本当本当 思わず二人の子供の気分になっちゃったよ」

『羨ましますますよそれ！』

『もう本当、何処の熟年夫婦！？って感じよね！』

「そうなんだよ！のクセして蜜月夫婦みたいな時もあるしさあ・・・」

『マイラちゃんいいわね』 生で見れて』

「それは否定しない」

『そういえば、隠しカメラの方どうですか？』

「ばつちり 後で送るねー とりあえず、6つくらいある」

『なんですと！？』

『マイラちゃん、それって・・・』

「勿論1つのビデオにいくつか入ってるよ」

『それは、なんて、楽園、ですか・・・！！』

「ほんとすごくてさあ・・・ あ、3つ目の最初ら辺、個人的にすごいツボ」

『なんと、まあ・・・』

「あと乳首開発とかある」

『！！！！！！』

お、菊とエリザ淒い顔

なんでわかるか？カメラつきだもん

内容は勿論下いけど

『シルヴィオさん、流石ルートさんとギルベルト君のお兄さん・・・』

』

『あの子がそんなふうに育ってくれるなんて、私嬉しいわ・・・』

「ほんつとすごかったから あれは鼻血でる 本気で」

『楽しみにしてますね』

「うん」

『そういえば、開発出来たの？』

「できたよ すごい時間かかったけど」

『見応えがあるわね・・・』

この腐った集団なんだろう

すごいテンションあがる

『わたしも今原稿がそろそろ終わりそうなので、出来上がったらお二人にお送りしますね』

『あ、私も』

「ありがとう」

その時玄関の方から声が聞こえた

「あ、アーサー達帰ってきた」

『おや、そうですか』

『じゃあ、また後でね』

「うん 二人共ちゃんと寝てね？限できてるよ」

『おっと、これは失礼』

『心配してくれてありがとうね、マイラちゃん』

「うん」

そこで、ス。イプ終了

「おかえりー」

「あ、ああ、ただいまマイラ」

「ただいま」

「？うん」

アーサーの顔が赤い

・・・なんだなんだいったい何があったんだシルヴィオ後でkws
k!!

「俺、オムライス作ってくるな」

「うん！」

アーサーはキッチンの方に向かっていった

・・・さて、と

「シルヴィオいったい何があった」

「気付くの早いな」

「当たり前」

「座れ、話はそれからだ」

「だからお前等は何処の蜜月夫婦と・・・!!」

「いや、サービス精神は大切だからな」

「よくヘタレなお前が出来たね・・・」

「ヘタレとはなんだ」

「知ってるんだからね」

「・・・!？」

この一部始終を聞いたあたしのテンションは夜中より酷い

これは、いい夫婦

「・・・まあ、いい」

コホン、とシルヴィオが咳払いした

「あとで、見せてくれるんだろ？」

「勿論」

シルヴィオはビデオに映っているアーサーの反応を見るのを楽しんでいる

だから、本人が見たいというのは見せる

アーサーには教えてないけど・・・

「・・・マイラ、お前一応未成年の女性なんだからもう少し自重を
だな・・・」

「あたしが自重したら世界は終わるよ」

「そんな大規模か!？」

「さーてねフッフ」

シルヴィオをからかうのは少し楽しい

「できたぞ」

そう言つてアーサーが運んできたのは大きなお盆にオムライスが3つ
それぞれ綺麗に盛りつけてあつて、いい匂いで、本当フェリとか髭
にも負けてないんじゃないかってくらい
つていうか負けてない
勝ってる

「美味しそ」

「そうか？」

「うん!」

アーサーは本当に料理がうまい

普段料理をつまく作らない理由を訊いたら、

『髭の存在理由が1つ減るからな』

とのこと

あんなヤツのことも考えてくれるなんてアーサーは本当優しい

「頂きます」

スプーンで一口目をすくうと、中のケチャップライスがすっごい美味しそうで

チーズも入っていておかわりしたいくらい

まだ食べてすらいけないけど

口の中に入れると予想してたよりずっと美味しかった

・・・やばい幸せ

「美味っ」

「だったらよかった」

そう言つて微笑むアーサーが綺麗すぎてどうしよう

シルヴィオも美味しそうに食べてる

「アーサーも食べなよ」

「ん、じゃあ・・・」

アーサーも食べ始めると、二人がまた夫婦にしか見えなくなってきたこの二人の子供ならあたし本望です

・・・ああほらまた夫婦のやり取りがはじまった

ここから先は皆さん妄想してください

こんな日常も（神英）（後書き）

こんなことがあったらいいな、という願望
本当にそれでいいと思う
マイラには場所をかわっていただきたい

不法侵入は犯罪です、やめてください（西英）（前書き）

久しぶりの他c p、そして西英

題名は最後辺りで意味わかるかと・・・

二人がずっとお風呂入ってます

一緒に入ってる理由は、妄想ゲフンゲフン・・・

想像で補って下さい

では、どうぞ

不法侵入は犯罪です、やめてください（西英）

「あつちい・・・」

この時期には季節外れなことを呟くアーサーに対してアントーニョは軽く表情を緩める

「あつたりまえや　ここ風呂場やで？」
そう

現在風呂場

温まっている真つ最中である

「あーちーいー」

さつきよりも長く訴えるアーサー

「そんな暑いなら出ればいいやん」

アントーニョはアーサーの額を撫でながら笑った

「うつせえな・・・」

アーサーの肌は、驚くほどに冷たい

こんなに身体が冷えているのに、暑いもなにもないだろう

「あついつて言ってるんだよ」

「なんや、俺どないすればいいん？」

「別に」

アーサーの意図を読み取るのは、鈍感なアントーニョにとっては至難の業だ

ロヴィーノは顔に出ているからわかるのだが、アーサーは表情にださないでものを言う

「・・・あつい」

「せやね」

「・・・hot」

「・・・アーサー？」

馬鹿の一つ覚えの様に繰り返すアーサー

「本当に、暑いん？」

湯船に浸かっている二人の温度差は明らかだった
アーサーは、熱いお湯が温くなるほどには冷たい
一方アントーニヨの周りは熱いままで

ここで暑いというならアントーニヨの方が妥当だろう

だがアーサーはアントーニヨから顔をそらすと不満げな顔でさらに続けた

「あついあついあついあついあついあついあつい」

「ちょ、ほんまどないしたんやアーサー？」

「黙れよ」

「アーサー？」

「Shut up」

機嫌が悪いのかどうなのかさえ、わからない

アントーニヨは明らかに困惑していた

試しにアーサーの手に触れてみる

冷たかった

先ほどから湯船に浸かっているにも関わらず、それは本当に氷の様に冷たかった

雨の多いこの島国は、確か年間を通して温度が低かった気がする

「アーサー大丈夫なん？」

「何がだよ」

「身体、冷たいで？」

頬を撫でると、やはり冷たい

だがアーサーはその手を払いのけると、再び呟いた

「あつい」

「暑いん？」

「ちげえよ あついんだ」

「せやから、暑いんやろ？」

「違う」

「何が？」

アントーニヨはとにかくアーサーの身体を温めたかった
暑いなんて嘘だ、こんなの寒いに決まっている
風呂場なのに、湯船なのに

「のわっ」

アーサーの腕を引っ張り己の腕の中に閉じ込める

「な、にすんだよ!」

「うひゃあ、アーサー冷たっ」

触れた肌の冷たさに思わず目を見開くアントーニヨ

「・・・アーサーほんまに大丈夫なん?」

「うるさい 離せ」

「答えてくれるまで離さへんでー」

「答えるから」

「駄目や」

己からすぐにでも離れようとするアーサーの態度に少し傷つきなが
らもアーサーの顔を見る

目をこちらに合わせてくれない

「・・・あちい」

「嘘や」

「嘘じゃねえ」

「アーサーすつごい冷たいで」

「ちげえよそうじゃねえ」

「じゃあなんや」

アーサーはため息を吐き、アントーニヨの胸元に手を当てた
そしてそのまま

「つつらあああっ!!」

「のわああああああああっ!!?」

アントーニヨを突き飛ばした

湯船からお湯が溢れる

一般家庭のそれより3倍はあるであろうその湯船の角に、アントー
ニヨは頭をぶつけた

「ったあゝ・・・ なんなんアーサー!？」

「うるさい」

「アーサーさつきからそればっかやあ!!」

涙目で訴えるアントーニヨには目もくれず、アーサーは己の額に手を当てると、湯船に寄りかかりながら再びため息を吐いた

「熱い・・・」

その声は、アーサーが予想していたよりもずっと小さかった

嗚呼、こんなにも

（貴方といるだけで）

（貴方のことを考えるだけで）

（身体の奥が熱くなってしまうなんて）

（考えるつもりなんて毛頭ないのに）

（勝手に貴方が頭の中に入ってくるなんて）

恥ずかしさで死ねそうだ、くそ

不法侵入は犯罪です、やめてください（西英）（後書き）

アーサーが珍しく乙女思考だ・・・

・・・あれ、珍しくない

乙女趣味だしこの子

アーサーはきっと男の娘だと思います

愛してるの！（香英）（前書き）

またまた捏造人名
香港^{ワシントン}王^{シアン}香

愛してるの！（香英）

今日はよく晴れた日だ

朝目が覚めると部屋に差し込む朝日でよくわかった

晴れた日は、好きだ

心が温まるんだ

この何とも言えない温かさは、まるでアイツの様で

「・・・そういえば」

今日、あいつが家に泊まりにくることを、今思い出した

「Hello、アーサー 久しぶりのな？」

目の前に立っている俺よりも少し背の高い愛しいアジアの彼
黒い目と瞳は本当に綺麗だ

「Hello 香、よく来たな」

笑顔で出迎えると、香は微笑んだ

「当たり前 っつーかアーサーの誘い断るとかあり得ないから」

恥ずかしい台詞を易々と言って退ける香は本当にかっこいい

「な、何恥ずかしいこと言ってんだよ、さっさと家入れ」

そう言っただけで促すように手を動かすと、その手を握られる

「っ！」

「お邪魔します」

家に入っただけで香は楽しそうだった

「あ、そうそう」

香が鞆の中から取り出したのは白いハンカチ

「これに、バウヒニアと薔薇の刺繍してほしいんだけど」

「バウヒニアと薔薇・・・不釣り合いじゃないか？」

「アーサーなら上手くやってくれるっしょ それに・・・」

ふとこっちを見て微笑む香

ああ、綺麗だ

「俺とアーサーの花なんだから、不釣り合いな訳ないの？」

「・・・！な、ば、ばか、この・・・！！」

駄目だ

顔が赤い

「・・・あ、たりまえ、だろ」

「流石アーサー」

やってくれと思うってた

彼はまた楽しそうに笑った

「アーサーの家でもこんなに晴れるもんなの」

「悪かったな、曇り雨ばかりで」

「曇り雨だってアーサーの一部なら愛せるし？」

「また、お前はそんなこと！」

「嘘は言っていない」

アーサーを後ろから抱きしめると、顔を赤くしながらも嬉しそうだった

アーサー、マジcute的な？pretty的な？

「アーサーも、俺のこと好きっしょ？」

「ば、大好きに決まってるんだろ！！」

「俺はアーサーがcuteでprettyだと思う」

「は？お前なんか、めちゃくちゃかつこいいじゃねーか」

この人は、本当に嬉しいことを言ってくれる

でも、ちよつと対抗心を燃やしてみたくなったり

「それを言うなら、アーサーはbeautifulなんだけど」

「・・・！それは、お前だろ！」

「違う、アーサー」

「香」

「アーサー」

「香」

「アーサー」

「香」

「アーサー」

「香」

「……」

暫く睨み合つてみたけど、お互いに遊んでる気持ちはあるからすぐ笑っちゃうし

「……ぷっ」

ほら、今回はアーサーの負け

「ふはっ」

「……ふふっ」

つられて俺も笑い出すと、アーサーにキスされた額を

「なあ香、今夜はお前が飯作ってくれるんだろ？」

「当たり前 アーサーの為なら何でも作れるし」

「俺のこと、満足させてくれよ」

「Yes, Sir」

「良い子だ」

頭を撫でられるのも、嫌いじゃない

子供扱いでもかまわない

この人が、俺を見てくれてるのはわかってるから

「香、ほら、ちゅー」

「ん」

バードキスをねだる彼は最高にcute

いや、言葉じゃ言い表せないくらいに……とにかくすごい

「大好きだぜ、香」

「それはこっちの台詞」

他の国とか、国民とか、とにかく俺等以外が見たら砂糖吐きそうな光景だと思う

まあ、こんなcuteなアーサー他人に見せる気ないけど

「アーサー、風呂と夕食、どっち先にする？」

「んー、夕食

腹減ったし、早くお前の食いたい」

「・・・その言い方、誤解してもOK？」

「お前な・・・まあ、別にいいけどよ」

ニコニコしてるアーサーが本当にcuteだ

ああ、食べたいくらいだ

・・・まあ、後で食べるし？

「そんじゃ、kitchen借りるから」

「おー」

今日はいつもより多めに作って、明日の朝すぐ食べれるようにしておく

「美味しい」

「Thank you.」

今日はずっと蕩けたような顔をしているアーサー

アーサー可愛すぎておれ飯食べにくいんですけど的な？

食べないと体力保つかわかんないから食べるけど

アーサーは食べても確実に持たないっしょ

「香、これ今度レシピ教えてくれ」

「OK、他のも教えるけど？」

「・・・じゃあ、頼む」

少し恥ずかしそうに俯くアーサーが、本当に可愛かった

食べ終わった後は風呂に入って、bathroomで2戦したあとbathroomで数えきれないくらいやった
アーサーがいつもより素直で本当可愛かった
自慢したい

でも他のヤツらにあんなアーサー見せたくないし
朝、起きて隣を見るとアーサーがこつちを見てた

「・・・Good morning .

いつから起きてたの？」

「Good morning .

今起きたばつかだよ」

アーサーの声は少し擦れていて、なんていうか、ぐつときた

「・・・香」

「何？」

「・・・・・・・・愛してるからな」

「・・・・・・・・！」

もう本当、俺の恋人はcuteでprettyで、
まとめて言うならgreatすぎる！！

愛してるの！（香英）（後書き）

ど、うでしたしょうか・・・（日本語おかしい
バカップル・・・？
・・・バカップル難しい・・・

□ 不思議、不思議、不思議？（神英）（前書き）

学パロnnot学ヘタ

何の意味もない学パロです

リクエストです（そのわりに設定をいかせない美奈夜クオリティ）

まあ、アーサーが生徒会長です

金持ち校です

それくらいしか設定がない・・・だと・・・？

でも一気に色々イベント考えた自分は本当に意味わかんない

□ 不思議、不思議、不思議？（神英）

外からは、部活動中の生徒の声が聞こえる
校舎の中からも、文化部達の声

歩くたびに俺に影を作り、窓から廊下を照らす夕日

只今俺は、この学園の生徒会長様を搜索中だ

「アーサー」

声を出しても彼の声は聞こえない

気配もない

さてと、今度は何処に行こうか

おかしいな

かくれんぼは得意な方だ

最終的に来たのは、生徒会室

今日の放課後、ここに来てアーサーがいなかったから、この搜索をはじめた

なんだかんだで結構長い間探しまわったから、戻ってきているのではないか、という、淡い期待と共に扉を開く

ギィ、と、扉が軋んで音をたてた

大きな窓によって照らされた生徒会長の執務用机には、案の定誰もいなかった

「・・・アーサー・・・？」

ああ、本当に彼は何処へ行ったのか

校舎内はくまなく探したから、おそらく校舎の外だろう

彼は外が嫌いだ

では、彼が行きそうな外とは？

・・・中庭に、薔薇園があったはずだ

「・・・行って、みるか」

彼が校舎内以外で行きそうなのは、そこだけだ

中庭に行くには複雑な道を通らなければならない
生徒の中には中庭に行けずにいる者がほとんどだ
それほどに、面倒くさい

本当に面倒くさい

この学園の中で道を一回も間違えないで薔薇園に行けるのはきつと
アーサーだけだ

・・・俺も、時々間違える

今日は大丈夫だ、しっかりと覚えているから

「・・・、アーサー」

「あ？」

やはり居た

「やつと見つけた・・・」

「・・・え、シルヴィオ？」

目の前の生徒会長様は信じられないとも言つようにこちらを見て
くる

「探したぞ、アーサー」

「え、あ、悪い」

彼はしゃがんでいる体勢から身体を起こした

「えつと、今は、何時だ？」

「午後6時前だ」

「いつの間に、そんなに経ってたのかよ・・・」

どうやら彼は時間が経つ、という当たり前のことを忘れていたようだ

「・・・わ、悪いな、探させたりして」

「いや、それは構わない

・・・その薔薇、先日まではなかったよな」

「ああ、これか」

アーサーが目を戻した薔薇は、彼の瞳の色そっくりだった

そんな薔薇は見たことがない

「俺もなんなのかはわかんねえんだ

昨日まではこんななかったのにな」

昨日まで薔みすら見当たらなかったその場所に、咲いているその薔
薇は、

「・・・大丈夫なのか？」

「んー・・・、悪い気はしないし、特別害虫を引き寄せるわけでも
なさそうだし、・・・

まあ、大丈夫だろ」

「そうか」

アーサーが言うのなら、そうなんだろう

「どうする？まだここにいるか？」

「あー、お前はどうしたいんだ？」

「俺はどちらでもいい」

「そーゆー答えずるいな」

アーサーは考えるようにして薔薇を見つめた

「・・・じゃあ、もう少しだけ、ここにいてもいいか？」

「いいぞ」

「あ、お前携帯持つてるか？」

「ああ どうしたんだ？」

「いやさ、この薔薇撮っておこうかと思ってな」

「・・・そうか、それならお前に任せた」

「おう」

彼は写真を撮るのも上手い

どうやっているかはわからないが、普通ならあり得ない写真までも
撮ってのける

「じゃあ携帯借りるぜー」

どこか集中した雰囲気撮影に挑むアーサーが、ひどく綺麗に見える
たのはどうしてだろうか

「悪かったな待たせて 帰るか」
「そうだな」

辺りはもうすっかり暗く、風も冷たい
「さっさと帰らないとな・・・」

アーサーは自分の身体を暖めるように抱いた
「寒いのか？」

「は？いや別にそんな訳じゃねえよ！」

「寒いんだな」

「ちげえって！！」

なんでそんなに誤魔化すのか
素直になればいいのにな

まあ、ツンデレだから仕方ない

・・・ん？ツンデレなら本田とエリザベータから聞いたぞ

「ほら」

「って、わ」

俺の上着をアーサーに掛けると、体格差身長差共に大きい俺達だから、アーサーの頭から膝までの大きさだった

「暖かいだろ？」

「・・・まあ、そうだけだよ

寒くねえつつただろ」

顔を赤くして拗ねたように下を見るアーサーの鼻は少し赤い

「これは俺がしたいからしたんだ

お前は気にしなくていい」

「そう、か」

まだ少し不満げだがまあいいだろう

「帰るぞ、アーサー」

「わーってるよ」

手を差し出すと素直に俺の手を掴んだ
その手は本当に冷えきっていた

「お、まえ、冷たすぎないか？」

驚いて訊くと、アーサーも驚いたように口を開いた

「お、お前の手が熱すぎんだろ？」

お互いに相手の手の温度が信じられずにお互いに問う

「いや、お前の手が冷たいんだ」

「ちげえよ、お前が熱すぎんだ」

「だいたい、手袋くらいしておけ」

今日は寒くなるって朝話しただろ？」

「その寒い日に、何でお前の手はこんなに熱いんだよ」

荷物が置いてある生徒会室へと足を進めながら言い合っが、意味はない

勿論、手をつないだままだ

ちなみに俺達のことは学校公認だからなんの不都合もない

「つて、あ・・・」

アーサーがふと窓を見た

「どうした？」

「いや、な・・・」

「？」

同じように俺も窓を見る

「あ・・・」

空には満月

星がとても綺麗に見えた

「なんで、こんなに綺麗に・・・」

「・・・今日は不思議なことが起きるな」

「は？」

思わず声を出すと、アーサーはくすくす笑いながら言った

「朝学校に行く時、お前には言っていないが花が凍ったまま咲いているのが見えた

んでもって授業中は、先公の頭に何故か蝶がとまった この時期に蝶だぜ？」

あとは・・・そうだ、池の水が模様になったな

そして、あの薔薇にこの夜空だ」

アーサーの言葉を聞くと本当に不思議なことが起きたようだ

「今日は、何かの日だったか？」

「いやー・・・特に思いつくのがねえんだよな」

俯き考えるような仕草をするアーサーの瞳が静かに煌めいた

「・・・俺も、不思議なことならあるぞ」

「ん？なんだ？」

顔をあげるアーサーの髪や睫毛は月の光を反射して綺麗だ

瞳には星が映りこむ

少し冷えた風は彼が纏う空気を神秘的にさせていた

「いつもより、お前が綺麗に見える」

淡い色の唇が開いたと同時に、それに俺の唇を重ねた

とても、不思議なことですね

（でもそれは、なんの不思議でもなく、当たり前のことなのです）

（だって貴方は美しい）

□ 不思議、不思議、不思議？（神英）（後書き）

意味不明サーセンっした

次は、ヤンデレなシルヴィオを書きたいです

友達のご意見です

何故だし

I t k e p t w i s h i n g , a n d i t k e p t l o v i n g

マイラ独白

何であたしは国じゃないんだろう

国ならアーサーの哀しみを背負ってあげられた
同じ苦しさを味わえた

この世界のために貢献することだってできた
こんなにも苛々することだってきつとなかった

あたしは人間

だからこんなにも苦しい

弱いね

人間は弱い

この弱さが愛おしいと、彼は言った
本当に？

こんなに弱いあたしを貴方は愛してくれますか？

・・・いいえ、貴方のことを疑っているではありません
そう、不安なの

ただただ不安なの

せめて、男なら

こんなにも辛くはなかったと思う

女だからと危ない目に遭わないようにされてるのは気付いてた
彼はあたしの安全を優先してくれた

いいのに

あたしはどうなってもいいのに

貴方の為ならこの身体が減じるまで戦える
でもきつと貴方はそれを望まないよね

だからあたしは貴方の為に死ねない

それは許されない

貴方の傷をあたしが代わりに受けられたらどんなによかっただろうか
貴方を護りたい

貴方だけでも、護りたい

人をこんなにも護りたいと思ったのは初めてなんだ
この願いは叶わない？

ねえ、こんなにも苦しいのは初めてなんだ
どうしたらいい？

初めてなんだ、愛されたいと願ったのは
愛って何？

ただただ頭の中はそれでいっぱい
ぐるぐるぐるぐる回って目から溢れる

その度に貴方を驚かせてしまう

嗚呼、嫌だな

こんなにも醜い感情の為に貴方を驚かせたくない
どうして驚くの？ねえ、どうして？

このままあたしはここに居ていいのかな
そもそもあたしはこの世界の人間じゃない

今頃家族はどうしてるんだろう

あっちとこっちの時間の流れは一緒？

一緒だったなら、もう何十年も経ってるね

お願い、経たないで

こっちの何十年ものこの時間が、あっちでは0・1秒にも満たなかつたらしいのに

あたしの家族は、友達は、まだ生きてる？

証拠が欲しい

助けて

誰か助けて

疲れたの

この無力な自分に

結局は求めるだけの自分に

何も与えることが出来ないこの自分に
手を伸ばしても誰もいないこの寂しさ

彼はあたしよりもずっと辛かった筈なのに
なんであたしは彼が生まれた時から一緒にいることができなかった
んだろう

なんでこの世界に生まれることが出来なかったんだろう

表面上で嫌っていても、本当は皆大好きなんだ

それぞれに個性がある貴方達が大好きなんだ

話しかけてほしい

頭を撫でてほしい

抱きしめてほしい

抱く気持ちは求めるものばかり

いつそのこと貴方達を殺せば楽になりますか？

なるわけない

そんなことできるわけがない

その身体を血に染めるなんてこと、あたしは出来ない

この感情は貴方達は知らなくていい

人間は、弱くて醜い生き物なんです

でも、とても強くて美しいの

なんて矛盾だろう

あたしも、貴方達の気持ちが少しだけわかります

人は、愛おしい

あたしよりも弱くて、あたしよりも強い

彼らも護りたいと思った

この世界を護りたいと思った

自称英雄の彼は同じことを言っていた

あたしは、そんなに大層なものじゃなくていい

護れるだけの力が欲しい

それ以上はいらない

そうしてまたあたしは求める

この両手に収まらない命達が愛おしくて仕方ない
愛したい

でも愛つてなんだろう
嗚呼、目が回る
お願い
お願い
お願い
誰か、

愛してください

「愛してるよ」

目を開くと、彼が抱きしめていてくれた

I t k e p t w i s h i n g , a n d i t k e p t l o v i n g

マイラは情緒不安定になります

○ ねえ、私以外見ないでよ（神英）（前書き）

やっちまっ たぜシルヴィオヤンデレ化
むしろ私が病んだでしょう

。ねえ、私以外見ないでよ（神英）

一瞬、何が起きたかわからなかった

今日の俺の家はいつも通りの雨

外に出るのは面倒くさいから刺繍をしていた

だいたい3時間くらい経ったときだろうか

屋敷のベルが鳴った

玄関に行くとき傘をさしたシルヴィオがそこに立ってた

「よ、よう」

「悪いな、急に来て」

「気にすんなよ、入れ」

そう言って屋敷に入れて、しばらく二人でたわいもない会話をして
いた

・・・誰だったかは忘れたけど、確か連合の奴だったと思う

そいつの名前を言った途端、何かが割れる音がした

それまで机の上を見ていた目でその音のした方向を見ると、

シルヴィオの持っているカップが割れていた

高いものではなかったたのでよかったが、今までこいつが俺の家で物を壊したことなくなかった

「・・・シルヴィオ？」

「なあアーサー」

その声は今まで向けられたことのないような冷たさだった
怖い

初めて、こいつを怖いと思った

「お前と俺は、恋人だよな」

「・・・？ああ」

「なら、他の奴の話をする必要はないよな」

「・・・え？」

カップが割れたことによつてシルヴィオの手は傷付いていた
血は、でていないけど

「アーサー、お前はもう他人を見なくていい」

「は？」

「何も見なくていい

俺だけ見てれば、それで」

近付いてくる

思わず後ずさると、シルヴィオの眉間に少し皺が寄った

「・・・なんで逃げるんだ？」

「あ、ちが、」

「なあアーサー、俺が怖いのか？」

「・・・っ」

「・・・怖いか？」

こちらを見てくる目は冷たい

声も冷たい

おかしい

怖い

「・・・怖い・・・っ」

「っ！」

思わず言ってしまった言葉に、シルヴィオが目を見開いた

「っ、怖いか？俺が？なあ、どうしてだ？」

「ちがっ」

「怖いって、言つたよな？なんでだアーサー？怖いか？俺

それとも、他の奴が怖いのか？誰だ？」

「し、」

「早く言ってくれないか

そいつを殺してくるから」

「・・・・・・・・・・え」

「まさか、俺が怖いなんて言わないよな？

誰が怖いんだ？アーサー

お前を怖がらせる奴は殺してくる」

「っシルヴィオ！！」

何を、言っているんだろうか

先ほどとは変わり、笑顔だけれど、でも

駄目だ、身体が震える

震える指先を、握られた

「何をそんなに怖がっているんだ？」

「、やめっ」

「ああ、アーサー お前やつぱり俺が怖いのか」

こんなのシルヴィオじゃない

いや、確かにシルヴィオなんだ

だけど

「なんでそんなに俺を怖がるんだ

俺が嫌いになったのか？」

「違う！」

「じゃあ、怖がる必要はないよな

なあアーサー、いつまで震えているんだ」

指先から手首、手首から腕へと手を這わせ、最後には首の横に手を添えられる

「どうやったら震えるのをやめるんだ？

首を絞めればいいのか？」

「っ！？」

「それとも気絶させればいいか？」

イかせればいいのか？

縛ればいいのか？

殺せばいいのか？」

「つやめろ！！」

首に添えられる手を振り払う

思いのほか簡単に手が離れたけど、気にする暇もない

ここから、逃げないと

こちらを冷たく見てくるシルヴィオに背を向け、できる限り速く走った

「・・・逃げるのか、アーサー」

聞こえた声を気にする暇さえも、なかった

背中に、鈍い痛みが走った

「っ、がっ・・・！！！！！！」

よく、戦時中に受けたこの痛み

まだ武器なんて物は少ししかなかったあの幼い時に受けた、鈍痛

殴られた、衝撃

そのまま、床に倒れ込んだ

「駄目だろアーサー」

大人しくしてないと」

シルヴィオの手には、血が付いていた

ああ、俺の血か

「ほら、手当てするから大人しくしている」

横抱きにされ、運ばれた

運ばれたのは俺の部屋

「すごいな

少し殴っただけでこの出血量だ

普通なら痣でとどまる筈なんだが」

傷を指でなぞられ、鋭い痛みが走った

「痛っ・・・!!」

「そうか」

だが、そのまま指は傷を抉るようにして傷をなぞる

「やめ、シルヴィ、痛いっ」

「痛いか

アーサー、顔を見せてくれ」

言われた通りにシルヴィオの方を向くと、一層強く傷を抉られた

「ぐあっ・・・！！！！？」

「・・・いい顔だな」

シルヴィオは微笑むと傷から手を離れた

指先に付いた俺の血を舐めとるシルヴィオは、妖艶で

でも今の俺はそんなシルヴィオに恐怖しか感じなかった

「消毒するぞ」

いつの間に用意していたのかわからない消毒液を綿にしみ込ませ、

それをおれの傷に当ててくる

「~~~~っ!!」

「痛いかな？

我慢してろ」

こんな痛み、昔なら平気だった筈なのに

鈍ってしまった身体を恨む

消毒し終わったらしく、ガーゼを当てられ、テープでそれを留めら

れた

「終わったぞ」

もう一度シルヴィオの方を向くと、今度は首に噛み付かれた

「あつ・・・!？」

喰われるように吸われ、痛みから涙が流れた

吸って噛む、を繰り返され、多分そこは可哀想なくらい青く腫れる
んだろう

もしかしたら、血が出ているかもしれない

「・・・甘い」

首から顔を離れたシルヴィオの口には血が付いていた

血を、吸われた

「甘いな、お前の血」

「は・・・？」

「ほら、舐めてみる」

「ちょ、んん!!」

血の付いたままのその唇で口付けられる

口内にも血が残っていたらしく、思わず開けてしまった口にそれが
流される

血独特の鉄臭さと味に顔をしかめる

「んむ、う、・・・!？」

そして今度は、唇を噛まれた

今度は血が出るほど強くではないし、腫れるほど強くでもないけれど
そして唇が離される

「・・・アーサー・・・」

そのまま抱きしめられる

「お前は、俺だけ見ていればいい

俺以外、見なくていい

嫌いな奴がいたら言ってくれ、俺が殺してくる」
訳が分からずシルヴィオの顔を見た

するとシルヴィオは

「愛してる、アーサー!」

血の付いた唇をそのままに満面の笑顔で、俺に、そう言ってのけた

愛してる愛してる愛してる!!

(貴方も私を愛してるでしょ?)

(なら私以外見なくていいじゃない)

。ねえ、私以外見ないでよ（神英）（後書き）

ヤンデレ難しい

今日とうとう泣き出してしまいました

ブツツンしました

頭痛いです

どうでもいいか

新しい家族です！（前書き）

新たなオリキャラが登場します

詳しくは、オリキャラ紹介、を見てください
マイラとは双子設定になります

新しい家族です！

「アーサー、紹介したい人がいます」

「……ん？」

マイラが突然、そう言ってきた

いきなり言われ一瞬身構えたが、よく考えれば別におかしなことは言っていない

「……で、その紹介したい人ってのは？」

「……うん、あたしには双子がいます」

「そうなのか」

「で、その双子が今日、ここに来ました」

マイラが小声で何かを言うと、壁の陰からマイラに似ている男がでてきた

そのままマイラの左隣に並んで立つ

うん、そっくりだ

「名前は？」

「マイカです」

「敬語じゃなくていいって」

「……本当に、ですか？」

「ああ」

「じゃあ、遠慮なく」

性格もマイラと似てる

声もこころなしか似ている気がする

その、雰囲気や響きが

名前もそっくりだ

「えっと・・・、」

マイカが何か気まずそうにしている
そうか、ずっとマイカ見たままだった

「お前も、俺の名字使うよな？」

「あ」

「ここに住むだろ？」

「・・・え、いいの？」

本当にこの双子は根が似てる

面白くて笑いそうだ

「いいに決まってるんだろ やつと会えた双子だろ？マイラ」

「え、あ・・・その、」

急に話をまわされて戸惑っているマイラの顔が、赤くなってきた
なんだ？え、照れてるのか？

「ま、マイカ！アーサーにお礼！！」

「あ、そうだった ありがとなアーサー！！」

赤い顔でマイカにそう促し、マイカは言われた通りにする

「まあ、詳しいことは明日でいいだろ

部屋も明日用意するから、今日は二人で話してろよ」

「・・・え？」

「特にマイラなんか、甘えたいだろ？」

マイラの肩が跳ねた

マイカは少し笑っている

確かに本当に少し話しただけでこの成り行きは、予想外だろうな

「お前にとつては何十年ぶりくらいじゃないか？」

「・・・うん」

マイラが一瞬こちらを見る

泣きそうな笑顔だった

また顔を下に向け、マイカの手を掴んだ

「マイカ、こつち」

そう言うとマイカの手を引いて二階に上がった

暫くして扉の開閉の音が聞こえたから部屋に戻ったんだろう

「また、新しい家族が増えたな」

『そうね』

後ろを振り返ると、裾の辺りが淡い緑色で、上にいくにつれて白くなるドレスを着た女性が一人

「ああ、今度は弟だ」

『マイラは末っ子のままね』

くすくすと笑いそのストレートの金髪を揺らすのはラヤ

俺の家で最も長くいる、妖精

俺が生まれたときから傍にいてくれる大切な妖精の片割だ

見た目は人間とほとんど変わらない

雪色の瞳には睫毛の影がかかり楽しそうに細められる

『フェネルが後で煩いわよ あの子今留守にしてるわ』

「どつりで庭がいつもより静かな訳か」

ラヤと色違いの紫のドレス、金髪に紅い目をした彼女の姿が思い浮かぶ

きつと新しい家族が入ってきたことを知れば、盛大にいじけた後に、盛大に歓迎するのだろう

彼女は貴重な瞬間を見逃したくない性格なのだ

「まあ、大丈夫だろ」

今頃マイラ達は部屋で何をしているのだろうか
ソファに身体を沈めながら微笑んだ

「……あっちでは、全然時間は経ってないんだね？」

「そうだよ 一秒も経ってないって」

「……よかった……」

マイラとマイカは床に座り、身体を向き合っている

だがマイラは俯いているため、お互いの顔はあまり見えていない
「マイカ」

「うん」

「マイカ」

「マイラ」

「・・・っ」

マイラの顔は今や涙で濡れきっている

「ほら、マイラ」

マイカが笑顔で両手を広げた

「・・・」

「頑張ったな、マイラ」

「・・・今度からは、マイカも頑張るんだよ」

「アーサーがいるから大丈夫、だろ？」

「まあね」

マイラはマイカの胸元に抱きついた

「明日は、会議があるんだ」

「マジで？じゃあ俺、みんなに会えるな」

「紹介するね」

「ありがとな」

「みんな吃驚するね、多分」

「なんでだ？」

「あたし、双子がいるって話したことない」

「じゃあ吃驚するって」

マイラは鼻声で話し続ける

久々に感じた兄の体温が心地いい

「今までいろんなことがあった」

「どんな？」

「いろんな国に行って」

「うん」

「いろんな物食べて」

「うん」

「あと、いろんなことできるようになった」

「例えば？」

「魔法、剣術、武術、料理、掃除、喧嘩」

「・・・最後のは・・・」

「マイカも強いと思う」

「んじゃ、今度喧嘩してくるわ」

「相手がイギリス人だったら許さない」

「わかってるよ・・・」

さらにマイカを抱きしめるマイラの頭を、マイカが撫でた

「でも、お前全然成長してないんだな」

「成長止まってるから」

「俺の身長は追い越せず終いか？」

「・・・もう諦めたよ・・・」

暫くの沈黙の後、マイラが再び口を開く

「・・・なんか、ずるい」

「何が？」

「あたしだけが寂しがってる」

「理不尽!!」

マイカは少し考え込むと、笑いながら言った

「でも、俺は心配したぜ？」

「え」

「目の前で妹がいきなり消えちまうんだもん」

「あー・・・」

「だから、お兄ちゃんにも抱きしめさせなさい」

「うわっ」

腕の力を緩めていた隙につき、マイラをマイカが抱きしめる

その状況にマイラは酷く安心した

アーサーが抱きしめてくれた感覚と、似ている

「・・・ふはっ」

「へへっ」

「マイカ、ありがとう」

「こちらこそ」

「これから、頑張ろうね」

「そうだな」

「だってさ、」

マイラは濡れてる顔をそのままにマイカを見た

「あたし達、アーサーの家族なんだから」

その真つすぐな瞳に、マイカは笑みをこぼした

「わかってるよ」

マイラ、お前大人になつたな

その言葉にマイラは再び顔を赤くした

久しぶりマイブラザー!!

(生きていてくれて安心した)

(これからは)

新しい家族です！（後書き）

久々に文章書いたから酷いことになってる
いつも酷いけど

マイカ君、友達にやたらうけがよかったです
最近同士も増えてきてテンションあがって気持ち悪いです

聖夜前日（神英）（前書き）

イヴですね^^

モイモイが忙しくなる日です

聖夜前日（神英）

この日は大人になっても楽しみなものだ
飾り付けはだいたい3週間前にした

「ゲームでもする？」

そう言い出したのはマイラ

今、俺の家にはシルヴィオ、ギルベルト、ルートヴィッヒ、ピータ
ー、

後はマイラとマイカ、そして俺の7人がいる

「夜ご飯はもう食べちゃったし、このまま寝るのも味気ないしね」
マイラは周りを見渡し、何をやりたいかを無言で尋ねる

「ピー君は何でもいいのですよ！マイカは何かありますか？」

「俺？んー・・・面白いやつ」

「当たり前」

マイカの言葉に対しマイラは容赦なく言葉を入れる

「ゲーム・・・トランプは？」

「ババ抜きがいい」

マイラとマイカが結局決めた

「頑張れ」

「タヒぬ」

「イ？」

何でこんな会話ができるのかが不思議だ

何の話をしているかと言うと、誰がカードをシャッフルするか

マイカがマイラにやらせようとしたが、マイラがずっと苦手だと言
っている

「うあゝ・・・」

いやいやカードを手取るマイラ

「・・・まあ、できるんだけどね」

「じゃあ今までの溜はなんだよ!!」

こんな時につつこむのはいつもギルベルトの役目だ

「はい、わけました!」

マイラのやりきった顔が清々しい

俺の手元にジョーカーはない

・・・まあ、こういうのは得意なんだ
じっくりやらせてもらう

「ほれ、上がり」

アーサーが、一抜けしました

「・・・早っ!アーサー早っ!!」

「トランプは得意なんだよ」

騒ぐギルを適当にあしらう

可哀想に、手札が大変な数になってる

ギルはゲームでも不憫らしい

あ、間違えた普憫だ

「じゃああたしがマイカの取ればいいんだね」

「そーだな ほら」

差し出されたカードのなかで、比較的安全な気がするものを選ぶ
リをする

なんでつて?あたしがジョーカー持ってます

いやー、なんとなく持ってたかったんだー

それにほら、次ギルだし?

まわせるし?

苛めじゃないよ、愛故にだよ

「じゃーこれー」

んでもって取った後に一瞬表情をゆがめてみる
ギルがにやっとした

よし、ひっかかった！

「はいギル」

ギルに差し出すと、見事にジョーカーを取ってった
戦略大得意じゃなかったかお前
どうした元騎士団

「頑張つてー」

微笑みかけるあたしを恨めしそうな目で見てきた
仕方ないじゃん、ゲームだもん

「ピーター喉乾いてない？何かいる？」

「ピー君メロンソーダーが欲しいです！」

「はい」

アーサーに続いてあたし、ピーターの順で抜けて、見事に男だけつ
て感じになった

あえて言うならマイカは受け顔だけど
でもなんだかな

「（おおー）」

すげえ

シルヴィオ頭いい

そうそうそれ取って

「俺も上がりだ」

「マジかよ！」

ジョーカーはずっとギルが保持しているという

普憫乙w

おっと失礼

シルヴィオが抜けた後にルートが抜けた

「あとお前等だけだぜー」

言ってやるとマイカは楽しそうに笑って、ギルはひたすら焦ってる
まだジョーカー持ってるのかアイツ

「あ、アーサーあれ見て」
「？なんだ？」

マイラが窓を指差している
何かと思つて外を見ると

「……………え」

満天の星空だった

さつきまで、月も見えないほどに曇っていたのに

「やっぱ奇跡はあるよねー」

「……そうだな」

さて、今トランプに苦戦中の2人にココアでも作ってくるか

「ちつくしよー負けたぜー！！！」

ギルがジョーカーを舞い上げて叫んだ

「ギルこういうのは弱いねえ」

「言わないでやってくれマイラ」

「ルートに言われちゃ仕方ない」

すぐに言うのをやめるマイカは結構優しい

「ほら、ココア飲めよ」

「お、アーサー……D a n k e」

しょんぼりした顔でココアを受け取るギル

「でも結構時間潰せたねー」

マイラが時計を見ながら言う

ただいまの時間、午後8：50

「ほら、ピーター 早く寝ないとサンタさんプレゼントくれないよ
！」

「そうなんですか！ じゃあピー君さつさと寝ます！

マイラとマイカも一緒に寝てください！」

「いいよ」

「全然かまわねえよー」

年下の3人は二階へ上がっていった

「んじゃ、俺は自分の部屋に戻るぜー

日記とブログ書かねえとな」

「兄さん、まだ書いてるのか・・・」

二階へ上がっていくギルを見ると、一瞬こちらをルートが見る

そのあとすぐに気まずそうに撤退した

「お前の弟は気が利くな」

「そうだな」

二人でソファに座ってそつと口付けてみる

そんな一般世間のカップルがするようなことがなんとなく可笑しかった

「・・・こうしてお前と一緒にクリスマスイヴを過ごせるなんて、奇跡みたいだ」

シルヴィオの言葉に少し鼓動が速くなる

少し、恥ずかしいかもしれない

「・・・そうだな・・・」

顔を逸らすと、シルヴィオがクス、と笑う

「なあ、アーサー」

「なんだ・・・っ！」

振り向くとまた口付けられた

本当に、心臓に悪いからやめてほしい

「これからも、こうしていられるといいな」

「・・・そうだな」

同意をこめて、俺もキスを返した

Merry, merry, merry!!

(明日も楽しもう)

聖夜前日（神英）（後書き）

明日も頑張ります
年賀状、大変です

□ ただいま（神英）（前書き）

神英メインじゃない・・・だと

あ、他c p的な意味じゃないです

後、意味わかんないです

俺設定出しまくりなのは通常運転ですね

□ ただいま（神英）

「んー・・・どうしようか」

難しそうな顔で外を見ていた少女が誰かに問いかけた

その場にいるのは今発言した黒髪黒目の少女、

壁に寄りかかり少女と同じく外を見る金髪蒼目の青年、

銃を担ぎ短剣を腰に提げている金髪緑眼の背の低い青年、

その青年の隣にいる青年に似た容姿をした高価なワンピースを着た少女、

そして、

「俺は、お前等の意見を聞きたい」

唯一椅子に座り机に肘をつき手を頬に当てている金髪翠目の青年
幼い顔立ちだが、おそらくその場にいる中で一番年上だ

「あ、また」

外でけたたましい音がしたのを黒髪の少女がいち早く察知した

「我輩は、とにかくあちら側と合流すべきだと思う」

銃を担いだ青年が口を開く

「私も兄様に同意します」

その隣にいる少女は外に目を向けたまま無表情な声で同意した

「俺は別に何でもいいぞ 要するに目的はマイカ、シルヴィオ、ギルベルト達と合流することだろ？」

壁に寄りかかっている青年の声音は明るい

「だったらマイラが決めるべきだと思うんだぞ！」

そう、続ける

「うー・・・」

マイラと呼ばれたその少女は眉間の皺を一層深くする

「マイラ、どうしたい？」

椅子に座った青年の声にマイラが振り向く

「アーサー・・・、あたしが決めていいの？」

「ああ」

アーサーと呼ばれた青年は形のいい口の端を少し引き上げ、長い睫毛を伏せる

「お前が考えてることは、だいたいわかる

はつきり言つて、俺もそれが最善の策だと思っている」

「そつか……」

マイラは外をもう一度だけ見ると、近くに置いていた大剣を身体に垂直になるように腰に掛けた

「だったら、さっさと行こう」

「それでいい」

その部屋に居るもの全員が、武器を手にした

「ギルベルトー」

マイラによく似た少年が銀髪 of 青年へと言葉を投げる

「んだよ」

「アーサー達、来ると思うか？」

「当たり前だろ」

「だよな」

問いかけた意味があるのか、と言われれば、勿論ない

「来るまではあの中には入れないんだよな」

「んー…… 兄上、どうだったっけ」

「アーサーが居ないと無理だ」

「だってよ」

「自分で答えるよギルベルトー」

再びの問いかけを一番背の高い金銀どっち付かずの髪 of 青年へとギルベルトは流した

「魔法のことはちんぷんかんぷんだ」

ギルベルトは紅いその瞳を細めると、ケセセつと、独特の笑い方を言葉に添える

「ところでギルベルト、後ろに居るぞ」

「っはあ!？」

ギルベルトは持っていた剣を後ろへとまわし、一時的な盾を作る
その剣が音をたて、何かを弾く

「つと、マイカ! 気付いてんなら先に言えよ! 兄上も!」

「「気付いてると思って」」

しらつとした顔で答える二人は腹が立つほど清々しい

「もつと俺に優しくしても罰はあたらないと思うぜ」・・・」

「! 後ろだ馬鹿!!」

「!!!」

もう一度剣をかまえるがそれは盾にはならない

その剣はそのまま相手の喉を引き裂いた

『xxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxxx!!!!!!』

何か聞き取れない言葉を吐き女性の形をしたものが倒れた

「つと、危ねえなギル」

「後ろはちゃんと見ておけよ」

「二人共俺のこと子供扱いしすぎだぜ!？」

現在三人がいるのは魔物の巢食う洞窟のど真ん中である

「準備完了」

マイラが呟く

その言葉にアーサーは満足そうだ

「ツイラ、マイラはそれぞれバツシュとアルフレッドに背負っても
らえ」

「・・・はい？」

バツシュはすぐにツイラを背負ったが、マイラは不思議そうな顔を
した

「ここからあちらまでは遠い お前等は年齢的にも体力的にも急い
で行くにはきつい距離だ」

アルフレッドはマイラとアーサーを交互に見たあと、マイラを背負
った

「うおう!!?」

「掴まっててくれよマイラ!これでいいんだろアーサー?」

「ああ」

「・・・アルてめえ落としたらただじゃおかねえぞ」

「君小さいから平気だよ」

「黙れやメタボ」

「メタボはやめてくれよ!!」

「お前等実は仲良いよな」

「何処!?アーサー何処でそう思ったの!!?」

「出発」

アーサーは平然とマイラの言葉を無視し、一足先に駆け出した

「つと・・・俺達は少しでも道を作んなきゃな」

ギルベルトは襲いかかってくる魔物を埃を払うかの様にあしらう

「つていつても、この洞窟の外は大変なことになってたし、あいつら困ってんじゃないか?」

マイカは持っている長剣を棒のように回す

「あー、爆発凄かったなー」

「あれって結局ゴードウのせいだよな?あいつ最近荒っぽいんだろ?」

「前は大人しかったんだが・・・」

シルヴィオが言葉を続ける

「やはり、アーサーが王都に連れて行かれたのが悪かったか」

「ああ、ここ昔お前等の家近かったんだっけ」

「今はもうないけどな」

彼の髪がなびく度に、数匹の魔物が倒れている

「昔はここだつて魔物じゃなく精霊達の住処だった」

「じゃあなんでこうなつたんだ?」

ギルベルトが前を向いたまま聞き返す

「そもそもここにアーサーがいたからあんなに平和だったんだ」

「アーサーは精霊に好かれているし、魔物を払うだけの力もある」

「で、その力のせいで無理矢理王都の魔導騎士にされたってことか」
「マイカは面白くなさそうな顔で魔物共々壁にひびを入れた」

「そこで一際荒れたのがゴードウだ 大地の精霊の彼女は一番アーサーを気に入っていた」

「自分を守ってくれる大切な存在だもんない」

「紅い瞳をゴードウのいるであろう方向へとギルベルトは向けた」

「連れて行かれたのがよっぽどショックだったのだろう」

「ゴードウは俺のことを忘れてるみたいだ」

「っていうと？」

「アーサーを見れば戻る可能性がある」

「じゃあ、アーサーは来るか」

「もう向かってる筈だ アーサーもマイラも」

「マジかよ じゃあもつと道作つとかねえと」

「まあ、そうだな」

『何を作るの？』

その場に不釣り合いな可愛らしい少女の声が響いた

「さっきの爆発はゴードウのものだ」

「アーサーが口を開いた」

「ゴードウってなんだい？」

「話くらい聞いたことねえのかよ」

「背負われたままのマイラがアルフレッドの耳元で呟いた」

「HEROに余計な知識は無用なんだぞー！」

「余計でもなければ無用でもねえよ」

常識だ常識 大地の精霊のゴードウ！はいここテストに出まーす」

「テストするのかい！？」

「どうするアーサー？」

「帰ったらな」

「マイラもつと教えてくれよ！」

「えー」

マイラがちらりとアーサーを伺う

「・・・教えてやってくれ」

「アーサーが言うなら仕方ない」

頷いた後にマイラは少しずれた体をアルフレッドの肩を掴むことで持ち直した

「ツイラ、つらくはないか？」

「大丈夫ですわお兄様」

「そうか 降りたくなったら言うのだぞ」

「はい」

微笑むツイラをマイラはしばらく眺めていた

「ツイラ可愛いなー」

「マイラ早く教えてくれよ！」

「ちよつと黙ってなさい」

可愛い子優先のマイラにとってはアルフレッドくツイラとなっている

「ツイラーこれあげるよー」

「はい？」

「はい」

腰にかけている袋から何か瓶を取り出しそれをツイラに向かい投げる
投げる、とは言ってもバツシュもアルフレッドもかなりな速さで走っているため、

普通の速さで投げたものなど二人の速さには到底追いつくことができない

つまり、マイラも結構な速さでその物を投げたことになる

中身は無事らしい

「これは・・・？」

「熱冷ましだよー この日差しじやつらいでしょ？綺麗な肌焼けちやうよツイラ」

マイラ曰く、ツイラの肌は血の気があり白く、国宝級なのだそうだ
「それ飲んで体冷やしてね 対日焼けの効果もあるから」

「ありがとうございます」

につこりと微笑むツイラに、マイラも同じく笑みを返し、アルフレツドの頭をはたく

「いたっ」

「ゴードウについて説明する

もう一回なんて意見は認めないからね」

砂漠ではなくただただ険しい岩道を照りつける太陽を一瞬睨み、マイラは口を開いた

「さっきゴードウが大地の精霊つてのは言っただけね 覚えてる？」

「勿論さ！」

「大地の精霊の役目は知ってる？」

「まったくなんだぞ」

「まったく・・・それでもルークス学院出てんだからそんなくらい覚え
といてよ」

「授業でそんなのやってないんだぞ」

「やったわこのお馬鹿が」

バツシュがギロ、と睨みつける

「えー、大地の精霊って言うのは、いわばこの世界の大陸を構成し
てる精霊だね

精霊の中でも比較的位が高い 大地の精霊は何人かいるけど、ゴ
ードウはそのなかでも

かなり力の強い精霊だよ 赤銀色の髪は・・・あ、アーサーより
少し毛先が跳ねた感じがな

後ろ髪は腰まで伸ばしてるけど、だいたい二房くらいしか量がない
目は茶色くて、手は人の手に近いけど、人よりもでかいし色もだ
んだん黒くなってる

服は白いねー」

「なんだか不思議な色だね」

「見ると結構しつくりくる あとは、女性だよ」

「そうなのかい！？」

「男性でイメージしてなかった？それゴードウにばれたらすごい怒られるけど」

「ええっ、言わないでくれよ!？」

「考えとく」

眉を下げ口端を上げて歪めるマイラはなかなか意地の悪い表情だかお

「続けるよ」

太陽に照らされ続けた彼女もなかなかつらそうな様子だが、かまわないように話を続ける

「ゴードウはこの大陸一帯を縄張りにしてる 基本的に厳格で真面目 自分の元に人や精霊をおこうとはしない まあ、一匹狼ってやつだね」

「アーサーみたいにかい？」

「おろすぞデメエ」

マイラがアルフレッドの肩を掴んでいる自分の手に力を込める
みしみしと軋む肩は音だけでも痛そうだ

「ったく・・・ そんなゴードウが側に置いてたのが、アーサーとシルヴィオだよ」

あとは岩の精霊のオーファ オーファは茶髪にショートヘアで
金瞳のちっちゃい女の子

可愛い声してるよ 怒ると手が付けられなくなるけど」

「・・・アーサーとシルヴィオってそんなにすごいのかい？」

「わかるでしょ」

「まあ、ね」

二人がどれだけ人間離れしているかはアルフレッドは痛いほどわかっている

「・・・アーサーが15年前、王都に連れて行かれたのは知ってるよね」

「・・・勿論だよ」

「ゴードウはアーサーを気に入ってた

気に入ってやっと安心できた矢先に、それだ」

「・・・」

「それで、このありさまだよ

ここは昔綺麗な草原だった」

「！！」

慌てたように辺りを見渡すアルフレッド

周りには荒く削れた岩山しか見当たらない

「・・・最低だな、王都の連中は」

「そーだね でも、アーサーはこうして戻ってきた」

アーサーは真っ直ぐと爆発の起こった方向を見つめている

翠が愛おしそうに揺らいだ

「ゴードウがまだ暴れてるってことは、シルヴィオのことは認識で
きないか忘れてるか

でも多分、アーサーなら大丈夫だと思う」

「その確信はどこから？」

「だってアーサーだから」

いつの間にか彼女の腕は、アルフレッドの首に優しく回っていた

「・・・オーファ・・・」

『シルヴィオ久しぶり』

可愛らしい声で話す目の前の少女の出現を、シルヴィオは迎え入れた

「お前は俺のこと忘れてなかったんだな」

『うん・・・ゴードウも最初らへんは大丈夫だったんだけどね』

そう言ってからオーファはふと顔をあげた

『・・・シルヴィオの弟さんと・・・マイラの双子さん？』

「・・・俺等、初対面だよな？」

ギルベルトが申し訳なさそうに訪ねた

『うん』

「じゃあなんで知ってたんだ？」

『僕勘がいいの』

「僕？」

「僕っ子っていいと思う」

「マイカお前何言ってた」

親指を突き立てながら頷くマイカに対しギルベルトは紅で冷たく見たそれにしても、とオーファを見る

初対面と言っているが、何故か知っている気がした

初対面かどうか聞くことを戸惑ったのはそのせいだ

「アーサーが来る」

『・・・本当?』

「ああ」

真剣な眼差しで射抜かれても、オーファは動じない

『・・・ゴードウ、戻るかなあ』

「きつと」

『そうだといいなあ』

瞳の金を水で潤ませながら、ふや、と笑う少女の姿はひどく痛々しかった

「・・・もう少しだ スピードを上げよう」

凜とした声が岩道に響き渡った

「急いだ方がいいのかい?」

「ああ」

「・・・貴殿のことだ 何か考えがあるのだろうか?」

「まあ、そうだな」

マイラは何も言わない

ツイラはアーサーのしている方向を同じくしっかりと見つめる

見つめた、その時だった

「!お兄様、お下がりがくくださいまし!!」

ツイラの言葉にバツシュが一気に飛び退いた

「『満ちる咆哮、堕ちた羽、過ぎ去る骸

全ては汝を護るためにある

今、全てを解き放つ

スカイテール』!！」

ツィラが空に突き出した腕から黄金色の光が溢れ、壁を作った瞬間、壁に何かがぶつかりもの凄い轟音をたてる

「……!お前等、一度しか言わないからよく聞け」

緊張が混じるその声に、全員が振り向いた

「お前等は先に洞窟に行つてろ シルヴィオ達との合流を優先するんだ」

「アーサーはどうするんだい？」

「俺は残る」

覚悟のこもった瞳を見ては、誰も反対できなかった

「……アーサー、月は星々を守る為にいるって言ってたよね」

「？」

「あたしにとつて月のはアーサーだよ

星々はあたし達」

「…….…….」

「待つてるからね」

もの凄い音がした

マイラがアルフレッドの背中を叩く音だった

「いったあああああ!？」

「おら早く行けむしろ降ろせこの野郎」

「わかったわかった降ろすからリズムカルに叩くのやめてくれよ!」

バツと手を離すと同時に見事地面に着地すると、そのまま洞窟へ走り出した

「ちょ、速っ!マイラそんなに足速くなかったよね!?!？」

「人間、気合いがあれば、なんでもできる」

「そういうレベルで!？」

「お兄様、私達も」

「そつだな アーサー、ここは頼んだ」

「任せろ」

全員が去った後に、アーサーが正面に向き直った

「・・・ゴードウ・・・」

現れた彼女の目は、既にどこも見てはいなかった

『で、何を作るの?』

本来の問いかけを思い出したようで、少し明るい声色でオーファが訪ねた

「ああ、道だ」

『道?』

「少しでもアーサー達が通りやすいようにな」

『じゃ、僕も手伝うね』

オーファは言うか言わないかのタイミングで腕を突き出した

『僕の久しぶりのお友達、通してくれるよね?』

ぶん、とオーファが手を下から上へと振った

何かが響く音がして、その場があり得ない程に静かになる

「・・・いいのか?」

『いいよ 僕、今シルヴィオに会えただけで嬉しいから』

茶色の髪を花弁のようにふわりと舞わせ、子供の容姿にしては長い睫毛を目尻にのせ、笑った

岩の精霊とは思えない柔らかさに、地面が柔らかくなるような錯覚をギルベルトは起こした

「・・・あの、よ」

その中で一番年下のマイカが手を挙げた

「今、何したんだ?」

『・・・みんなが通るなら、邪魔者は消さなきゃね』

楽しそうに微笑む彼女に、先ほどの気持ちを訂正した

「・・・ゴードウ」

もう一度呼び直す、が、返事はない
聞こえていないようだ

風が吹き荒れ、ゴードウの咆哮と共に耳に刺さる
痛い

「見えないか・・・ゴードウ、ごめんな」

こうなってしまったのだって俺のせいだ
ひとりぼっちの寂しさはよく知ってる

「・・・ごめんな・・・」

向かってくるゴードウの腕に、身を任せた

鈍い衝撃が腹部を打つ

それをよけるなんてことは、できなかった

これはゴードウの怒りだ、憎しみだ、悲しみだ

ここまで感情を露にした彼女を否定できない

宙に浮く体を背中から叩き落とされる

不思議と痛みを感じなかった

ただ、苦しかった

「ゴードウ」

返事がないことが辛い

やっとここまで、そう

やっと15年前に戻ったんだ

15年前の、あの場所に

「聞こえなくてもいい

辛いのなら思い切り殴ってくれたっていい

だから」

この地を元に戻すから

昔のお前に戻すから

だから

「お前は、傷つくな」

風が、やんだ

『！』

シルヴィオ達が去った後に、風がやんで、誰か来た

『マイラ』

「！オーファ！」

すごい勢いで走ってくる

どうしよう、受け止められるかな

「久しぶりっ！！」

『おわ』

無理だった

「久しぶりオーファ！あたし戻ってきたよ」

『・・・うん』

「ね、また一緒に遊べるよ」

『うん』

「だからさ、あたしオーファの泣き顔じゃなくて笑い顔が見たいな」
泣きながらでもいいから、と促されて、できる限り笑ってみた

「うん、可愛い」

頭をなでられる感覚

昔は、僕がやってたのに

『・・・マイラ大きくなったなあ・・・』

「まだまだだよ」

マイラの後ろから足音が聞こえた

何かな、と思つて顔を右にずらすと、

『・・・えっと、マイラとシルヴィオとアーサーと血縁関係はない
よね』

お友達？それとも家族？』

「両方、かな」

一番背の高い彼がアルフレッド

二番目がバツシュ

最後の可愛い女の子がツイラ、と説明してくれた

『・・・アーサーは？』

「もうすぐ来るよ」

『・・・じゃあ、先に案内するから』

あの三人はもう先行ってるし

「マイカー」

「あ、マイラ」

洞窟の奥にあるでつかい塔は、ゴードウの力を封印したものだ
王都の奴らが封印しやがった

「アーサーは？」

「もうすぐ来る」

「んじゃ、待ってるか」

なんとなく久しぶりな気がした兄の隣に腰掛ける

『じゃ、僕戻ってるね』

「ん、わかったー」

マイラとマイカが似たような笑みで手を振って見送っているのを見ると、なんだか可笑しかった

「？シルヴィオなんで笑ってるの？」

「いや、お前等心行くまで双子だな」

「「まあね」」

「兄上！俺達も心行くまで兄弟か！？」

「さあな」

「なっ！！」

弟をからかうのが面白い

「・・・この塔の封印は・・・」

「アーサーしか解けそうにないな」

アルフレッドのつぶやきにバツシュが返した

ツィラは近くの岩に腰掛け、休んでいる

「ま、アーサーだから大丈夫だよ」

マイカの一言で全員の不安が和らいだ

「・・・？」

いきなりピタリ、と止まったゴードウをアーサーは見上げた

『ア．．．．．サ．．．．？』

「！」

ゆつくりと傷に触れてくる手は優しい

「ゴードウ」

『．．．アーサー．．．．．』

手を握り返すと、彼女の目に光が宿った

「俺だ、わかるか？ゴードウ

戻ってきたんだ」

『．．．．．』

静かに泣きはじめるゴードウの頬を撫でると、手を強く握り返された

『．．．よかった．．．』

「．．．」

15年間もこんな状態だった

辛いに決まってる

「．．．ゴードウ、行こう みんなが待ってる」

『．．．ああ』

あとは、彼女の力を戻す為に

『！！アーサー！ゴードウ！』

久しぶりに見る小さな体に、笑みがこぼれる

「久しぶり、だな」

『．．．会いたかった』

『．．．迷惑をかけたな、オーファ』

『！』

すっかり意思を取り戻した彼女にオーファが抱きつく

『迷惑じゃない』

『オーファ．．．』

『迷惑なわけない』

今まで守ってきてくれたんだ

だから、僕がゴードウを守った

『早く、塔に行こう』

「そうだな」

アーサーの声が響いた

「あ、来た」

マントが破れてるけど、あれ安物だし

「よかつた」 あ、ゴードウ あたしのこと覚えてる？」

『・・・マイラか？』

「せいかい」

『・・・シルヴィオもいるな』

「久しぶりだな」

思っていたよりも人間らしかったのだろう、アルフレッドが驚いている

アーサーは塔の目の前にたって、ドアノブを掴んだ

「っ！」

アーサーの手に瞬時的に力がこもり、ドアノブが壊される

このときに使う力は腕力ではなく魔力なので、常人ではこの封印は解除できない

それをアーサーは、やすやすと解除した訳だ

「・・・と、これで大丈夫だろ」

『すまないな』

「気にするな」

アーサーはシルヴィオに向き直った

「ま、よくやったな」

「お前こそ」

微笑み合う二人を見て、オーファが手招きをしてきた

「？何？」

『アーサーとシルヴィオ、とうとう？』

小さい声で聞かれた言葉に思わず吹き出す
と、マイカも入ってきた

「前は違かったのか」

『うん』

「ここ離れてから2年くらいかな？」

「そうなんか」

『へー・・・』

小さく固まって話す三人にギルベルトが怪訝そうな目を向けるが、三人は気にしない

「じゃ、戻るか

ゴードウ、明日、また来るから」

『わかった』

今度はここの復旧作業だ

『待ってるぞ』

彼女の笑顔が綺麗だと思った

□ ただいま（神英）（後書き）

最後等辺適当という（）

ごめんなさい

そういえば今日愛妻の日らしいです

きっとアーサーとシルヴィオが楽しみdごめんなさい石投げないで

甘いプレゼント（神英）（前書き）

間に合った・・・

風邪引きました

ちくしょう・・・

甘いプレゼント（神英）

「お前、甘いのが好きか？」

「え」

「・・・好きだぞ？」

何をいきなり、と思いつつも答えると、そうか・・・と言いながらアーサーが俯いた

今日は二月十三日

「どうかしたのか？」

「いや、気にしないでくれ」

そのままアーサーはキッチンに歩いて行った

・・・一体なんだったのか

「・・・マイカー今の聞いた？」

「バツチリ」

偶然廊下を通りかかっていたマイラとマイカは自分たちの部屋に入った

「アーサーチョコ作るのかな？」

「だろうね」

「あたし人にチョコ作ったことねーや」

「俺お前に貰ったことないな」

「あげる必要性なし」

バツサリとマイカの意見を斬ると、しばらく考え込む

「・・・あれ、欲しいの？」

「え、くれんの？」

いまいち会話がかみ合っていないようだが、そこは双子なのでよしとする

「欲しいんだったらあげるよ　アーサーと一緒に作ってくる」
「よっしゃ」

にこにこ顔でベッドの上に大の字になると、マイラが少し顔を顰める
「・・・それあたしのベッド」

「細かいこと気にすんなよ」

「皺ちゃんと直しといてね」

「了解」

部屋を出るマイラを見届けた後に思い出す

「・・・そういえば俺、あいつにチヨコ貰ったことないのに・・・」
ホワイトデーにお返ししてたっけ

「アーサー」

「ん、マイラ？」

チヨコを湯煎で溶かしているところにマイラがやってきた

溶かしているチヨコは匂いと色からしておそらくミルクチヨコだ

「あたしも一緒にチヨコ作っていい？」

「いいぞ　多めに溶かしてあるんだ」

理由など全く聞かずに笑顔で手招きするアーサー

いい奥さんが貴方は

「アーサーは何作るの？」

好奇心からの疑問を素直に口に出すと、手元から視線をそらして真っ直ぐにこちらを見てくる

目が驚く程に優しい

「生チヨコだな　あいつそういうの好きだし」

あいつ、という響きが本当に優しく、少し掠れた声で言うものだから困る

エロいですお兄様

無意識に惚気てるの気付いてる？気付いてないよねその顔じゃ

あーもう可愛いな

「・・・そういえば最初にバレンタインデーで恋人とか親しい人に

チョコあげるの考えたのってアーサーのとこだよな？」

「ん？・・・ああ、そうだな」

全国に広まった（特に日本の認識だが）この行為は、彼の所が考えたと知ったのはいつだったか

常識かもしれないが、そういう行事には疎いのだ

「お前は何作るんだ？」

アーサーが溶かしきったチョコが入ったボールを一旦湯煎から取り出しながら聞く

「どうしよっかなー・・・あたしも生チョコにするよ」

どうせ作るなら彼と同じものを作りたい

「そうか」

目を閉じ歯を見せて笑う彼はとても魅力的だと思う

チョコを作り始めて大分たつ

後はもう冷やして完成だ

「アーサーはど・・・！？」

目を疑った

確かに生チョコはできているようだ

とても綺麗に

でも生チョコとだけ答えたものだからそれだけなのかと思った

・・・でも違った

「え、ちょ、すごっ　薔薇！？それ薔薇！？」

「そうだぞ？」

「なんでそんな平然としてるの！？凄いことだよこれ！？」

チョコレートで薔薇を描いたわけではなく、並べて薔薇に見せたわけでもない

チョコレートで、立体の薔薇（生チョコと同じサイズ）を作った

「・・・すごー・・・」

「ありがとな」

はにかみながら薔薇を作っていく

最後の一つだったらしく、出来上がったものを皿に並べ、冷蔵庫に入れた

「ラッピングとかするの？」

「あー・・・」

少し気まずそうに目をそらす

「どうしたの？」

「・・・いや、なんか」

一段落ついた、ということで椅子に座った

アーサーの頬がほんのり赤く染まる

「・・・そこまでしたら、気合い入ってるみたいじゃないか・・・？」

「え」

「な、なんか、その、あれだ」

「・・・恥ずかしい？」

「・・・」

え、何この人可愛い

シルヴィオー、明日は貰ったチョコでチョコプレイできるね

あ、ちゃんと食べないとだけどね

じゃなくて

「大丈夫だよ」

「・・・レミアとシウにも言われた」

「でしょ？一緒にラッピングしょ」

「・・・うん」

はい、『うん』いただきましたあざーっす！

「マイカ、はいこれ」

「・・・！」

差し出されたそれは綺麗な薄い緑の包み紙に濃い緑のリボンが結ば

れていた

「・・・・・・・・」

「何か言いなよ」

「お兄ちゃんは泣きそうです」

「なんで!？」

心底驚いたらしい

「あ、いや、嬉し泣きの方だっ」

「ああ、なんだ」

でも泣かなくても・・・・なんてそんな眩きは知らない

「開けていい？」

「え、あ、ちよつと待って」

「何で？」

「恥ずかしいじゃん」

あたし庭行ってるからねーという一言を残して部屋を出た

「シルヴィオ」

「ん？」

「これ」

ずい、と音がしそうなくらいの勢いで小さな箱を差し出した

「・・・・なんだ？今日は何か記念日だったか？」

「バレンタインデーだ」

「何だそれは？」

「自分で調べろ」

渡された箱は包み紙が白く、それに青で薔薇が描かれている

きつと彼が包んだのだろう

皺一つなく、どこも曲がっていない

彼は案外几帳面だ

「・・・・渡しておいて調べろはないだろ」

箱を一旦机に置き、戻ろうとしていた彼の手を掴む

「っ、」

「アーサー」

腕を引つ張り体を引き寄せると、少し赤い彼の顔が目に入る
少し、意地悪したくなった

腕の中に彼を閉じ込めると、はっとした顔をする

「な、」

「アーサー、今日が何の日なのか教えてくれないか？」

「だ、からっ、自分で調べろって」

「今すぐ知りたい」

耳に息を吹き込むように話すと、アーサーの体が大げさに揺れた

「なあ、何の日なんだ？」

「・・・バレンタインデー・・・」

「内容は？」

「し、親しい人に贈り物をする日だ」

内容がそれだけにしてはこいつの態度が納得いかない

「・・・他には？」

「！！」

アーサーは嘘を吐くのは上手いが、俺に対しては下手だと思う

「なんだ？」

「・・・恋人にも、する」

結構勇気を振り絞ったのだろう

アーサーの手は震えていて、自分を庇うように体の前に当てられている

「お前、可愛いな」

「っはあ！？」

「ほら可愛い」

「可愛くねえよ！」

そうやって自棄になるところが可愛いんだ

「い、いいからさつき渡したやつ開ける！」

「わかったわかった」

逃げられないように気を付けながらリボンを解き包み紙をとる

ちなみにそれはとっておく

「・・・手作りか？」

「そうだよ・・・」

にしては綺麗過ぎではないだろうか

薔薇の形が素晴らしい

「・・・食べるのがもったいないな・・・」

「食えよ 腐る」

「身もふたもないことを」

薔薇を口を含むと、何をどうしたらこうなるのか、舌にのった途端にふわりと溶けた

持っているときはしっかりと形を保っていたが、何故こうなるのか文句なしに美味い

「美味い」

「そう、か・・・」

嬉しそうな顔を出すまいとしているが、バレバレだ
なんだこいつ可愛い

「ありがとう、アーサー」

耳元で同じように囁くと、バツとこちらをアーサーが振り向いた
綺麗に白い肌がうつすら赤く染まっていた

H a p p y V a l e n t i n e ' s D a y ! !

（・・・アーサー、チョコレートプレイは好きか？）

（は？お前何言って・・・、ちょ、ま、やめええっ、ん！）

甘いプレゼント（神英）（後書き）

この後アーサーとチョコはシルヴィオが美味しくいただきました
我が家のアーサーは基本料理上手です
にしてもこいつらラブラブである
一生やってるバカップル

猫（神英）（前書き）

こ
れ
は
ひ
ど
い
w

猫（神英）

朝起きて一番に思った事は、
何かおかしい、ということだった

違和感の原因を探る為に辺りを見渡す

これと言って気になるものはなかった

では、自分の身に何か起きているのだろうか

ならば鏡を見つけようと思い、ベッドをおりた
が、

「・・・なんじゃこりゃ・・・」

体を捻る際に見えたのは、己の地毛と同じ色をした尻尾

金銀を混ぜたようなその色合いはあまり見かける事がない

いそいで鏡のある方へと歩き、自分の体を見ると、

「・・・・・・嘘だろ」

本来あるべき場所にある耳と、もう一つ頭に耳が

触つてみると、柔らかく、温かい

というか生温い

生えてる

猫の耳が

こうなれば、この家に一番詳しい彼に聞くしかない

恥を忍んでも、だ

「・・・アーサー!!」

「似合ってるぞー」

きやらきやらと笑うアーサーが肩とともに揺らしているのは金の髪
と、

それから金毛の耳に、同色の尻尾

「・・・お前も、なのか」

「ああ、これな」

自分の耳を確かめるようにふにふにと触るアーサー
可愛いけど、今はそんな場合じゃない

「いつになつたらとれるんだ？」

「今日が終わつたら、だな」

「何か不自由は？」

「外には出れないな」

他にはねーよ、なんてそんなに気楽に笑わないでくれ
やめてくれ、胃が痛い

この胃痛は弟に受け継がれたらしい

よく会議中に腹を押さえている

「気楽に考えてみるよシルヴィー、俺達には今日出かける用事も、
誰かくる用事もない

まず他人には見られないから気にすんな」

「まあ、そうだな」

ところで

「これは、お前がやった事か？」

「ん？・・・ああ、これな」

やったのは俺じゃなくてピクシーだよ」

指を彼がふわりと動かせば、その指に小さな女性が座る

「で、ピクシー」

少し厳しい顔つきになるが、瞳は優しいままだ

「なんだ？これ」

もう慣れたらしく、尻尾を持ち上げ耳を指差す

『今日はね、猫の日なんですって！』

「・・・猫の日？」

『本田の家では、2月22日は猫の日だって言ってたわ』

「誰がだ？」

アーサーが何度目かの問いかけをすると、ピクシーがにっこり笑った

『えつとね、座敷童！』

「ああ！あいつか！」

俺にはよくわからないが、アーサーは知っているみたいだ

「なんで猫の日なのかは聞いたか？」

『222でニャンニャンニャンだからみたいよ』

「なる・・・ほど？」

納得しかけたようだが、やはり少々疑問に思っらしい

確かになんだか強引だ

「で、お前は俺等に魔法をかけたのか」

『だって面白そうだったんだもん』

似合ってるわよ、二人とも」

本当にそう思っているのかは知らないが、まあ大丈夫なのだろう

『じゃあ、私みんなと遊びにいつてくるわ！』

ついでにマイラとマイカにも魔法かけておいたからー』

さらっと少し不吉なような気がする言葉を終いに、パツとピクシーが消えた

「マイラとマイカにも、って言ってたな」

「そうだな」

そういえばドタドタと走り回る音が聞こえる

しかもだんだん近付いてくる

嫌な予感が、

「アーサーこゝって何それ可愛い！！うわシルヴィオにもあるちよつと二人とも並んで並んでシルヴィオなんでそんな微妙な顔してんのでもかっこいいから別にいいやアーサー可愛い！！何これ様になる猫の日万歳あたし今まで生きててよかったああああああ！！！」
早口で捲し立てどこからか取り出したカメラで撮影やら連写やらとにかく忙しく指を動かしている

そういう彼女の頭と腰辺りには黒い耳と尻尾がついていた

耳がぴよこぴよこと動き尻尾が元気に動き回っているところを見ると、大分興奮しているようだ

「・・・なんか、怖え」

「・・・そうだな・・・」

笑顔を通り越して真顔なのか怒っているのかわからない表情でひたすらに指を動かすのはどうだろうか

いくら相手が女性で、しかも幼いとはいえこれは怖いだろう

「じゃあシルヴィオアーサー押し倒しちゃっていいよ！撮るけど！
！」

「待て待て待てどういう話だ！？」

いや確かに後で美味しくいただくとしてじゃなくてだな何を言っているんだ

そんなに期待した瞳でこちらを見られては困るんだがしかも何か汗かいてないか？

全体的に爽やかだマイラ今のお前輝いてるぞ

「マイラ何言ってるんだ！？」

「ごめん半分冗談」

「もう半分は！？」

「本気だろ？」

ドアの開く音と同時に聞こえた声がマイラの興奮を少し下げた下げたのだが、一時だけだった

「うわマイカまでそれついてんのちょっと撮るよはい笑って！」

「ピース」

マイカは左手でピースすると笑顔をカメラに向ける

なんでそんなに平然としているのか、疑問だ

「あー、撮った撮った」

「お前朝からそんなに汗かいてどうすんだよ」

「いい汗かいたぜー」

マイカの言葉を華麗にスルーし額の汗を拭う

「あたし風呂入って来るねー」

「あ、じゃあ俺も」

「黙らっしゃい」

言葉では肯定していなくても普通にくつついているので問題はないのだろう

この二人はいつまでただの双子でいるのだろうか

「じゃー!」

二人して同じ動作で敬礼のような仕草をし部屋を出た

「・・・えーと、朝飯食うか?」

「・・・そうしてくれ」

アーサーの耳は少し垂れ下がっていた

M e o w m e o w m e o w !

(熱っ)

(猫舌、か・・・)

猫（神英）（後書き）

山落意味無でした激しくごめんなさい！
ちよっとトリプルアクセル土下座に挑んできます

□ いつか、青い鳥が飛ぶような（普英）（前書き）

どこかの不幸な世界

□ いつか、青い鳥が飛ぶような（普英）

「愛のない世界をなんとする？」

まるで意欲のない雫が問いかけた

果たして彼の声を雫と形容したのか

彼の翠から零れ落ちた雫のことなのか

よくわからない

「俺がその答えを出せると思ってるか？」

きつとこれが他の奴なら馬鹿にしてくるだろう

こんなこともわからないのか、って

だったら逆に問うが、なんでこんなことがわかるんだ？

昔そう聞き返したことがあったな

誰だったかなんて忘れた

俺にとっちゃどうでもいいんだ

「お前でも、わからないのか」

馬鹿にしたような響きはなく、そのまま彼は静かに泣いた

「アーサー、そんなに泣いたら目が見えなくなるぜ」

お前の涙は普通と違うんだからよ、と言葉を続けた

「そんなことはどうでもいいんだ」

涙をぼろぼろと流して泣く様がとても神聖に感じる

穢してはいけないような、そんな、

「質問を変える、愛とは何か」

これはまた難しい

「お前にも、わからないんだろ？」

もう一度質問を返してみると、翠が拗ねたように揺らぐ

それでも顔は凜としたままで、でもその目からは純度の高い涙が溢

れ出る

その液は最早涙とは呼べないのかもしれない

「ギルベルトは意地悪だ」

「悪い悪い」

謝るつもりは毛頭ないが、言葉だけでもこんな態度はさらに機嫌を悪くさせるだけだ
よく知ってる

「菊は愛を気持ちと言った、フランシスは甘美な特権と、アルフレッドは想う事と、

イヴァンは楔と、耀は束縛と、フェリシアーノは綺麗な心と、ルトヴィツヒは誰かだけに向ける感情と、

お前は、何だ？」

他の奴らは何を言ってるかを聞いたびに、吐き気がした
そんな、そんなに簡単な言葉で片付けちまうのか

「アーサー」

涙は止まらない

そんなんじや本当に失明しちまうぞ

「俺は、お前を穢したくないと思う

そんなくせして、お前を汚したいとも思った

お前を見るたびにこの想いが交差するんだ

あえていうなら泥川だ 淀みと清みが行き来して、いつか混じり合う

ぐっちゃぐちゃになってもまだ清さを保っているつもりでいる

混じり合ったはずなのに、透明なんだ

かと思えばやっぱりなんだか濁っている

最初は二つかと思っていたらいつの間にか一つになって、

何処か遠くに置いてあるみてえなんだ

お前はこれをなんと呼ぶ」

アーサーの質問に答えた事なんて俺は一度もない

俺が答えなくても、こいつは

「愛、だな」

「ほらな？」

いつだってこいつは、答えが出てるんだ

「じゃあ、次の質問だ、アーサー」

真っ直ぐと見つめてくる瞳から止めどなくあふれる涙
心なしか量は減った気がする

「お前にとって、そんな感情がないこの世界は、どうだ？」

涙を流しているのにその瞳は不敵で、暫くしてから口元は笑みの形
に変わった

「・・・つまらないな」

「だったらそれが答えなんじゃねえの？」

俺も同じように形だけの笑みを返す

こんな時に心からの笑みなんか見せたもんなら、俺はこいつに消さ
れちまう

「愛のない世界は、無意味だな」

結局こいつは俺に出した質問を自己解決した

昔から頭の回転が速くて、ボーとしているように見えて実は常人じ
や処理できない程の記憶や疑問を脳内だけで処理している

本人曰く、目が回り、気持ち悪く、吐き気も伴うものらしい

それでもやめない理由は、やめたらつまらないからだという

こいつはいつだって自分が進みたい道、楽しいものを求めて生きて
きた

「でもな、ギルベルト」

ふと話したアーサーの瞳は、既に水を零してはいない

「現状が、その世界だ」

本当に、前ぶれなく驚かされる

「世界中の生き物がともに笑い合えてるか？」

平和に暮らせているか？

生きる事に苦しんでいないか？

答えは、否、だ」

涙は、流れない

アーサーは悲しそうな顔をした

「この世界は今、無意味なんだ

「愛はどこに存在している？」

悲しそうに、悲しそうに、
でも涙は流れない

「・・・例えば、お前みたいに感じる人間がいるとすれば、」

いつも通りの質問返しにアーサーが指先を動かす

「その人間が持っている感情は、何だと思う？」

「・・・慈愛、だ」

声が震えていた

雫が振動によつて揺れたかのような、心細い

呼吸を上手く出来ていない、そんな声が

「だったら、お前がいる限りこの世界には愛があるぜ」

アーサーの頬を撫でる

涙のせいで冷えきっていた

「・・・慈愛と愛は、違う」

「違うようできて同じって言ったのはお前だぜ？」

強がりではない声の震えはおそらく感極まったということだろう
本当に泣くとき、こいつは涙を流さない

「笑い合えない世界なら、お前が理想郷を創ればいい」

先程まで薄暗かった部屋が急に明るくなる

部屋の中は優しい緑色だった

部屋主の気分で変わるつてのは、本当だったんだな

そつえば前来たときは普通の部屋だったな

「アーサー」

名前を呼んでみると部屋の色が揺らいだ

「何をすべきか、本当はお前全部昔からわかってたんじゃねえの？」
ぼとり、今度は一滴だけ

目から零れた雫を見送った後に、アーサーは口を開いた

「・・・手伝え、ギルベルト」

「了解」

美しい雫が波紋を作った

エデンのような楽園を

（けしてエデンのようにはならないとわかっていても）

（ならば俺等が創れる限りの楽園を）

（誰も苦しめない、理想郷を）

□ いつか、青い鳥が飛ぶような（普英）（後書き）

ある感情で涙を流すアーサーと、そんな彼に質問して安心させるギルベルト

精神的に弱いのはきっとアーサーだと思います

ギルベルトは手合わせでアーサーに勝ったことありません
涙に関してはスルーしていただけると嬉しいです

□ 不思議の国（神英）（前書き）

トランプにやられた・・・
今日は眉毛の日ですね！
アーサーおめでとう！

□ 不思議の国（神英）

この国に一番不思議な場所がある
そこは地図にはのっていない

この国はそれこそまともなものが少ししか存在していない世界で
それでもある測量士によってこの国のすべてがのっている『まとも
な』地図がいくつか存在する

数少ないうちの一つだ

測量士も、地図も

まあ、この国にも相当の住民や物が居たりあったりするので少しと
言っても目の当たりにすれば多いだろう

その少数のまともな分類される地図にすらのっていない、この国で
一番不思議な場所

不思議の国と一般的に称されるここで一番と言わしめるほど不思議
な場所

測量士も行ったことはあるのだが、いまいち場所が分からないのだ
そうだ

行き方はわかる者にはわかるが、時々行けなくなったりする

「アーサーさん」

「・・・菊、どうした？」

その場所の主とも言える帽子屋は、客人をもてなしていた

「この場所、どこにあるんですか？」

「企業秘密だな」

毎回聞いても答えが貰えないのはわかっているのだが、どうしても

気になるのだ

自分が測量、発見できなかったこの場所が

「お前も毎日飽きないな」

「気になるものですから」

ふふ、と笑い口元を服の袖で隠し微笑む彼を帽子屋も微笑み見返す彼の袖にはいつているのはハートのマークだ

「ハートのクイーンもわざわざご苦勞なこつた お前にも仕事はあるだろ」

「貴方もですよ、スペードのクイーンさん・・・騎士の女王ともあるう方が、城にはお住みにならないのですか」

「俺が生まれたのはこの場所だ 僧侶の女王殿、毎回同じことを言うな」

「それでも真面目に答えてくださいますよね」

「お前は友人だ」

「ありがとうございます」

旦那に嫉妬されそうですね、なんて呟いてくすぐすと笑う

帽子屋は少しばつの悪い顔をしたものの、何事もなかったかのように紅茶を啜った

「・・・名称とはいえ、男の俺等が女王と呼ばれるのもな・・・」

「ですが、もう慣れたのでは？」

「慣れたくないがな」

やれやれというように肩をすくめて笑う帽子屋

ぶかぶかのコートがわずかに揺れた

「アーサーさん、先程冗談のように流してしまいましたが、貴方こそお仕事の方は？」

「気にするな」

「き、気にしますよ！やっぱやってないんですか！？」

「あー・・・」

「・・・？」

スペードのクイーンの仕事は他のところとは比にならないくらいに

多い

キングとジャックが仕事や問題を増やしてくるからだ

「いや、やってるんだけどな、仕事してたらここで休んでろって」

「シルヴィオさんですか？」

「ああ」

彼が仕事をしていないということは、今キングとジャックはそれは忙しいはずだ

「アルフレッドさんと耀に最近会っていないのはそういうことだったんですね・・・」

「え、あいつらが仕事してんのか？」

「彼等がやってなかったら誰がやってると思ったんですか貴方」

「いや、溜まってんのかと」

「恐ろしいこと言わないでください・・・!」

彼の仕事が溜まればこの国の損害は大きい

それほどに重要な仕事なのだ

「マイラが現状報告しにきてくれるからな 気にしてなかった」

「ああ、チエシヤ猫さんですか」

そういえばチエシヤ猫のはずなのだが、時々王冠にドレスなのは何故だろうか

「あ、菊」

「はい？」

「避けた方がいいぞ」

「え」

言われたままに避けようとした、が

「アアアアアアアサアアアアアアアアアアアアア!!!!!」

まだ少年の面影が完全に抜けていない声が響き渡った
耳が痛い

「うるさいぞウサギ」

「ウザギじゃないよ!」

「白ウサギ、だろ？」

「そうだけど・・・！」

目の下に薄い隈を作り、髪も普段の艶を失っている

分け目から飛び出たアホ毛は垂れ下がっている

彼がこうならジャックはどうなっているのか

「君の仕事やつぱり多すぎるよごめんよもうこんなことしないからお願いだからもどつてきてくれよ！！」

「やだ 面倒くさい」

「俺等にはもうお手上げだよ！やっと全部片付けて外出許可も出たんだぞ！？」

「お前菊に謝った方がいいぞ」

「え」

白ウサギが振り返ると、腰に手を当て地面に座り込んでいる測量士が
「・・・こんのすつとこどつこい・・・」

「え、は、菊？何で・・・」

「なんでじゃありませんよ貴方同じスペードの中にも年寄りがいるでしょうが何故気配りというものが出来ないんですかいえその前にまず人様の家に行くときはそれがいかなる状況であり立場であるとはいえそれ相応の礼儀というものが必要ですここでは貴方はキングではありませんよ王じゃないんですよここはアーサーさんの家であつてあなたの家ではありませんねそうですねならば普通は手土産の一つや二つ要求したいものですがいえ今はそうではありませんここはアーサーさんの家ですいきなり彼の名前を叫び名乗りもせずには飛び込んできたあげく年寄りを突き飛ばすとは何事ですかおかしいですな私貴方に礼儀教えませんでしたっけいいですか年寄りにとって腰を痛めるというのは死活問題なんですよそれなのに貴方という人は配慮が足りませんねところで私腰痛めたんですがどうしてくれるんですかこの若造が」

「それくらいにしてやれ菊 腰痛は俺が治すから」

お前はおとなしく座つてろ、と白ウサギに言い、帽子屋が席を立つ
白ウサギは青ざめ涙目で座り、一言も話さない

「あー、こりやギツクリ逝ったな」

「漢字が不穩ですよ」

「でもこれなら簡単だな」

言うか否か帽子屋が測量士の背中に手を置くと、緑色の光が彼の手を包む

それからすぐに手を離すと、測量士が息を吐いた

「ありがとうございます、大分楽になりました」

「気にするな」

相変わらず白ウサギは椅子の上で震えているが、測量士の機嫌は直ったようだ

「アルフレッド、紅茶はいるか？」

「え、あ、うん」

「ミルクだよな 待ってろ」

突然の来客にも慌てることなく自分のペースで事を進める彼は昔からそうだった

「さて、先程は失礼いたしました、アルフレッドさん」

いつもの調子で穏やかに微笑む彼

「いや、俺の方こそ悪かったよ 確かに礼儀がなってなかった」

「親しき仲にも礼儀あり、と言いますからね これから気をつければいいですよ」

もう怒っていないようだ

「そういえば、お仕事お疲れ様でした」

「うん」

「貴方が素直にやるなんて珍しいですね」

「シルヴィオに真顔で言われた上にマイラとマイカが見張ってるんだよ？」

「やるしかありませんね」

想像してみればなかなか酷だ

どうりでジャックも逃げ出せないわけだろう

「もう、仕事増やさないと決めた・・・」

「懸命な判断ですね

甘えや我が儘は我が身を滅ぼしますよ」

「アーサーに謝ろうにもタイミングのがしちゃった……」

「あら、謝ろうとしてたんですか」

「なのに先に文句言っちゃった」

「大丈夫ですよ」

「怒ってるかな……」

頭に手を当てて頂垂れている白ウサギに、測量士は優しく微笑んだ

「怒ってませんよ とても楽しそうでした」

「……本当？」

「嘘について何になるというのです」

「……ありがとう」

後で謝るよ、と呟く白ウサギは実は中々にブラコンなのだ

彼の家系は全員そうなのだが

「……あ、マシューがない」

はた、と顔を上げ辺りを見回す白ウサギ

「何かおかしいと思ったんだぞ……」

「ヤマネさんですか？」

「眠りネズミだよ」

「どっちも一緒だ」

いきなり入ってきた帽子屋にそれぞれ肩を震わせる

「この年でこんなに吃驚するとは……」

「アーサー気配消さないでくれよ……」

「癖だ」

微笑みながら紅茶とお菓子を机の上に置く

「俺の仕事頑張ってくれたんだろ？今日は好きなだけ食べる」

「いいのかい!？」

「夜飯食ってくよな」

「食べるよ!！」

目を輝かせ紅茶を飲みお菓子を頬張る

たまにしか現れない白いウサギの耳が彼の頭から生えている
またそれがぴよこぴよこと動くものだから笑ってしまう

「耳出てるぞ、アル」

愛称で呼んだということは、ここではもう完全に家族というわけだ
「いいよ別に」

気にした様子もなくガツガツと音が出そうな勢いだ

「そついえば耀さんは？」

「耀は太極拳やってるよ」

「なんと」

仕事が終わった途端に太極拳とはどういうことだ

「体が鈍ったかららしいよ」

空になったかごを満足げに見下ろす白ウサギ

帽子屋が座っていたソファに足を運び彼の隣に座ると、寝転んだ

「甘えたい年頃ですか？」

「今日まで全然寝てなかったんだぞー・・・」

帽子屋の膝を枕代わりに彼の腰に抱き着く

「あー・・・」

「寝るか？」

「いや、まだ寝ないぞ」

癒しだーとかなんとか言って微笑む

帽子屋は白ウサギの頭を労るように撫でた

「旦那が見たら嫉妬しそうですね」

「彼は俺のお兄ちゃんだから大丈夫だよ　アーサー奪う気ないし」

「あいつ嫉妬したことないぞ」

白ウサギの口からお兄ちゃんと出たのも驚きだが、問題は帽子屋の
言葉だ

嫉妬したことがない？

自分のところにはよく相談に来るのだが

彼もブラコンのようだし、我慢しているのかもしれない
なかなか健気な人だ

「まあまあ、あまり年寄りを困らせないでください」

「？何かしたか？」

「あえて言うのならネタ提供をありがとうございます」

「？」

「菊・・・君ね・・・」

「なんですか年寄りの楽しみを奪わないでくださいよ」

二人の会話を聞きながら帽子屋は自分がかぶっていた帽子を手に取り
つた

そしてそのままシルクハットに手を突っ込む

引いた手が握っていたのは時計だ

「ほら、お前の時計だ」

「あ、ありがとうアーサー」

白ウサギが時計を手にとると、針が大分進んだ

「・・・こうやってみると凄い仕事した気分なんだぞ」

「狂ったみたいに戻ったな」

彼が手を離せば時計の時間は止まり、彼が時計に触れれば時計が現
在時刻まで針を進める

仕事を始める前に手を離したようだ

と、その時

「アーサーなんか珍しい葉草見つけちゃ何この状況アル動かない
でねそのままでいいからむしろ擦り寄っていいよ甘えちゃえよおや
菊もいるじゃないか久しぶりだねところでこの写真とかムービーい
るってかいるよねアル耳ピコピコしてるよその耳見るのすっごい久
しぶりなんだけどまさかこんな風にお目にかかるとはほらもつと引
っ付いて」

「マイラさん前もそんな登場の仕方じゃありませんでしたか？」

「いいメタ発言だね菊」

何やら不思議な形の物体を二人に向けた後満足したかのようにそれ
を仕舞った

どこにか、と聞かれれば答えられはしないだろう

「神出鬼没なんだぞマイラ・・・」

「チェシヤ猫だもん」

己の頭に生えている耳を弾いてみせる

「あ、仕事お疲れ様」

「うん・・・」

「そうそう、アーサーこの薬草何？」

「お、いいの見つけてきたな　6番の棚に入れといてくれ」

「りょうかーい」

臍が見える程の短く白いタンクトップと、茶色く太腿までの長さの
バルーンパンツが寒そうだ

サイハイソックスを履いているからそこまではないとは思っが

「そういえばそろそろシルヴィオ帰ってくるからねー」

「おや、旦那がですか」

「あと10秒くらい」

「菊、伏せろ」

「言われなくとも」

バツと菊が伏せたのと同時に、爆風が起こった

「おかえり」

「ただいま」

頭にかぶったシルクハットを手で押さえ、マントをなびかせるプラ
チナのような髪色をした青年が返事をした

彼も帽子屋だが、測量士は区別のため旦那と呼んでいる

「アルフレッドも来ていたのか」

「お邪魔してるんだぞー」

「仕事ご苦労だったな」

「んー」

本日何度目の『ご苦労』だろうか

「今日も問題はなかったぞ」

「またクローバーのキングが駄々こねてなかったか？」

「今日はクイーンもいた」

「そうか」

帽子屋が白ウサギの頭を軽くポン、と叩くと彼はおとなしく頭を退かした

「じゃ、俺夜飯の支度してくる」

片手をひらひらさせる彼の服装はいつの間にか黒いＴシャツにジーパンのエプロン姿だ

「・・・彼、本当不思議だよな」

「謎だらけですねえ・・・」

「菊には言われたくないと思うよ」

マイラもいつの間にかもどってきたようだ

「シルヴィオ座ってればー？」

「そうだな」

シルヴィオも椅子に腰掛ける

その場にいる全員が体を休めた

この国の珍しくまともな一日である

ワンダーランド

（帽子屋の家ってどこにあるの？）

（さあ、知らない）

□ 不思議の国（神英）（後書き）

帽子屋一番好きなんです

で、二人いてもいいじゃない！ってことでシルヴィオとアーサーが帽子屋になりました

このパロの設定は結構前から出来てましたが、きっかけは画集のトランプでした

・・・スピードのクイーンってアーサーお前・・・！

死の騎士で女王なんですな萌えます（）

不幸（神英）（前書き）

丸とか点とか改行とか全くなくあえて言うのなら？と「」だけある
ので読みにくいですがそれでもいいぜ！という方はどうぞ

不幸（神英）

愛してると聞かれれば家族として愛してるけどなんでそんなことを聞くのかはよくわかってやれるからそんな顔だとお前は不安で怖いし苦しいだろうがお前は自分だけが苦しいなんて思う程馬鹿じゃないし強い奴な訳でつまり頑張ろうとしてるんだろうがこれは「頑張らない方がいい」と俺は昔言われてだからお前も頑張ったりしないで一回いくとこまでいって後悔したらもどっててくれればいい

（不幸に勝った青年Aの話）

今君はつらいかもしれないけど君よりつらい人だってきつとこの世界に一人はいるんだろうから苦しむのを諦めて吹っ切れて生きていけばつらいことなんて気にならないけど絶対に忘れないからまた色々と思い詰めていくと結局またつらくなっていくけどだからってそれで苦しむのはやめて「一回いくとこまでいって後悔したらもどっててくれればいい」って言われたあたしみたいにまずは頑張ることを忘れてみようか

（不幸自慢は聞き飽きた少女Mの話）

私は今までいくつもの不幸に救われ苦しみに救われてきたので皆様の気持ちがよく理解できない反面あなた方の気持ちがよくわかるのですが人は皆それを信じてはくれずあなたがはじめてこの事実を信じてくださいますしてそれからあなたは心の支えになっていたのですが最近になってやっと不幸というものがよくわかりましてこんなものに救われていたのかと思うと吐き気がしてくるのでそれを忘れたくあなたのところに行けばもう一人少女が居ましたので彼女に相談してみたところ「頑張ることを忘れてみようか」と言われ初めてあなたに会った時を思い出しながら思わず今までの感情を全てどこかにぶちまけてしまったかのように頭がすっきりしているのです

（不幸に救われ続けた男性Kの話）

ある日友人の家に押し掛けにいったら少し面倒くさそうな顔をしたあとに扉の修理費を請求されたものの笑顔で家にあげてくれたから遠慮しないで入っていったら美徳がわかっていないなんて言われたけど俺元々国が違うから君の美徳なんてわかんないよって返したらいつもの彼と違うことに気付いてどうしたの？って聞いたなら「頭がすっきりしているのです」なんて清々しい笑顔で返されて思わずいかなんて呟いたら頭を撫でてくれて俺はまだまだ子供なのかなんて思ったらなんかどつかがチクツてしたから思わずそこを見てみても何にもなくて友人の方を見ると悩んでますねえなんてけらけらと笑われて思わず悩んでもいいだろって言っちゃってそしたら大いに結構なんてまた頭を撫でられた

（不幸に悩み続ける若い青年Aの話）

恋人の家に行く途中に恋人の元弟と会って用事を聞けば彼も同じ家に行くのだと言ったので一緒に行くことになったんだがよく考えれば彼とはあまり話をしたことがなくまず俺をどう思っているのかも知らなかったから聞いてみれば俺もよくわからないと返ってきたあとに酷く幸せ者だなんて言われて一瞬戸惑ったがなるほど彼と恋人になれたのは確かに酷く幸せ者と言われてもおかしくないしましてやそれを言っているのは彼の元弟なのだから余計に説得力があり思わず頷くと笑顔でこちらを見た後にふと下を俯いたからどうしたと聞くときちよつとねなんて言われては気になるのが普通だから悩んでいるのかと聞けば「悩んでもいいだろ」と言われその言葉をそうだなと肯定するとぼつとこちらを見てそれは同情かと聞かれ違うと返せばじゃあ何とまた難しい質問をされあえていうのなら懐かしさだと言つと懐かしいってと難しそうな顔で言われあなるほどこいつはやっぱりお前の弟だと思わされたのはきつとその表情がそっくりだったからでそういえば昔お前も悩んでいた時に同じことを聞いてき

たことを思い出しその時俺がなんて言っただと言えは頑張らない方がいいなんて無情なことを返したがその言葉に彼は何故か幸せそうに笑い確かその笑顔が本当の初恋だったことを覚えている

（不幸を亡くした青年Sの話）

不幸（神英）（後書き）

順番は上から

アーサー

マイラ

菊

アルフレッド

シルヴィオ

となっています

なんだかループしてる予感

分類に困ったのでとりあえず にしておきました・・・

シルヴィオはアーサーに会ってから不幸を殺すことにしたようです

何それ中二

甘いお返し（神英）（前書き）

ホワイトデー

甘いお返し（神英）

「シルヴィオー」

マイカが俺を呼んだ

手招きをしている

「なんだ？」

「シルヴィオ、アーサーにバレンタインチョコ貰ったよな」

「ああ」

「明日な、日本とか東アジアの一部ではホワイトデーって、バレンタインのお返しする日なんだよ」

「成る程 つまりお返ししろと」

「そんなとこ」

ニカツと笑った後に、また口を開く

「んで、俺もバレンタインチョコ貰ってんの、マイラに」

「よかったな」

「初めて貰ったぜー、じゃなくて だから一緒にお返し作ろうぜ」

「・・・作る？」

「うん」

作ると言っても、何を作るのだろうか

またチョコか？

「無難にクッキーとかどうよ？」

「クッキー・・・」

作ったことないな

「俺作り方知ってるし、ほら、キッチン行こうぜ」

手を引っ張られた

意外と簡単に生地を捏ねるところまできた

「・・・あ」

マイカがはっとしてこちらを見た

「アーサーの分、媚薬入れる？」

「何言ってるんだ！」

馬鹿かこいつは！

「え、入れないの？入れちゃえば？俺持ってるし」

「何でそんなもの持っているんだ未成年だろ！」

ニヤニヤと笑いながら見ないでほしい

ああ、顔が赤い

「見たいんじゃない？媚薬飲んだアーサーとかレアだと思っけど？」

勧めるな

「あ、使いたくなったら言ってな 持ってるから」

「捨てろ！」

「あ、シルヴィオ、もういいぜ」

なにをかと思っただかそう言えば生地を捏ねてる途中だ

手元を見ると生地が出来上がっている

律儀に混ぜてたのか、この手

「後は型とって焼いて、終わりだな

何か入れる？今のうちだけど」

「いや、いい」

「そ？じゃ、俺が入れるー」

そう言っただけでチョコチップを投入する

「はいもっかい混ぜてー」

「手順おかしくないか？」

「ん？こんなもんじゃね？」

美味しくできるからいいよ、なんて軽く言っただけで退ける

こいつ料理できたのか

今更ながら、意外だ

「型も普通に丸くていいよなー」

「ああ」

何の面白みもないクッキーが出来るらしい

まあ、いいか

アーサー相手に今更こつたものを渡すのも照れくさい
・・・ん？

「これ、アーサーとマイラにやるんだよな」

「そー」

「本人達に、俺等が」

「うん」

「・・・一対一で？」

「ja ワンツーマン」

「・・・Oh mein Gott・・・」

まずい、かなりまずい

バレンタインの時大分いじめてしまった

いや、性的な意味でなく

ま、性的な意味でもなんだが

いやそうではなく

チヨコを貰った時色々問いただした

今回彼も仕返ししてくるだろう

「・・・」

「シルヴィオ？」

顔をのぞかれ我にかえる

そうだ、今はとにかくクッキー作りに集中するべきだ

「すまない、気にしないでくれ」

「おー」

今は集中だ

「出来た！」

「出来たな」

なんとかできた

まあ、食べれるだろう

「シルヴィオ俺を信用しろよー」

食えるって 見かけだって普通だろ？」

確かに

「んじゃ、ラッピングしよーぜー」

「ラッピング・・・か・・・」

「あ、手伝うから」

「助かる」

「ほら」

渡されたのは青に白で羽が描かれている髪に、プラチナ色のリボン

「これでラッピングしろと」

「そ」

にこやかにピースしながら言われる

そうか、包めばいいのか

そして14日

「マイラ、マイラ」

「んー・・・」

呼べばベッドの中から片腕を上げ返事してくる

そのまま腕はだらりと下がる

仰向けの上半身がベッドからずる、と落ちた

怖っ

「マイラ、プレゼント」

「・・・んー・・・？」

髪が全部床に付いてる

瞼が持ち上げられた

黒と碧翠が見えた

「・・・あれ、朝？」

「朝」

「あー」

「腹出てるぞ」

マイラがベッドから這って出てきた

だから怖いって

「で、何？」

「はい」

「はい？」

箱を渡すと、頭に手を当て考え込む

「・・・あ！ホワイトデー！」

「せーかい お返しー」

「やったーマイカ大好きー」

「マジで？」

「大マジ」

にこやかにさつとラッピングを解きクッキーを頬張る

「うまー」

「シルヴィオと一緒に作った」

「それを先に言いなさい」

カメラを手に取ったマイラに手を引かれて部屋を出た

「アーサー」

「ん？」

本を読んでいたところに声をかける

嫌な顔もせずにこちらを向いてくれた

「プレゼントだ」

「え」

箱を渡すとしばらくこちらをじっと見る

「・・・？」

『アーサー、今日は東アジアだとホワイトデーって言うんですって
「は？」』

『バレンタインのお返しってことよ』

シルヴィオの顔をぱっと見ると、罰の悪そうな顔をしている

「・・・フェル、なんでばらすんだ・・・」

『いいじゃないの、じゃ、私遊んでるわね』

いきなり登場していきなり消えた

・・・えっと、つまり

「・・・シルヴィオ」

「！」

首を傾げ笑顔で呼んでみる

どーしたパーフェクトな笑顔だろ？

顔背けんなよ可愛いな

「作ってくれたのか？わざわざ、俺の為に、Right？」

「・・・そうだ」

「ほー」

あー駄目だ、顔が赤い

でも相手だつて赤いんだ

お互い様だろ

緩む口元を隠す気はない

「シルヴィオ」

「なん、・・・！」

頬に口付けると、シルヴィオの動きが止まった

こいつ本来ヘタレだからな

「Thanks、Thank、愛してる」

首に手を回して言うつ、真っ赤な耳が見えた

「・・・Dubist willkommen」

耳元囁く声が心地よかった

白い日

（おわあああ・・・！！ちよ、ま、あhふいうhんりzxh）

（マイカ落ち着いて・・・られるわけないよね！そうだよね！）

甘いお返し（神英）（後書き）

どうも、生きてます

こんな状況で不謹慎だとは思いますが、更新は今まで通りとさせていただきます

被災者のご冥福を心よりお祈りします

私達も頑張りますよう

では

冗談はほどほどに（前書き）

泳げない検証

ギャグ書けるようになりたいですね

冗談はほどほどに

「アーサーさんが、実は泳げないというお話を聞きました」

本日菊の家に集まったのはアルフレッド、イヴァン、耀何とも恐ろしい組み合わせのメンバーだ

「アーサー君、海賊やってたよね？」

「正式には少し違うけどね」

「泳げないのはおかしいと思うある」

「そこで、確かめましょう」

菊の発言にアルフレッドが目を見開く

「本当に泳げなかったらどうするんだい!？」

「死ぬ気で助けます」

「君もう年寄りだろ!!」

「爺だつてやればできるんです!!」

というわけで、やりましょう!

追いつめられたような顔でペンとメモ帳を持ち叫ぶ彼に誰も反論できなかった

「・・・で、どうするあるか？」

「アーサーさんが通りかかったらアルフレッドさんが突き飛ばせばいいと思います」

「俺がやるの!？」

「手加減してくださいよアーサーさんが怪我でもしたら大変ですから」

「本田君さつきから言ってること矛盾してるよー」

イヴァンも少し困ったような顔で笑っている

彼がつけているマフラーはアーサーとソフィア、ナターリヤが編んでくれたものだ

去年の誕生日に貰ったという

イヴァンはそのマフラーをごめんと言いながら撫でた

「噂をすればアーサーさん！さあ行け若造！！」

「っアーサーごめん！！」

「え」

いきなり飛び出してきたアルフレッドにも驚いて、彼が謝るのに更に驚いた

そして自分が川へ突き飛ばされたとわかり、一番驚いた

「つぶあっ！」

他の人が溺れるよりは落ち着いているがやっぱり溺れている

菊は彼を助ける為に飛び出そうとした、が

菊の目の前を黒が横切った

「っアーサー息止めて掴まって！！」

「っ！」

マイラがアーサーへ手を差し出したまま、川に飛び込んだ

それも凄い勢いで

軽くチーターを超したのではないだろうか

アーサーが彼女の手を掴んだと同時にもの凄い水飛沫

「・・・おお」

菊もあまりのスピードに驚くことしか出来ない

「っは！アーサー大丈夫！？」

マイラがアーサーを抱きかかえ岸に上がり、彼を寝転ばせる

「・・・はや・・・」

アルフレッドは彼女の必死さに驚いた

イヴァンはほつとしていて、耀は自分達の存在意義を見出す為に考え込んでいる

「大丈夫、だ」

「よかつ、よかつた・・・」

ふわりと彼が微笑みそれに笑みを返したかと思うと、鬼の形相でこちらを振り返った

「っアルフレッド！菊！気をつけ！！！」

「「はいっ！」」

あまりの勢いに二人が同時に背筋を伸ばした

「理由は!？」

「あ、アーサーさんが本当に泳げるか確かめようと・・・」

「泳げるかどうか確認がない人を川に突き落とさない!! 確認するから本人に聞く!!」

もしも本当に呼吸停止したらどうするつもりだったの!?! 救出ネタは美味しいけど現実とは別なんだよ!?!」

「す、すみませ・・・」

「アルフレッドも!」

「ご、ごめ・・・」

「あたしにじゃないでしょアーサーにでしょほら今すぐ謝れせーのっ!!!」

「「すみませんでしたああああああああ!!!!!!」」

呆然とするアーサー、イヴァン、耀

土下座する菊、アルフレッド

仁王立ちのマイラ

こんな状況誰が見てもおかしい

ましてやマイラはその場で一番幼いし、叱られている二人はマイラよりずっと年上なのだ

これは、何とも言えないだろう

その場にいる一同は皆、こう思った

巫山戯るの、やめよう

(・・・という夢を見たんです)

（凄い菊、なんでわかったの？）

（・・・え？）

（菊がフランスで、ペンとメモ帳持ってなかったら完璧だよ）

（フランスさんんんんん！？）

冗談はほどほどに（後書き）

ちなみにこれ執筆中のタイトル『ドウルアッ』でした
何それ

嘘付き！（神英）（前書き）

本家にやられた・・・
ナース服ってお前・・・

嘘付き！（神英）

「好きだよ」

アーサーが無表情でそう告げた

「好きだよ、誰よりも」

飽くまで無表情で淡々と話すものだから、少し体が強張った
俺が手招きすれば、素直に歩み寄ってくる

「・・・俺のことが好きって言ったな」

「そうだな」

「俺は嫌いなんだが」

「そうか」

ちらりとカレンダーを見た

四月一日、エイプリルフルだ

彼が言ってるのは嘘なのか、本当なのか

俺は勿論嘘だが

ただいまの時刻は午後11:51

もう寝てもいい時間だが、気になった本があったから起きてた

アーサーもそれに付き合ってくれていたところだ

本を読み終わってすぐに言われたのが、その一言

アーサーは続けた

「世界一好きだ」

「俺は世界一嫌いだ」

「すっごい好き、大好き」

「大嫌いだ」

アーサーの口元がぴくりと動いた気がした

アーサーが俺の膝にまたがってきた

そして俺の首に腕をまわす

薔薇やら紅茶やら、あとは森の匂いが香る

この匂いも大好きだ

「俺は、お前の匂い嫌いだ」

そう言っでやるとアーサーは甘えたように鼻に鼻をくっつけてくる
「そうか、俺はお前の匂い大好きだぜ？いい匂い　好き、だぁーい好き」

なんというかこれはアーサーなのだろうか

こいつは演技がうまい奴だ

さて、どこまでが本気か

でもなんかエイプリルフルに好きって言われると傷付くな・・・

「紅茶は？」

「好き」

「妖精は？」

「好き」

「家族は？」

「好き」

今なら何言っでも好きしか返ってこない気がする

「好きだぜー、シルヴィ」

「そうか、大嫌いだ」

「大好き」

アーサーは無表情を向けてきた

額にキスされる

「ところでな、シルヴィオ」

ただ今年後11:59

「今言っただこと、ぜーんぶ、嘘だ」

意地の悪い笑顔がそう告げた

・・・今は、四月二日の0:00

「シルヴィオ？」

「成る程な・・・、でもちよつと傷付いたぞ」

「わりいわりい」

「思っでないだろ」

「さあな」

膝の上から降りる

「嘘をつくなら、一工夫も二工夫もしねえとな　つまんねえぜ？」

「そういえば今日お前家ずっと出てたな」

「世界を騙しに」

にこにことした笑顔がまぶしい

「・・・まあ、いろんな意味でさっき言ったの嘘だけだな」

「え？」

アーサーがそっぽを向く

「・・・どちらかというと、愛してる」

「お前、」

「寝る」

そういつてさつさと歩いていく

「・・・耳、赤いぞー」

「っ、うるせえ馬っ鹿!!」

涙目で怒鳴られてもな

「ってことがあったから誰か今すぐジェバンニしてくれないかな、
と思って」

『任せてください、マイラさん』

『私もやるわ、楽しみにしててね!』

「二人ともマジ愛してる!」

『『ネタ提供ありがとうございます!』』

「こちらこそ!」

「（マイラ・・・お兄ちゃんは複雑です・・・）」

エイプリル！

（今日、・・・じゃない、昨日は酒飲まなかったのか）

（お前に嘘付くのが楽しみすぎた）

（ほう・・・）

嘘付き！（神英）（後書き）

アーサーが本家で女装しましたよ皆さん！

もちりすがテイベアに甘えましたよ！

パラダイスだね！楽園だね！

本気で液晶に頭打ち付けたのは内緒です

とりあえずひまさんとリクエストしてくださった方には

全身全霊尽くして御礼させて頂きたい

ハッピーエイプリルフル！

学ヘタは余裕で英ヒロインパートクリアです

あれは全クリが楽しくなるゲームww

では素敵なエイプリルフルを！

兄が居ない日の過ごし方（前書き）

アーサーはおるかへタキャラすら出てきません
名前だけなら出てきます

一応、神英前提の双子話です
よろしければどうぞ

兄が居ない日の過ごし方

笑顔で手を振られたから、同じく振り返してみた
遊んでいた少女は満足したように返っていった

今、俺は公園のベンチに座ってる

パンを買いに行った片割れを待つところだった

アーサー好みのパンを見つけた！と嬉しそうに俺の部屋に入りこんで来たのが一時間前

空腹にパンの匂いで当てられるのは嫌だからとベンチに座る俺を妹は苦笑いして見てた

今日はいつもより遅く起きたから、朝飯がまだだった

そろそろ食べようかと思っていた時に妹の乱入だったから、鳴りそうな腹を押さえてここまで来た

妹も俺も朝飯を抜くのは得意じゃない

ちゃんと俺の朝飯も買って来てくれるって約束したからちゃんと買ってきてくれるんだろう

でもなかなか出てこなくて、少し心配になってきた

妹は中々に短気だから、時々そこの不良と喧嘩をしってくる

たまに二人で不良相手、ということもあったりするけど、本当に、たまたまだ、いろんな偶然が重なった時だけだ

また何か厄介なやつを相手にしてるかもしれない、と思ってベンチを立とうとした瞬間、

「デメエら今度何かやらかしたらただじゃおかねえぞー！」

最近は何くことのない妹の怒声に、目眩がした
やっぱり“一悶着”あったようだ

妹が背に庇っているのは、だいたい20代後半の女性
腹部が少し膨れていた

妊婦だ

エプロンをかけているところを見ると、パン屋の婦人らしい

妹の腕が勢いよく何かを放り投げた

ぶん投げた、という表現の方が正しい気がする

ゴツツ、と鈍い音を立てたそれを見ると大きな男が三人程
妹が動かしたのは片腕だった気がする

もう片腕には袋を抱えてる

パンは買い終わっていたようだ

彼女の足が重ねられた男達の背中を踏む

跡が付くぐらいに、これでもか、という程に

彼女はもう男達の方を向いておらず、婦人の方を見ていた

「また何かあったら言ってくださいね、身重に無理は禁物ですよ」
笑顔で紙切れを差し出した

多分彼女の携帯の番号でも書いてあるんだろう

「あ、ありがとう、ありがとう」

少し泣きそうな顔で妹に礼を告げる婦人

婦人の背中を宥めるように撫でる妹の足は相変わらず男を踏みつけていた

「大丈夫ですよ、美味しいパンの御礼ですから」

アーサーの家に住んでから、俺達は彼と同じ言い回しが癖になってきた

この台詞もどこかで聞いたことがある

きつと気付いてないんだろう、と思いながら妹の元へ歩を進めた

「おーい、マイラ」

「あ、マイカ」

はつとように振り向かれた

俺のこと忘れてたのかもしれない

「ごめん、えつとね・・・」

「あ、いいよ 見てたし」

「そうなの？」

驚いたように訪ねられて、笑顔で頷く

「ところでマイラ、ちょっとごめんね、足どけて」

「あ、うん」

足を元の位置に戻したのを確認して、一番上の男の胸ぐらを掴んだ
「テメエ御婦人になにしゃがった」

なんとなく腹が立ったのは、きつと空腹だからだ

「べ、別に何も・・・っ！」

「そいつら御婦人に手え出そうとしゃがった」

冷たい目で男共を見下ろしながらマイラが答えた

同じ女性として、マイラは義務的に御婦人を助けたのだろう

店の前になんだなんだと集まって来た野次馬を不機嫌そうに追い返しているのも、やはり御婦人を守る為の行動だ

淑女ではなく、紳士に育ってしまった妹に苦笑を漏らす

それでも腹が立ったから、男共をそれぞれ五発殴っておいた

一つ目は俺の八つ当たりの分、二つ目は心を傷付けられた御婦人の分、三つ目は怒り心頭のマイラの分、

四つ目は奥さんに手を出されそうになった見知らぬ旦那さんの分、五つ目は買い物で心を不快にした客達の分

誰も警察には通報してないみたいだ、パトカーの音は聞こえない

男共をどこか適当に路地裏に放り込んでくると、店の前にはマイラただ一人が立っていた

御婦人は店に戻ったらしい

「はい」

マイラが袋から取り出したのはクロワッサン

それを受け取り、口に含んだ

「あ、美味い」

「あの御婦人のお手製だつてさ」

「マイラも見習えよー」

「あたしの料理は美味くないってか」

少し眉を顰めて先にマイラが歩を進めた

まあ、すぐに追いつくんだけど

「結構長居しちゃったな」

「あーあ、こんなつもりなかったんだけどなあ」

あいつ等のせいだ

とつくに成敗した奴等に嫌悪の表情で齒軋りをしながら呟いた
我が妹ながら恐ろしい

もうとつくに昼時は過ぎていた

アーサーは今ルートヴィッヒ達の家にいる

つまりシルヴィオとお泊まりだ、リア充め

未永く爆発しててください

マイラも袋からパンを一つ取り出すと口に含んだ

カレーパンだった

辛い物が得意じゃないマイラにしては珍しい

「それ辛くないの？」

「うん、甘口も甘口だからね」

美味しーと言いながらカレーパンを頬張っている

俺もクロワッサンを再び口に含んだ

「あの御婦人の子供、幸せだね」

マイラが唐突に言った

「なんでそう思ったの？」

「御婦人優しくて綺麗だし、パンも美味しい」

カレーパンをさっさと食べてしまったマイラは、今日何する？なんて

聞いてきた

「んー、小物でも作る？」

「あ、じゃあちよつと雑貨屋に寄ろうか」

「何か足りないのあるの？」

「うん、カラーブレスレット作りたいんだけど、紫と白と・・・あ、

あと茶色と黄色の紐

あとは・・・好みのマンテル金具がなくてだな・・・」

「あ、何作ろうととしてるかわかった」

「まじで」

カラーがどう考えたってあの人達だ

「そういえばそんな動画あったな・・・」

「作り方は完璧に覚えた（キリッ）」

「そんなに見たの!？」

いや、結構簡単だったけど

「できたら一緒に使おうよ」

「あ、いいねそれ」

妹の提案に少しわくわくした

「アーサーにも見せようぜ」

「そうだねー」

あと半日、今日はなかなか有意義に使えそうだ

兄が居ない日の過ごし方（後書き）

パンが、食べたかったので・・・！

マイラは短気です

面倒くさがりの短気です

マイカは気長そうに見えるし悠長に構えてるけどやっぱり短気です
そんなところ似なくても・・・！

ちなみに話の途中に出てきた動画は存在します
見たことある人、居るんじゃないでしょうか？

一つだけ言っておくとしたら、アーサーも紫狼もみんなの嫁です
可愛いよ

いつものこと、いつものこと（神英）（前書き）

ほのぼの・・・じゃないですごめんなさい

アーサーに誰かをフルボッコしてほしかったので・・・

あれ最近こんなばっか・・・

いつものこと、いつものこと（神英）

とても不幸だ、それだけを感じた

周りの人間共は愚かにも俺のことを知らない

それが当たり前と言えは当たり前なのだが

でも雰囲気で国とわかってしまう奴だってこの世界の半分を占めて
るんだからわかったっていいと思う

結局何が言いたいのかという、俺に楯突いた一般人の不良風情が
とても不幸ということだ

別に国と人を差別しているんじゃない、つまり格の差を感じ取れ
ない馬鹿だと言いたい

廃墟に連れ込まれてから一言も、一瞬さえも声を発してない俺を見
て連中はにやついてる

多分怯んで怖くて何も言えないとこのボンボン、とか勘違いし
てるんだろう

一応童顔は自負してる

そのせいでこうやって絡まれることだってよくある

今日もまたその類いだ

今の俺はそれは呆れた顔をしてるんだが、やっぱり気付いてない

お前等もう不良やめてしまえ

だからといっていちいち口を開くのも面倒だ

と、恐らくはリーダー格の奴がにやけ面のまま話しかけてきた

汚らわしい

「結構大人しいんだなあ？まあ、見たところ坊ちゃんだし仕方ねえよ
なあ」

周りの奴らは顔を見合わせてくすくすと笑う

おいおいお前等本当に馬鹿なんじゃないのか

「頭は良さそうだからわかると思うが、金か体、どっちか差し出せ
おっと、両方でもいいぜ？」

これは、少し新しい

そういえば今までの奴らには体差し出せとは言われなかったな
「おい、なんとか言ったらどうだ？怖いのか？」

俺の右隣に居た奴が肩を掴んできた、キモい

少し体を揺らして相手の手から遠ざける

どうやら、癩にさわったらしい

「っち、これだから坊ちゃんはよお・・・」

さて、どうしようか

今すぐ殴るか、話し合いか

相手の行動次第と言ったところか

「坊ちゃんよ、言いたいことははっきり言わねえと社会人になれねえぜ？」

・・・ちよつと待て

そうか、こいつらは俺を“未成年”と勘違いしてる

そうとなれば遠慮はいらねえ

俺の心にちよつとした埃をつけやがった

それだけで理由は十分、肅正してやる

「おい、餓鬼」

「っは？」

いきなり話した俺の声が思ったよりもしつかりしていたのか

少し怯んだようだ

「が、ガキはダメエだろうが！！」

「いいや、お前等のが俺よりずっと年下だ」

「ど、童顔ってことか？」

真後ろの奴が少しからかいを含んだ声で発言した

汚い声だな

「そうだ、童顔ってことじゃねえか！かわいそうだなあ？」

「若く見えていいだろ？」

少し顔を傾げて言ってやれば、一本とった、なんて顔はなくなる
俺に勝とうなんざ千年はやい

「で、体？金？だっけ？お前等本当馬鹿だな」

「！？」

「お前等なんかにやるものなんか一つもねえよ」

殺られる前に殺れ、これ常識

相手が動く前にとりあえず前に立ってた三人の鳩尾に拳を叩き込む

一瞬で気絶した

後ろから動く気配がした

足を勢いよく伸ばせばいいところに入ったのか倒れる音が聞こえる

後残るは5人

真横に居た奴らはそれぞれ肩をつかんで頭をぶつけさせる

ああ、気持ち悪い

血が付いちまった

後3人

足払いすれば簡単に1人が転けた

腹の上に踵落としを食らわせれば、動きはしない

返事がない

ただの屍のようだ

残った2人

そいつ等は少し本格的にアッパーを入れる

これで堕ちた

死屍累々、まさにそんな状態

散歩に出かけたつきり帰って来ないアーサーを探しに家を出た

そしたら町中に居た妖精達がアーサーが連れて行かれた、なんて言

うから急いで指定された場所に行ったんだ

アーサーだから大丈夫だろうが、もしもがあつた

そして廃墟に着いてみれば、倒れている不良

アーサーは不良達の財布から金を取り出していた

「あ、シルヴィオ」

気付いたように顔を上げる

自分のやっていることには非を感じていないようだ

まあ言ったところで「自己防衛のついで」だなんて言うのだろう
それにアーサーに対して無礼を働いたんだから、俺としては当然な
気もするが

「遅かったからな 絡まれたか」

「ああ 早く風呂入りてえ、返り血浴びちまった」

確かに指先、シャツには所々赤い斑点がある

「気持ち悪い」

悪びれもなく最後に意識の飛んだ不良を蹴り飛ばし、金を財布に仕
舞いながら吐き捨てた

「大丈夫か？そのままで」

「うん、家まで我慢する」

そのまま俺の腕に自分の腕を絡ませて来た
少し珍しいその甘えに戸惑いつつも、道を歩く

「今日は何が食べたい？」

「んー、美味しいやつ」

「・・・ツヴィーベル・ズツペでいいか？」

「ザウアーブラーテンもな」

我が儘なんて可愛いものだ

絡めた腕を少し引き寄せ、家を目指した

いつものこと、いつものこと（神英）（後書き）

今度はちゃんと甘い書きます・・・多分・・・
アーサーは大食らいだといいなとか思ってます
そのくせ食欲なくすと全く食べない不健康がいいです
基本我が家の受けっ子は不健康ですね

□硝子の温室にて（神英？）（前書き）

パ
ラ
レ
ル
や
っ
ち
ま
っ
た
お

シ
ル
ヴィ
オ
と
アー
サー
は
無
自
覚
の
両
片
思
い
で
す

□ 硝子の温室にて（神英？）

ボタン、と古く分厚い本が閉じられた

本を閉じると同時に彼女も目を閉じたようだ

読み疲れたのだろうか

視力が悪いと目は疲れやすいらしい

目蓋を閉じたまま暫くして、その無情な目が開かれた

右に首を傾げていて、馬鹿にされている気分だ

だがおそらく、彼女は苛立っている

持ったままだった本が机に置かれ、彼女の手がパキパキと音を鳴らした

目が突然俺を見抜き、それから硝子張りの温室の外を見た

「・・・で、なんのお話をしようか」

俺がここに来たことを忘れていなかったことにほつとする

温室の中にある植物園に居た彼女を訪ねてから4時間

一本足の高い円形テーブルに、足の長い細い椅子（両方硝子製だ）

を眺め、周りを眺め、紅茶を飲み暇を潰した

一応客である俺を放置し読書に熱中する彼女に今更苛立ちはしなかった

客は客でも『招かざる客』なのだ、当たり前な反応と言えば反応なのだ

何回も紅茶のなくなったカップを弄るのがこんなにも空しいとは思わなかった

カチャカチャと陶器よりも高い音を立てるそれも硝子製だ

余談だが、この城にある硝子が割れるのを、俺は見たことがない

そしてそろそろ紅茶のおかわりを頼むべきか、と考え始めたところで、彼女が本を閉じた

朝早くに訪ねたので今は昼時だ

太陽は真上にあった

「今日は少し、聞きたいことがあるんだ」

「聞きたい？ そうなの」

「ごめんね、今日はあたしなんだよ、と困ったように笑った
まだ苛立っているのがわかった

彼女は気付いていないようだが

「アーサーの方がよかった？」

「いや、あいつに聞けば馬鹿にされるのが落ちだ」

「そんなことないよ」

真つ正面からこちら辺では珍しい黒い瞳に射抜かれた

真面目に話を聞いてくれるらしい

「・・・アーサーに貰った硝子細工の色が、碧っぽくなったんだ」
「碧」

言葉を反復し、訝し気に眉を顰め顔を左に傾げる

青く輝く耳飾りががちやりと音を立てた

全身を青に纏われている彼女は、この城お抱えの賢女の一人だ

青に金の装飾がある中で、右目の色は碧翠だ

その色のせいか固いイメージを持たれているが、実際はそんなこと
はない

彼女は至って明るく、不真面目なところも多い

碧を見たときに彼女を思い出したのは彼女の服やローブ、装飾品の
せいなのだろう

厳密には青と碧は違うのだが

「・・・碧かあ」

背もたれに寄り掛かり外を見て、暫く考え込んでいる様子だった

「碧はね、緑と青、両方の意味があるんだよ 知ってるよね？」

唐突に切り出された言葉に頷くことしか出来なかった

「青には希望、冷静、平和、なんてイメージとか、冷たい、悲しい、
とかいうイメージがあるのね、あたし達の中でも

まあ、纏めて言えば冷静沈着、知性的な色つてとこかな

一方緑は安らぎ、癒し、落ち着き、とかいう優しいイメージがあ

るね

この二色は多少似たところもあるから同類に見られることも多いんだ

もつとも、色の濃淡、明暗にも関係あるんだけどね」

ここまではわかるよね、覚えた？と確認される

イメージとしては俺も纏まっていた

「わかる」

「そう、よかった 続けるね」

青く塗られた爪が机をコツコツと軽く叩く

「この二色は神秘的ってイメージもある

で、結構珍しいんだよ

例えば、アーサーの魔法は青緑多いよね？」

「そうだな」

「他の魔術師は？」

「・・・お前とか、ピーターとか」

「うん、あとセシルも

魔法を使えるのはこの国には沢山居るけど、青緑はあんま見たこ

とないでしょ？」

希少なんだ」

「・・・そういえば」

あまり見ない色な気がする

「普段君は青緑の魔法を使える人が近くに居るからね

普通は青緑の魔法があるなんて知らずに死んで逝く人も多い」

「そうなのか」

「そうなの

まあすつごく簡単に言えば珍しいって意味な訳よ、青緑は」

「最初からそれでよくないか？」

「先入観は大切だよ」

邪魔にもなるけど、と彼女は言った

「で、ここからは君の話ね」

彼女が少し体勢を崩した

「その硝子細工は、どんなやつ？」

指で円を描くように空中を滑らせた

その仕草は、きつと形を訪ねたものなのだろう

「あー・・・、狼だ」

「どんな感じ？」

「・・・しっかりした体格の、つり目の狼だ」

「やっぱり」

賢女はしたり顔をした

「やっぱりって」

何がだ

賢女は少し眉間に皺を寄せ笑った

「それはあとで

君にとつて・・・そうだな、特別な感情つてある？」

「え？」

「今まで感じたことがない、こう、貴重だと思ってる感情」

「・・・さあ」

俺の曖昧な返事には特に反応しなかった

一度立ち上がると、温室の中央に誇らしげに咲き誇る植物の裏へと

回って行った

小さくブチ、という音が聞こえた気がする

「紅茶、おかわり要るでしょ」

まったくもって文脈のない言葉だ

確かに紅茶を飲み終わってから、2時間ほど経っている

机の中央に浮かぶ時計がそれを示していた

「ちょっと待ってね」

賢女の手には小さな白い実が摘まれていた

紅茶を素早く淹れるとその実を爪で引っ掻いた

白い皮が剥け、金色をした汁が滴る

紅茶の中にそれが垂れたのを確認すると、賢女はその紅茶を俺に勧

めた

「その実は？」

「美味しいよ」

なんだか外れた答えを返される

「ほら、飲んで」

執拗に紅茶を飲むことを勧めてきた

すでに俺に選択権はない

果汁を垂らしても色が変わらない紅茶を見つめる

独特の香りが鼻を掠めた

苛立つ黒に射抜かれながらそれを飲み干す

「別に全部じゃなくてもよかったのに」

苦笑いしながら賢女は再び席に着いた

きつと俺は彼女に毒を盛られても気付かないでこうして飲み干してしまうのだろう

アーサーに至ってはいつの間にか死んでいるような毒かもしれない

「じゃ、右手出して」

今更抵抗する意味もないので素直に差し出す

賢女の爪が掌の中心を叩いた

何か球体が飛び出す

「なっ」

「じつとして、変なのじゃないから」

明らかに変だとは思う

球体は薄青く輝いていた

俺にはそれしかわからないが、彼女には何か見えているのだろうか

「んー・・・やっぱり」

先程も聞いた呟きだった

「あのね、よく聞いてね」

普段は前髪で隠れて見えない翠が射抜く

「まず、君にとっての特別な感情ってというのはね、愛だよ」

「なんで」

「視たから」

賢女が説明するには、こうだ

先程の白い実には魔力を取り入れやすくする効果がある

それを俺が飲むと、俺の掌に魔力を注いだ

注がれた魔力は脳に直結し、再び掌に戻る

脳に直結したときにそれを感情を司る部分に引っ掛けておいた

そのまま繋がった状態で俺の掌から魔力を取り出す

そして、彼女が一番見やすい形――この場合は球体だが――にして、俺も知らない感情の底を覗いた、と

「下手すれば犯罪じゃないか」

「下手してないから犯罪じゃないし、この国にそんな法律はないんだよ残念ながら」

いい？シルヴィオ・バイルシュミット

君はね、愛、恋愛かな？それを神聖視してる

愛は神秘的で特別と、そう思ってるんだよ」

仮に俺がそう思ってたとして

「それは、間違いなのか？」

「感情に間違いも何もないよ」

だんだん彼女の苛立ちがなくなっていく

何に対して苛立っていたのだろうか

「君が言う硝子細工を作ったのはね、アーサーだよ」

「あの狼を、か？」

「うん」

前作ってるの見かけたから、と、賢女はそれは愉快そうに笑った

「使ったのはこの城の裏にある鉱山から採れる硝子だね

その硝子はね、少し特別な」

「どう特別なんだ」

「人の気持ちがわかる」

「またその手の話か」

少し肩が凝り、そこに手を当てた

賢女はそれを待つてから口を開く

「気持ちがわかるって言つても、半分以上はわかりにくいよ

まず、その硝子、つていうか硝子細工は、それを作った人に対しての君の気持ちを表す」

「・・・は？」

まて、つまりは

「わかつちやつた？まあ当たり前か

今回の場合、作ったのはアーサーだから、アーサーに対しての君の気持ちを表してるの

貰ったのいつ？」

「・・・一昨日だ」

「だったらいいけど

遠すぎる日に貰つてたら自覚があまりにも薄いつてことだからね

「・・・ん？今も薄いかな」

「おい待て、どういうことだ」

「わかつてるでしょ？」

賢女は軽く首を傾げた

「表された色は碧

碧つて言つのはさつき説明した通り、特別、貴重の意味

君がアーサーに対して君にとって特別な感情を持つてること

そして、君の特別な感情は『愛』だ」

賢女は意地悪そうに笑つた

「君は、アーサーに恋してる」

「あ、アーサーお帰り」

「ただいま」

すっかり暗くなつた頃に、アーサー——緑の賢者——は温室へと足を踏

み入れた

椅子の前で立ち止まり、賢女を見遣る

「マイラ、シルヴィオが来てたのか？」

「そうだよ」

マイラと呼ばれた青の賢女は読んでいた本を置いて微笑んだ

「アーサー、面白いことがわかった」

「なんだ？」

「多分ね、明日わかると思う」

賢女は立ち上がり、本を持つとアーサーの手を握った

「部屋に戻ろう、もうすぐご飯だよ」

「そうだな・・・、なんかにやついてるぞ」

「そう？」

マイラはふふ、と笑ったあとに口を開いた

「今言っのもどうかと思うけど・・・お幸せにね」

無自覚な初恋

□硝子の温室にて（神英？）（後書き）

このまま結婚しちゃいなYO　とか思ってるマイラちゃんでした
本当アーサーとシルヴィオ結婚してしまえ
というより竹林最近怒濤の更新ですねわあい
毎日ハスハスしてます

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5150n/>

短編集だよAPH!!(腐)

2011年10月5日00時32分発行